

78-98

世界の宗教

大日本文明協会刊行叢書

第20編

明治
43.11.15
購求

序

宗教は人間社會に於ける重大の事實なり。特に人間社會に於てのみ見る所の事實なりとす。禽獸は火を見てその恐るべきを知るもその靈妙不可思議なるを知らざるなり。唯その有形的現象たるを知るのみにして、その現象以上に靈妙不可思議なる勢力若くは法則の存在するを知らざるなり。人間最初の生活は野蠻人となく文明人となく禽獸の状態を距ること遠からざるなり。然るに人間が遂に禽獸と其趣を異にして、禽獸以上の生活をなすに至りしものは抑、何ぞや。人間の生活もその生理的本能に於ては禽獸と異ならざるのみならず、却つて彼等に劣れる點多しとす。たゞ人は禽獸に優る所の想像力及び推理力を有せり。此想像力と推理力とは意志の自由と相待つて、人間社會には禽獸世界に見るべからざる社會的現象を發生するに至れり。廣義にて言ふ文化即ちこれなり。この文化の中には、宗教、道德、政治、法律、文藝、技術、科學、哲學等を包含せり。而してこの諸要素の中凡て他の要素の端緒を開き、その萌芽をなしたるものは宗教なり。宗教は實に人

類をして禽獸生活の境界を脱し、人間進化の道途に上らしめたる大原因なり。夫れ人類は天地萬有の間、靈妙不可思議なる勢力ありて人間の運命を支配するを知り、この不可思議なる勢力に對して正當なる行爲をなし、以て人間の幸福を成就せんことを期待せり。宗教の起原は實にこの動機の中に在りと言ふことを得べし。たゞ最初は觀察の範圍狹隘にして推理の方法精確ならざるが故に、専ら想像によりて萬有界の勢力につき種々の妄想迷信を生じたり。古今の諸宗教概して皆然らざるはなし。而も吾人が見て以て妄想迷信となす所の宗教は、實に人間文化の基礎なることこれ亦疑ふべからざる事實なりとす。

宗教の中或は自然力を崇拜するものあり、或は人間の靈を崇拜するものあり。何れにしても人間が宇宙萬有の間に靈妙不可思議なる勢力あることを認知して、之に對する畏敬の念及び服従の行爲を表するの方法にあらざるはなし。その大に進化したるものを分類すれば多神教、一神教又は汎神教等の差別ありと雖、要するに宗教とは人間が宇宙の勢力に對する一種の信仰及び希望に外ならず。その勢力の森羅萬象に特異の顯現をなす所より見れば、宗教は即ち多神教となり、

その森羅萬象は自ら一致と調和とありて萬有矛盾せざることを自覺するとき、は、即ち一神教となり、而して靈妙不可思議なる勢力は宇宙に偏在し、物質界及び精神界に充滿せりと觀念するときは、即ち汎神教となること推知するに難からざるなり。惟ふに諸宗教一として絶對的に眞理なりと言ふこと能はざるべきも、又絶對的に誤謬なりと言ひ得べきものなし。將來此事實は益々人類の自覺する所となりて、世界の宗教に一大變化を生ずるとあらん。今や東西宗教を異にして文化融合せず、人類同化する能はざるの境遇に在り、宗教の形式や教義は如何に相異なるも、其對象たる目的物は同一にして且つ之に對する人間行爲の原則同一なること、即ち人類の宗教的意識同一なること愈々自覺せらるゝの日は東西の文化初めて融和し、世界の人類初めて同化の悦樂を享受することを得べし。今日の急務は先づ諸種の宗教の如何なるものかを知るに在り。本書收むる所の諸篇は早稻田文學士石橋湛山緒論以下エチプトの宗教まで、同大杉潤作ギリシアの宗教以下ベルシア教まで、同大屋徳城波羅門教以下朝鮮の宗教まで及び同小澤一(日本の宗教)の諸君の編纂に係り、我國に於ては未だ其類多からざる宗教上有益

の参考書ならんことを希望せり。

明治四十三年二月

大日本文明協會識

凡 例

一、本書は文明協會の主意に基づき、通俗にして平易なるを旨とせるが故に、必ずしも事實の詳密と理論の深玄とを求めず、寧ろ簡單にして明瞭ならんことを期せり。故に宿學が研究の素材たらずと雖、尙後進が参考の書たるべきを信ず。

一、題して「世界の宗教」と云ふ。有史以來の宗教を網羅せんが爲めなり。然れども原始人類の諸宗教に至りては略、その軌を一にし、悉く之を擧ぐるの煩に堪へず。就中特色あるもののみを選びし所以なり。

一、凡て學術上の用語は勉めて圓熟せる邦語を以てせしと雖、外國語にして未だ適切なる譯語を有せざるものは止むを得ず、原音を模するに假名を以てせり。

一、固有名詞は從來の慣例により、日本乃至支那を除くの外は悉く假名を用ひ

たり。然れども時に印度語のみは古くより慣用し來れる支那譯の文字を採
用せり。

編者識

目次

緒論

最近宗敎學の歸趨——宗敎の比較的研究——宗敎の渾一的研究
——宗敎の發生史的研究

宗敎の起源及び其本質

一 宗敎と不可知界との關係

知覺と存在——見神の實驗——不可知界の存否は宗敎の根本問
題にあらず——宗敎は人間のみに存す——慈愛の神は人間のみに
存す——神の概念と心の欲求——欲求は本にして對象は末なり

二 宗敎の起源は經驗統一の欲求に在り

人間の第一目的——生存と順應——順應の方法は經驗の統一——哲學と驚異、宗教と恐怖——その根本的説明——宗教の人性上に於ける起源

三 宗教の本質は全人生自然の絶對的統一に在り
宗教の特質と科學、哲學、道德の特質——部分的統一と絶對的統一——宗教進化の原則——正信と迷信との差別

宗教の原始及び其發達……………二四—五三

一 宗教と文明との關係

宗教の實質は文明の程度に應ず——低級宗教の遺存する理由——原始宗教を學ぶべき二大資料——舊宗教と新宗教——宗教史上の一大事實

二 原始人類の心理

感覺的意識——生靈的觀念——原人心理の劃一性

三 原始宗教の種類

自然崇拜——祖先崇拜——精靈崇拜——最上神崇拜

四 最古の宗教は孰れぞ

精靈說——靈魂說(スベンサー)——アニミズム(テトラ)——小自然說(レヴィエ)——大自然說(マクスミューラー、ハルトマン)

五 原始宗教の發達

大自然崇拜の發達——多神教の進化——宗教發展の三段階——部族的宗教——國民的宗教——個人的世界的宗教——客觀的宗教と主觀的宗教

バビロニア及びアッシリアの宗教……………五四—六九

バビロニア及びアッシリアの地理及び文明——部族的宗教——自然崇拜——動物崇拜と神の姿——精靈崇拜——國民的宗教——主觀的宗教の色彩を帶ぶ——ユデヤ教との關係

エチプトの宗教

六九—八八

ナイル河岸の民族——エチプトの文明と國民性——動物崇拜——その起源——自然崇拜と神の姿——神話の成立——自然神の性質——エチプトの一神教——寧ろ單一神教——エチプト人の未來觀——木伊乃——死人の書

ギリシアの宗教

八八—一〇五

太古のギリシア民族——その神——その崇拜——ミッセニア文明——ヘラス民族の侵入と宗教思想の混亂——ホーマーの宗教——ギリシア人の理想——文藝に現はれたる宗教思想——僧侶の宗教——貴族的宗教に對する反動——平民的宗教(秘密教)の勃興——傳說的宗教に對する哲學的批判——ギリシアの宗教哲學——キリスト教來たる

ローマの宗教

一〇五—一二六

ローマ人と其性格——ヌマの宗教——その神——神人間の關係——宗教即儀禮の觀あり——僧侶の介在を認めず——祭典の三種——家庭的祭典——農業的祭典——國家的祭典——卜占術——啓蒙的思潮——信仰の危機とキリスト教の傳來

ユデアの宗教

一二六—一三九

ユデア教の前身——カナアン人とイスラエル民族——イスラエル人の一神教——二民族の混棲——イスラエル教の異教化——デビームの一派——紀元前八世紀の豫言者——エホバは正義の神となる——モーゼの五書——バビロンの虜囚とその結果——エデキールの思想——ユデア教の成立——キリスト教の萌芽——ジブがこと——異教思潮の侵入——その結果——宗教的歴史

哲學——エッセンス一派——フィロソフの宗教哲學

キリスト教……………一三九—二三八

一 イエスの生涯

イエスの天職——其事蹟に就いて——イエスの自覚——傳道的
生活に入る——イエルサレムに上る——イエスの死

二 イエスの福音

イエスの宣言——神の國の思想——神に關する觀念——山上の
説教とイエスの倫理觀

三 原始キリスト教

イエスの弟子等使徒となる——イエス復活の信仰——タツスト
イエスの思想——信仰の辯護——原始キリスト教會の内訌

四 パウロのキリスト教

パウロの生涯——パウロの轉心——異國の使徒——世界的キリ

スト教——パウロが中心の信仰——クリスト觀——新人の思想

——人性論——聖靈に就いて——救濟の一路

五 カソリック教の成立

キリスト教歐洲に入る——ローマ官憲の迫害——ノステイジズム
の壓迫——哲學的批判——教權制定の必要——僧侶——信仰箇
條——經典——二大教會の對立——宗教會議——カソリック教の
東西分裂

六 ギリシア教會(正教會)

ギリシア教會の北方發展——ギリシア思想の産地——傳説主義
——正教主義——儀式主義——教會の組織——遁僧主義

七 ローマ教會(天主教會)

西歐の主權者——ローマ教會の威化——教會の三大思潮——カ
ソリック教——ラテン精神——オーガステインの小傳——その神學
——新教思想の先驅

八 宗教改革と新教の成立

宗教改革は如何にして起りしか——十字軍の遠征——文藝學術の勃興——北方民族の覺醒——ルーテルの先驅——ルーテルの小傳——その神學——スウィツルの宗教改革——ツウイングリーの思想——カルヴン教會——教會以外の自由思想家——舊教の對新教策——新舊兩思想の衝突に伴へる社會的擾亂——啓蒙的思想潮——第二の文藝復興——ロマンティシズムと宗教の歴史的研究

九 新教の主なる運動と教會

浸禮派——ユニテリアン——クエーカー宗——清教徒——理神教——ピリテイズム——メソヂスト——普及福音派——モルモン宗——救世軍

マホメット教……………二二八—二四八

モハメット以前のアラビアの宗教——モハメットの生涯——コーランに就いて——イスラムの意義——神の觀念——教徒の義務——博愛の思想——モハメットが傳道の眞意——未來觀——女性觀と結婚問題——學問を重んず——マホメット教國(サラセン帝國)の發展——東西の分裂——その滅亡とマホメット教の現状——學派と教會

ペルシアの宗教……………二四八—二七二

アールヤ人種とペルシア民族——インド・ライン民族とペルシアの宗教——歐洲人のペルシア教研究——ペルシア教の經典——アヴェスタに現はれたる宗教思想の瞥見——ゾロアスターに就いて——インドの宗教とペルシア教との比較——善惡の二神——ゾロアスター在世當時のペルシア——ガタ中の一物語——ゾロアスターの天職——其教理——其中に存する矛盾——其思想の

特色——マツデーズム——アフラとアフリマン——善悪二神の
従者——ツェンヌイダッドに就いて——其思想の由來——ヘルシア教
の世界宗教史に於ける位地——マニラ教の梗概

波羅門教及び印度教

二七三—二九五

一 古神話と波羅門教の源流

印度アールヤ民族——遊牧時代——農業時代——自然崇拜——
單一神教——交替神教

二 波羅門教の經典

四吠陀——リグ吠陀——サマ吠陀——ヤジュール吠陀——アタル
ヅ吠陀——ブラフマナ——スートラ——摩奴法典

三 社會制度

摩奴の法典の社會制度——四種の階級——波羅門——刹帝利——
毘舍——首陀——波羅門の生活に於ける三期——五明の解

四 教義

(イ)世界の成立と破滅——天地創造説——梵天——欲望——天地
と五大——開發と墮落——この間を四期に分つ——梵天の睡眠
——宇宙の還歸と轉廻——歴史的厭世觀——(ロ)輪廻轉生と解脱
——業の思想——因果應報——三徳——輪廻轉生の思想——摩
奴の法典に現はれたる輪廻觀——無常——梵天との合一——解
脱と至高善

五 印度教

波羅門教の衰頹と改革——新波羅門教——國粹論と復古説——
佛教の衰亡と印度教の興隆——吠檀多哲學——社會制度——職
業の二種——民間信仰の攝融——三神の出現——創造維持破壊
——その崇拜の様式——化現の思想——印度教の分派とその標
章——印度教の墮落

佛 教

二九五—三二三

一 教祖釋迦牟尼

釋迦の系圖——釋迦の幼時——納妃——煩悶——出家——法を
隱仙に問ふて得ず——苦行六年——五比丘——樹下の冥想——
成道——轉法輪——雨安居——三迦葉の歸佛——頻王の歸依——
傳道——四十五年の説法——入滅——第一結集と阿含經及び
律藏

二 原始佛教

小乘、大乘、顯教及び密教——佛説と非佛説——四諦の意義——苦
諦——集諦——轉廻——道諦——八正道——滅諦——十二因縁
——二世一重、三世兩重——三法印——諸行無常——諸法無我——
涅槃寂靜

三 小乗教の傳播と分派

阿輸迦王の出世——歸佛——傳道——迦賦色迦王の出世——二
十部の分裂——宗輪論の二十部——迦王の功業——第四結集——

——世親出づ

四 大乘教の二派

起信論と馬鳴——瑜伽と中觀——無着世親と龍樹提婆——中論、
十二門論、大智度論——百論——俱舍論——龍樹の著書——世親
の著書——空宗と有宗

儒 教

三二三—三六五

一 孔夫子

唐虞三代の思想——述而不作——孔子の傳——諸國流寓時代——
講學時代——思索時代——詩經と春秋——彼の晩年と門人

二 經典

四書五經——その成立——(イ)四書——大學、中庸と禮記——大學
——中庸——論語——三種の異本——孟子——その略傳——(ロ)
五經——詩經——書經——易經——春秋——禮記——孝經

三 教義

孔子、子思及び孟子——根本思想——仁——五常——忠恕——道——聖人と君子——性の説——修養法——知と禮——質と文——中の一字——道德と政治との關係——治國平天下——仁を行ふ順序

四 宋明の儒學

漢代の儒學——道教と佛敎——唐代の儒敎——宋代の氣運——宋學の成立——周子其他の諸子——(イ)二程子——二者の異同——程頤傳——大程の學系——形而上學——性説——修養論——程頤傳——程頤に對する地位——性説の訂正——理氣二元説——心の説——修養法——子と朱陸二子との關係——王陽明の先驅——(ロ)朱子——朱熹略傳——根本思想——本體論——宇宙論——性論——心と理氣との關係——修養論——(ハ)陸子——その略傳——その學系——朱陸二派の對立——格物致知を排す——

明心地——道心と人心との別を排す——氣質論——修養論——(ニ)王陽明——陽明の傳——心即理説——知行合一——良知の説——修養論

五 儒敎の現状

儒敎の墮落——民間信仰との結合——主なる信仰——(イ)自然崇拜——天象——空象——地象——(ロ)祖先崇拜——國祖——業祖——族祖——家祖——靈魂の不滅——(ハ)英雄崇拜——聖賢と功臣——忠孝節義の士——文廟と武廟——魔除神の崇拜——(ニ)幽鬼崇拜——祀典所載の神とその他の諸神——正神と邪神——淫祠——神祇——(ホ)廟祠——官廟と私廟——廟祠の分布——廟祠法——家廟——(ヘ)祭祀及び禮儀——祭祀を重んず——祭日——祭式の順序——祭官に就いて——民廟と祭祀

道 教

一 老莊哲學と道教
 支那古代の二思潮——儒と老——道教と佛教——道教の祖——
 隱者——傳統

二 老子

略傳——道德經——唐代の老子崇拜と謚號

三 經典

道藏——道德經——列子——莊子——抱朴子——過渡期の著書

四 教義

(イ) 宇宙の本體——無の思想——不可說——自然開發——玄又玄
 ——(ロ) 厭世と解脱——歴史的厭世觀——分化と墮落——絕學無
 爲と復歸說——理想郷——復初主義の批判——(ハ) 神仙と鍊丹——
 ——唐代以後の道教——佛教の影響と清淡の風——佛教との衝
 突——俗情の要求と長生不死の思想——仙人となる法——その
 山來——淮南子と葛洪——元君のこと——神仙の諸級——仙藥

の種類——陰陽道

支那の佛教

三八二—四八二

佛教支那に入る——翻譯時代——諸宗勃興時代——元朝の喇嘛
 教——明朝の禪と念佛——調和説の流行——禪講教の三派

一 毘曇宗

名稱の由來及びその意義——(イ) 所依の經典——俱舍論——婆娑
 論——發智論——六足論——俱舍論の参考書——(ロ) 傳譯——四
 阿含經——論部の諸傳譯——(ハ) 宗史——哲學的宗教といふべく
 佛教の入門と見るべし——玄奘以前——玄奘——玄奘以後——
 (ニ) 教理——三世實有説——俱舍論の要領——五蘊十二處十八界
 ——五位

二 成實宗

(イ) 名稱及び所依の經典——訶梨跋摩——成實論——(ロ) 傳譯——

羅什の成實論傳譯——(ハ)宗史——羅什及びその門下——南北朝時代——唐朝以後——(ニ)教理——四諦説と空論——俗有真空宗

三 三論宗

(イ)名稱及び所依の經典——中論——百論——十二門論——智應論——般若經より出づ——(ロ)傳譯——大般若經——三論と智應論——(ハ)宗史——文殊より羅什に至る——羅什の略傳——什門の四傑——吉藏の出世と新三論——以後の教勢——(ニ)教理——無所得の見——破邪顯正——真俗二諦に就いて——八不論——中道論

四 法相宗

名稱の由來——(イ)所依の經典——六經十一論——(ロ)傳譯及び宗史——彌勒菩薩——無着——護法——戒賢——真諦の傳と譯——玄奘の略傳と翻譯事業——窺基と圓測——その後の教勢——(ハ)教理——萬法唯識——唯識所變——八識——五位百法——輪

廻の主體——三性論と五重唯識觀

五 涅槃宗

(イ)名稱及び所依の經典——大般涅槃經——常住宗其他の名稱——(ロ)傳譯——小乗の涅槃經——大乘の涅槃經——十五回の傳譯と現存の涅槃經——曼無識——南本と北本——(ハ)宗史及び教理——慧觀の教判——法身常住説——萬有佛性——涅槃宗と天台宗

六 天台宗

(イ)名稱及び所依の經典——名稱の由來——法華經——天台法華宗——(ロ)傳譯——諸譯本——羅什譯と現時の法華經——(ハ)宗史——金口相承と今師相承——慧文——慧思——智顓——その著書——智顓門下の諸師及びその著書——衰退時代——復興——山家と山外——兩派の諸師——(ニ)教理——華天の二教——教判——五時——化儀の四教——化法の四教——三諦圓融論——念三千論——哲學的宗教

七 華嚴宗(地論宗)

(イ) 名稱及び所依の經典——華嚴經——その三本——龍宮の辨——
 (ロ) 傳譯——三回の傳譯——六十華嚴——八十華嚴——四十華嚴——
 七處八會——十地品——十地經論——地論宗——(ハ) 宗史——
 龍樹と華嚴經——翻譯時代——震旦の五祖——杜順と著書——
 智儼と著書——法藏と著書——澄觀と著書——宗密と著書——
 宗朝以後の教勢——(ニ) 教理——法藏の教判——法界緣起論——
 四種法界觀——十玄門

八 律宗

(イ) 名稱及び所依の經典——戒律宗——律藏——四分律宗と四分律——
 (ロ) 傳譯——最後の教訓——五部の律藏——支那に傳はりし律本——
 法顯と義淨——(ハ) 宗史——唐朝以前の律宗——道宣の出世と律宗の三派——
 道宣の著書——法部宗と東塔宗——(ニ) 教理——三派の成體論——
 止持門——作持門——比丘と比丘尼

の戒——二十毘度

九 禪宗

(イ) 禪宗の系統と傳來——不立文字、教外別傳——金剛經——傳譯——
 達磨の傳——第二祖——片岡の達磨——(ロ) 牛頭禪北禪及び南禪——
 第二祖以後の法系——法融と禪宗の分裂——牛頭禪の六祖——
 神秀と北禪——慧能と南禪——五家七宗——(ハ) 南宗の分派——
 滄仰宗——臨濟宗——曹洞宗——雲門宗——法眼宗——唐及び五代の禪宗——
 宋朝以後の宗勢——(ニ) 臨濟宗の分派——黃龍派——楊岐派——
 虎丘派と大慧派——松源派と破庵派——靈隱派と北澗派——
 諸宗融合

十 念佛宗

(イ) 名稱——淨土往生——阿彌陀佛——淨土教——(ロ) 所依の經典——
 諸經所讚多在彌陀——三經一論——(ハ) 傳譯——無量壽經——十二回の傳譯——
 觀經二回の傳譯——阿彌陀經の三譯——淨

土論の傳譯——(ニ)宗史——六朝時代——廬山の十八賢——善導の一派——曇鸞と著書——道暉と著書——善導と著書——その他の諸師——宋朝以後の念佛宗——(ホ)教理及び教判——念佛の諸流——厭離穢土欣求淨土——樂土と救濟——難行易行——聖道淨土——漸教頓教

十一 密 教

(イ)名稱及び所依の經典——秘密教——真言宗——十住心論——祈禱——五部秘經——兩部の大經——(ロ)傳譯——安宅神咒經——孔雀王經——義淨——善無畏——金剛智——不空三藏——(ハ)宗史——龍猛——龍智——曼荼羅——唐代の密教——一行——その著書——一行、不空以後の密教——(ニ)教理——支那に組織的教理なし——一種の祈禱宗——空海の事業

喇 嘛 教

四八二—四九〇

一 由來及び現狀

佛教就中密教の一派——西藏の勃興——佛教西藏に入りボン教と合す——喇嘛教の傳播——達賴喇嘛と西藏の政治

二 西藏の喇嘛教

端美三波羅、印度の文明を輸入す——乞哩雙提贊王と喇嘛教祖——譯經事業——喇嘛教の僧制と政教一致——西藏佛教の特質——尼波羅の秘教——ボン教との融合——祈禱教——中論、瑜加二宗の札轡——念佛宗——喇嘛教の分派——紅衣派と黃衣派——歷朝と黃衣派

三 達賴喇嘛の相續法と蒙古の喇嘛教

化身の信仰と黃衣派の相續法——紅衣派の相續法——蒙古の喇嘛教と忽必烈——庫倫派と多倫伯派

韓國の宗教

四九一—五〇二

一 儒・教

儒教の傳來——三韓時代の儒教——高麗の儒教——李朝の儒教——學制——寺子屋式

二 佛 教

半島の佛教——高句麗の佛教——百濟の佛教——新羅の佛教——高麗の佛教興隆——李朝の佛教——半島佛教の宗派——教禪二派——主なる寺院

三 外 教

耶蘇教と日本佛教——大院君の耶蘇教に對せし態度——耶蘇教の現状——日本佛教の傳道——大谷派——淨土宗——日蓮宗——眞言宗——迷信の跋扈——淫祠邪教

日本の宗教

五二一—六五四

一 原始神道(我國祭祀の淵源)

神道とは如何なるものか及び原始神道の意義——原始神道の成立時代と史料——古傳の説話思想の概観(古傳の説話的系統)——古傳説話の性質——古傳の宗教史的觀察(原始神道の宗教的性質)——古傳の宗教的觀念(禍福罪惡の觀念)——神格の性質善惡兩性の神と其本國及び主宰の神——保護神と惡靈——盟誓——太古の民間信仰——原始神道の成立と本質——太古祭祀の状態(歷代祭神の隆盛)——神社の造營

二 漢籍渡來の教化と佛教初傳時代

(1) 渡來期の儒教と支那文教の影響——日本宗教史上に於ける儒教の位置——儒教の渡來——儒教の起源及び本質並に初傳漢籍の思想——儒教初期の傳布と支那文教の影響——神祇思想に於ける懷疑的傾向——(2) 初代佛教及び同時代の神儒教——佛教の宗教史的研究の方針(宗教史の特殊性)——佛教の起源——佛教の歴史的傳説と内質——初代佛教佛教と支那文物の傳來——初傳

佛教の教義——聖德太子の位置

三 三教並立期、奈良及び平安朝

(イ) 三教並立期の宗教——大化改新の原因と三教並立の次第——並立期の三教の状態——(ロ) 奈良朝の宗教——南都佛教昌隆期の状態——南都六宗——當代佛教の中心——儒學の奨励——政教混淆の弊——(ハ) 平安朝の宗教——平安遷都と佛教の新氣運——天台眞言二宗の開立——道教に就いて——天台宗と山王一實神道の教旨——眞言宗と兩部神道の教旨——東台兩密關係と異同——平安朝の漢學と祭神等——僧官僧位等の流弊、思想上の發展——平安朝佛教の特色——形式的宗教の弊害と宗教思想の過渡期、淨土門の漸興——融通念佛宗

四 宗教的苦悶と佛教開發の時代

宗教的苦悶と佛教の新勃興——新興佛教の各宗——新興佛教の傳布期(新興佛教の傳布)——神道獨立の運動——五山の沿革と儒

學勃興の淵源——應仁亂後佛教の状態——唯一神道説——カソリック教の傳來と弘布

五 佛教の沈滯と神儒兩教の興起

時代精神の變化と徳川幕府の宗教政策——江戸武家時代の宗教(耶穌教禁制と天草、島原の亂)——佛教の状態——徳川時代文教勃興の趨勢(朱子學派の徳教)——又藝復興期の状態——陽明學派の徳教——復古學派の徳教——折衷學派と考證學派——勤王論の興起——國學と神道の復興——神道復興の諸派(徳川初政の神道と羅山並に惟足)——社家神道又は外宮神道——垂加神道——復古神道の興起——復古神道の門戶——考證的復興——復古神道の大成——復古神道の一轉——重遠、篤胤等の神道説の本義と典據——水戸派の神道——新神道の興起——神儒二道家の排佛論

六 新時代の宗教的覺醒の一瞥

明治維新と其以後に於ける宗教状態——基督教の傳道——歐化

的傾向の反動と國民的自覺——宗教的覺醒の氣運——現在の各
教派

目 次 終

世 界 の 宗 教



本書の目的は、主として東西古今の諸宗教に就き、其起源發達、特質を記述するに在り、目的の専ら記述に存するが故に、必らずしも近世學者の敢へて試みむとする如き、統一的説明を與ふるに専らならざるも、亦單に諸の宗教を一堂の中に陳列せんとする者にはあらず、原始時代より文明社會に至るの間に、内容と形式とは極めて複雑なる分化を経過し來り、千態萬狀殆ど歸一し難きの觀あるも、近世學者の研究は、差別の中に同一を見出し、渾沌の間に法則を見出し、純雜相異り、高下相錯る世界古今の諸宗教を、聯絡あり交渉あり統一あるものとして理解せしむるに至れり。これ蓋し最近半世紀間に於ける學者の努力の致す所なりとす。抑、

(1)

(2)

世 界 の 宗 教

西洋人が東洋諸國民の文明に注意を拂ひ、細心の研究を積むに至りしは、極めて近代の事に屬し、従つて東洋の宗教が純粹且つ公平なる科學的精神を以て考察せられ始めしは、輒近四五十年來の新現象なり、單に東洋の宗教と言はず、希臘羅馬の宗教に對する研究法も、此頃よりして漸く新路に向ひ、歐米人の未だ嘗て知らざりし異邦の諸宗教も亦新たな興味を以て研究し始められたるが、其結果宗教に關する歐米人の知識は爲めに一變し、從來基督教以外の宗教を以て悉く誤謬野卑なる異端外道となしたる傳說的妄信は、全く過去の舊夢となりたり。近世の所謂比較宗教學者は、此妄信を啓くに與りて最も力ありしと謂ふべく、其事業は主として世界の各地より宗教に關する事實を蒐集し、之が異同を比較對照して或は分類し、或は歸納するに在りたり。世界の宗教を見るの眼は、これに依つて先づ新に開かれたるの觀を呈しぬ。然るに近代に至り、比較宗教學は更に一步を轉じ、世界の諸宗教は一個の「歴史」として取扱はるゝの氣運を馴致せり。即ち從來比較宗教學の名を以て現はせし所の研究は、専ら宗教歴史レリジョン・ヒストリーの名を以て呼ばるゝに至りたり。而してこれ素より單なる名稱の變化に止らず、宗教歴史學は宗教

稱

論

の研究法に一新生面を開ける者にして、諸の宗教は最早比較對照に依りて異同を辨別せらるゝのみならず、全體として一個の有機的聯絡を有する人類活動の一方面をなす者なりとして理解せらる。換言すれば宗教學現在の目的は、世界の諸宗教を個々別々の現象として取扱はず、人類の「一宗教」レリジョンが時處と民族とを異にしたるが爲めに分化して斯くの如きに至れるの事實を説明せんとする者なり。故に諸の科學が總て複雑なる現象に法則と統一とを與ふると等しく、輒近の宗教歴史學も亦複雑なる宗教現象に法則と統一とを與へんとしつゝあるなり。されば世界の諸宗教は千態萬狀擧げて數ふるに堪へざるも、最早秩序なき渾沌たる現象にあらずして、由來、理性を離れざる人類生活の一大部分と了解せらるべき者なり。方今世界第一流の宗教學者にして、諸の宗教間に存する聯絡契合を認めず、又其人類共通の精神の異れる顯理なきを認めざる者は、殆ど一人も之なしと謂ふ、恐らくは過言にあらざるなり。

(3)

宗教にして既に人類生活の一方面なりとせば、その起源發達も亦人類進歩の一般法則に遵據すべきと、亦略易きの道理たらざるを得ず。即ち宗教も亦他の文化

の方面例へば美術、工藝、制度、法律と等しく、ある原始の状態より生長の一路を辿り來りし者にして、その發現の初期に溯り、その性質根源を研究するは、科學的興味、の深遠なる者存せずんばならず。宗教とは何ぞや、その發生の起始に於ける心理的胚種は何ぞや、その胚種の人生に於ける意義は何ぞや、又その發生の状態は如何、發生以後の進化は如何の問題は、世界の宗教を渾一的に考察せんとする者の必らず知得せんとする所なるべし。故に著者は本書の主題に入るに先ち、章を重ねて説く所あらんとす。

宗教の起源及び其本質

一、宗教と不可知界との關係

茲に所謂宗教の起源とは、詳しくは宗教の人性上に於ける起源と稱すべし。抑宗教とは人の如何なる性情に基づき、其起りし所以のものは何ぞや、てふ問題を考究し、以て其本質の概論を試みんとするものなり。換言すれば吾人が本論に於て

企てんとする處は、宗教の心理的乃至論理的の考究にして、不可知界の存否如何と云ふが如きは、その眼目にあらず。然れども普通宗教てふ言葉は、屢、何等か吾人の耳目に觸るゝ能はざる神、又は未來世と云ふが如きものに、關係あるものとして思惟せらるゝが故に、まづ順序としてこの問題に一瞥を與へんとす。

本來吾人は不可知界の存在を必ずしも肯定する能はざると共に、又必ずしも否定すること能はず。かつて哲學者バークレーは、存在すとは知覺せらるゝの謂なりと云ひしが、この言葉は實に吾人が今、以て眞理と認めざるべからざる處なり。例へば此所に一の机ありとせんか、吾人が此所に机ありと云ひ得るは、吾人がそれを視、又はそれに觸るゝが故にして、若しこの室を出て、直接その机を視、又はそれに觸れ得ざる他の室に至り、猶かの机彼所にありと云ひ得るは、今直接その机に觸れ、又は視ること能はざれども、その室に至れば必ず視、又は觸るゝ事を得ると信するが故なり。されば即ち吾人の或物が存在すと云ふは、吾人がこれを知覺し、經驗し得るか、若くは覺知し、經驗し得ずとも、ある方法を以てすれば必ず知覺し、經驗し得るものと信する所あればなり。斯くのごとく吾人が存在すと云ひ

得るは、吾人の意識に上り得る所の物に限れり。然らば吾人の意識し得ざる所のものは存在せざるかと云へば、それは必ずしも存在すと云ふ能はざると共に、又存在せずとも云ふこと能はざるべし。若し此所に先天的の盲者ありて、色彩及光の如きは存在せずと云はゞ、人誰かこれを嗤はざらんや。若し宇宙間に、吾人人類が現に今有する感官以上に多くの感官を具備し、さらになほ高等なる精神活動を有するものありとせば如何。吾人が現に視、且つ聴き、及び觸れ、乃至意識し、經驗する能はず、従つて存在せずと云ふ處のものを、或は意識し、經驗し得るやも知るべからず。況んや世には普通に吾人が不可知界と稱する所のものを視たりと云ふ人あり、而して斯くのごとき人の決して尠からざるに於ては、吾人普通人は何等の權利ありてか、自らの經驗し能ふ範圍以外のものは存在せずと斷言するを得んや。故網島梁川氏はその著『回光錄』(四三三—四七七頁)「見神の意義及び方法」の章に記して曰く「讀者よ、予は今極めて冷靜なる態度に於て當時の光景を回憶しつゝ、此の筆を執りつゝあり、總じて古來見性と云ひ見神と云ふが如き光輝的事象は或は何等かの機縁に觸れて發起するならひなるが予が實驗の場合に於て

も亦實に然りき。予は當夜一燈の下筆を執りて心を澄ましして何事をか書きつゝありき、而してその燈下に筆の動くてふ眼前の現象が正さしく一大事觸發の機縁とはなりけるなり。予はこれ迄同じ燈の下に同じ刻眼に同じ無心の氣分にて筆を取りしこと幾十百回なりしを知らず、而かも未だ曾て一たびも如是見證底の事に逢着したることなかりけるを、機縁の純熟と云ふものにや。當夜は不思議にもわれみづからの燈下の筆の運びがはつと思ふ機に忽然として一大超絶的神秘とはなりぬ。何故とも分かず如何なる道筋ありしども知らず、唯だ直下に唯端的に今の今まで尋常一様の思ひに筆を動かしつゝありし我れが倏ちに躍々として、我れならぬ我となり、正さに是れ天地の實在が其の最深奥の根抵より、直ちに當下眼前の光景を操れる筆の動くてふ眼前の事象と天地深奥の實在との間に端的の聯絡のつきたる個の不可分、不可透、不可測、不可説、不可思議の意識には撞着しける也。當の刹那は實に我れならぬ我れとはなりぬ。爾時筆を動かせる我れは最早今の今まで慣れ親しみたる現實の我れ風習の我れにあらずして直下に宇宙の中心より火の如き活事實として現前し來たれる一大靈的活物な

りし也……謂はば予は當の刹那予みづからを一種の電線として大いなる天地的心靈の電流に感觸したるなりと「これ實に綱島氏が一夜忽然として、その天地の秘奥ともいふべき不可知、不可思議の一角に靈然として駢び存したるなり……一言すれば即かず離れざる微妙なる關係に於いて、神と予と相冥感神交したるもの、正さしく此の折の意識の真相なり……而して予はこの一場の光耀的實驗を根據として、我等人類には普通に謂ふ所の五官もしくは七感以外に見神感とも名づくべき一種の靈感直覺の存在することを自證し得たるが如くに思ふなり」と勿論斯くの如き事象には心理學上種々なる説明の加へらるべき餘地はあるべし。或は單なる妄想なりしやも知るべからず。或は其認めて神とせし處のものは、其實はさる物にあらずして、他の何物をかしかく思ひ謬りしものなるやも知るべからず。然れども斯くの如きは、ただ今日吾人が然らざりしや否やと推し得るに過ぎずして、その果して妄想なりしや謬想なりしやは、誰人と雖未だ斷言し能はざる所なり。綱島氏が謂へるがごとく、吾人人類には所謂見神感と云ふが如き機關を存して、神秘不可思議なることを覺知し得べき能力有るやも

計られず。ただ普通人にはその能力が或特別なる條件の下か、またはある特別な時期にのみ、現はるゝに至るものなるやも知るべからず。かの普通に迷信と謂はるゝ所の妖怪、變化、鬼神、幽霊の如きは人屢これを排して存在すべからずとなす。而してそれ等は多くの場合に於て、單に恐怖心その他の心理作用より起るものなるべしと雖、さればとて斯くの如きものは存在せずと必ずしも言ひ得べきか。或は普通には吾人の眼に觸るゝことなきも、何等かの理由に依りて時として現はるゝものなるやもまた知るべからず。ウィリアム・ゼームス教授の名著の“The Varieties of Religious Experience”中(第三、第十六、十七講)には近代に於ける神秘的經驗の豊富なる實例を挙げたり。有名なる雜誌『評論の評論』主筆ステッド氏は、近年來幽冥界との通信を企てつ種々なる實驗を試みつゝありと云ふ。其實験中には吾人の輕々しく解釋し去り得ざる、又到底夢想だにも及ばざる種々不可思議の現象を示しつゝあるがごとし。要するに、今日吾人の智識を以てしては斯くの如き神靈魂と云へるものゝ存在するや否やは分明せざれば、たゞ之を疑問の裡に残し置くより外はなし。然らばこの不可知界の存否と宗教との關係如何、吾人の

意見を以てすれば不可知界の存否如何と云ふが如きは、宗教に取りて重要な問題にあらず。世には宗教は何等か吾人以外に超越せる不可思議力、即ち神と云ふが如きものなき時は、必ず成立せざるべきものと思惟せる者あれども、廣く世界に於ける多くの種々なる宗教を考察するに、必ずしも斯くの如き神を標せずとも、宗教の成立するを知る。佛教の中には明かにこの事實を示せるものあり。吾人は此處に不可知界と宗教との關係を考察するに當りて、先づ注意せざるべからざる二個の事項あり。第一は、宗教は何故に人間にのみ存在するやとの事なり。吾人は人類以外の動物、乃至礦物植物の意識状態を付度すること能はざるが故に、彼等に果して宗教を信ずるの心ありや否やは疑問なれども、諸學者が、犬猿の如き最も吾人人類に近き高等動物に就いて研究せる結果に據れば、彼等には殆ど吾人が稱して宗教と云へるが如きものゝ存在せざるは勿論、又これを論ずる心も有せざるものゝ如し、常識を以て考ふるもかの礦植物又は下等動物に宗教乃至宗教心ありと信ずる能はず。若し多少にても有りとするれば、そは高等なる動物ならざるべからざれども、それとて吾人が稱して宗教と云へるが如き種々な

る儀式考案を含みたるものありや、例へば猿のごときは、種々の點に於て吾人人類が有する精神活動に類似せるものを有するが故に、或は宗教心と認めらるべきもの存在するやも知れざれど、到底吾人が有するが如き高尚複雑なる心的作用は存在せず、されば嚴確なる意味に於て、宗教乃至宗教心と稱すべきものは、人類に限りてのみ存在せるなり。これ何が故ぞや、第二は神の慈悲又は愛と云ふ所のものも、獨り人間にのみ限られて存在せることなり。宗教によりては、或は惡魔鬼神と云ふが如き世界に害毒を流すべき者の存在を信ぜざるにはあらざれども、尠くとも高等なる宗教例へば基督教の神と云ふ者の如きは、宇宙を創造し、而して慈悲愛憐を以てこれを支配する者となせり。しかしながら吾人が若し人類と云ふ立脚地を離れ、冷靜に世界の状態を考察せば如何、吾人の生命を維持するが爲めに、缺くべからざる多くの食物は動植物にして、之を殺傷して以て生存上の用に供するなり。一見此世界は所謂弱肉強食の觀あるを免れざれども、人間は比較的幸福なる生活を持続しつゝあるなり。轉じて此人間に食はれ使役され打ち斃さるゝ所の動植物の立場よりして云へば、この世界は決して樂觀を容さざ

るなり而して人間は獨神の慈悲われ等を愛護すべしとなす神は我々人類にのみ限りてその深厚なる慈悲を垂るゝものなりや何故に他の動植物をも救済せざるや吾人は此二個の事項を考へ來りて次の結論に達すべしされば第一の事項よりは人間には他の動植物と異り若くはそれ等よりも進みて宗教を特に要とし之を求め有するに至れる所以のものを具備せると是なり第二の事項より吾人は更に眞に神の如き者の存在するありとも吾人が之を存在すとなして之を信仰の標的となすに至ればこれ單に神存在すと云ふにはあらずして之に吾人の或る欲求を被ぶせ吾人の欲求に應ずる所以の性質を附加して神は斯くの如くに存在すとは謂ふなり吾人は彘きにパークレンの言を引用して吾人が稱して存在すと云ふ所のものは吾人が覺知し經驗し若くは覺知し經驗し得べしと信ずる所の者なるを言へり然れどもその覺知し經驗するとは鏡裡に物を寫すが如き謂にはあらずして例へば等しく太陽と云ふも吾人が指して以て太陽と爲す所のものは之を視る眼思ひ浮ぶる心によりて必ずしも一樣ならず即ち天文學者は之を一の天體として觀ずべく農夫は之を豊凶の支配者として觀

るべし冬時嚴寒に當り朔風肌を裂くが如き時には太陽は最も慕はしき者なれども夏日炎熱熾くが如き時には吾人寧ろ之を厭ふなるべし換言すれば凡そ吾人の觀る所のものは悉くわが主觀の欲求を加へて之を意識の上に寫象する者なり所謂不可知界に就いても亦斯くの如し即ち特に人間に宗教を求むるの欲求ありその欲求を満足すべき對象として不可知界存在の信仰起りたり者なり本來神なる者ありて眞に存在すともそが只存在すと云ふのみにては吾人にとりて何等の價値なき者なり而も吾人に何等か斯くの如きものを求めこれに據りて満足を得んとする欲求存するが故に神に對する信仰は人生の最高價値を置く所とはなるなりされば欲求は本にして對象は末なりこれ宗教の對象が古來千變萬化したる所以にして或は天體及び動植物の如きものを以てその崇拜の對象としたるあり或は人類を超越して自由意志を有する人格的の神をその對象としたるものあり或は涅槃眞如と云ふが如き非人格的のものを以てその對象としたるものあり對象は斯く異れども宗教の本質はここに在らずして彼に在り即ち人類心内の欲求に在り宗教の事を研究する者先づ此根本見地に就

いて開眼する所なかるべからず。

二、宗教の起源は經驗統一の欲求に在り

吾人は既に宗教が人間の欲求に依りて生じたる者にして、其對象の如何に拘はらず存在する者なるを語れり。今や進んで此宗教を生める所の欲求は果して何物なるかを考察せんとす。吾人の研究に依れば經驗統一の欲求、即ちこれ宗教の人性上に於ける起源なり。以下之を説明せん。

近世進化論の教ふる所に依れば、總て生物は境遇に順應する事に依つて、其生存を保續する者なり。例へば熱帯産の動植物と寒帯産の動植物と、その形骸性情を著しく異にするは、各その産地の境遇に順應する爲めに生じたる現象にして、今日人類が有する諸の感官機能の如きも、亦畢竟此順應作用を營む所の機關たるに外ならざるなり。人間の第一目的は生存に在り、此點に於ては人間とアミイバ

と別に懸隔する所なきなり。然るに生存せんが爲めには境遇に順應するを要し、境遇に順應せんが爲めには相應の機關を要す。生物に高下の相違あるは、要するに此機關の分化の度合、能力の多少に依るものなり。現今生物界に於ては人類の腦髓を以て最も進歩せる機關なりとすべし。蓋し他の動植物の機關はその作用著しく限定せられ、境遇に突然の變化を生ぜんか、容易に之に順應し難く、忽ち生存を危ふするに反して、人類の腦髓は所謂知情意の作用に依り、隨時隨處、反省思考を運らして其宜しきを得、如何なる艱苦に遭逢しても之に順應する所以の道を策するの妙能を有す。例へば動物は其有する毛皮に依りて寒暑を防ぐも、今若し熱帯動物を移して寒帯に居らしめんか、熱帯に順應すべく作られたる毛皮は寒帯に順應すべくもあらず、忽ち凍死の止むべからざるに至らん。植物に於けるも亦然り。然れども若し熱帯の人をして寒帯に移らしめんか、その困難を感ぜんこと言を俟たざるも、彼は動物の如く毛皮に依つて寒暑に當らず、腦力を以て之を防ぐが故に、忽ち衣服を製り、之を纏ふて以て凍死の厄を免れん。人類と他の生物と境遇順應の機關を異にすること斯くの如し、而して人類腦髓所産たる學術

技藝宗教の如きも、畢竟一種の境遇順應作用にして、生存を保続する所以の者に外ならず。

由來哲學は驚異に始まり、宗教は恐怖に起るとは、學者の屢唱ふる所なるが、人類は驚異若くは恐怖の感起す所以のものは何ぞや、之を起さしむる外物の存在すと云ふのみには未だ以て説明と爲すに足らず、其外物の人心に於ける關係を明かにするにあらずんば充分に満足すべからず、例へば茲に光ありて突然空中に現はれたりとせよ、之が爲めに人心の驚異を起し、又恐怖を懷くは何故なるか、通常之を解して只見慣れざるがためなりとするは、いまだ以て説明の宜しきを得たる者と謂ふべからず、何故に見慣れざる者が人をして斯かる感覺を起さしむるか、これ考察を要する第一點なり、又人は單に此種の光に接し、驚異し恐怖するのみならず、進んで其何物なるやを究め知らんと、の念を生ず、考察を要する第二點なり、思ふに此種の驚異恐怖は突如として光の現はれたるが爲め、境遇の變化を來せしにも關せず、此光の何物たるやを知らざるが爲めに、此新しき境遇に順應する能はずして、此處に困惑を生じたる結果なり、本來境遇に順應すと云ふ

は單に受働的の意味に解すべきにあらず、これ境遇をわれに順應せしめ、之をして我生存に適せしむることなり、此改造を好良に行ひ得る者は即ち適者にして、生存上の危惧を免るゝ者なり、然らば人は如何にして此境遇に順應し、若くは境遇を改造するやと云ふに、曩にも一言したる如く、専ら腦髓てふ機關を以てする思考作用に依り過去の經驗を統一して、何等か一定の設想を立て、この設想に據して、其境遇に處するものなり、然るに今突如として光の現はるゝあり、而もこれ從來遊據し來りし設想にては理解し得べくもあらず、過去經驗の統一觀念を以てしては最早之を説明し得ずとせば、人は忽ち境遇順應の方法を失ひ、如何に其身を處すべきかに困惑せざるを得ざらん、此困惑は一轉して生存の不安を感ぜしめ、驚異となり又恐怖とはなるなり、而して此光を説明し、此不安を脱せんとする種々なる努力は、生存保続の必要上より従つて起り來らざるを得ず、即ち宗教起り、哲學起り、又科學も起り來たるなり、而してこの種の事實は獨、原始時代にのみ起るにあらず、又驚異恐怖の對象は自然なるあり、人事あるあり、凡て人類の從來遊據したりし所の方針設想、即ち過去經驗の統一が、新しき境遇の出現の爲

に動搖し、若くは崩壊したる時に於て必らず現はるゝ所の者なり。大宗教家大哲學者大科學者は常に此種の機運に際して起る。

約言すれば宗教も哲學も科學も其目的とする所は安心立命に在り、而して安心立命を得んには過去の經驗を統一するの要あり。宗教の人性上に於ける起源は即ち此に在り、之を外にして他に求むべくもあらず。然らば宗教と哲學科學の差違は何處に存すと謂ふべき乎。これ吾人の更に考究を要する所なり。

三、宗教の本質は全人生自然の絶對的

統一に在り

經驗の統一は宗教の起源なりとするも、科學哲學道德の如き亦これ經驗の統一なること上來述ぶるが如しとせば、宗教と是等の者と如何なる本質的差別ありと見るべき乎。普通に指摘せらるゝ所の差別なる者は果して正當なりや否や、吾人は進んで之を吟味せざるべからず、而して吾人の研究の結果に依れば、宗教の

他と異なる所は、その人生自然に亘る全經驗を絶對的に統一するに在りて、他の科學哲學道德等は、一方面的の經驗を部分的に統一するに過ぎず。本質上の差別は全く茲に在り、而も從來の學者は多く宗教の特質とするものを以て、彼我の差別を立てんとしたり。吾人の見る所にては其說多くは當らざるなり。

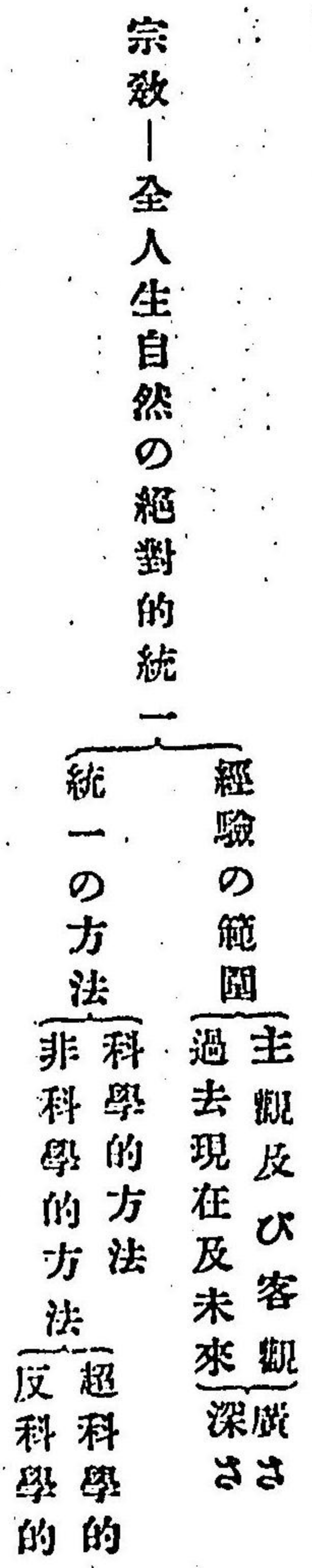
謂ふ所の宗教の諸性質とは何ぞや。(一)安心立命、(二)歸命、(三)解脱、(四)眞摯敬虔喜悅の情緒等是なり。然るに安心立命は凡ての人事の等しく目的とする所にして、敢へて宗教に限らざること既に陳ぶる所の如し。蓋し過去の經驗を統一して將來の方針を立て、之に遵據して行動思考するは、人類生活の最も普通なる形式にして、此形式に則る所の生活は即ち安心立命の境涯に外ならざるべければなり。畢竟安心立命とは經驗統一の結果境遇に順應して、安固の生活を營みつゝあるの謂に外ならずして、此經驗統一が獨り宗教の獨占にあらざるを思はゞ、直にこの理を了得し得べきなり。歸命と云ふも亦略これと相同じ。例へば科學の如きもある原理を立て、之に服従し歸命して經驗の統一作用を行ふ者にして、他の信仰は必らずしも宗教に限ると謂ふべきにあらず。解脱と云ふも亦然り。人生自然の煩

業より脱して安心を得との意味に於ては、科學道德と雖自ら目的とする所あり。例へば引力の法則を立つるは雜然たる自然現象の煩累より脱して、之を單一に理解せんとする者にして、是亦一種の解脱と稱し得べし。眞摯敬虔と云ふも、道德現象若くは學藝研究者の態度に於て屢これを見出し得べく、喜悅の如きも、宗教上の信仰に限らず、例を近きに求めば、數學難問を解釋し得たる刹那の喜悅の如き、宗教的のそれと果して性質上の差異ありや否や疑はしと謂ふべきなり。斯く思惟し來れば、元來宗教の性質とする所は、其實すべてのもの、特質なり。然らば是等は全く宗教の特質と沒交渉なるべき乎。恐らくは然らず。科學道德等皆各安心立命其他の性質を有するに拘らず、吾人が是等の者の宗教に於て殊に顯著なるを見るは何故ぞ。又科學道德が往々にして宗教の域に入りたりと稱せらるゝ所以の者は何ぞ。これ大に考慮を要する所なるべし。之を事實に徴するに、科學道德の宗教的と稱せらるゝ場合は、その立つる所の原理が絕對的價值を有し、之を措いて他に信頼すべき者なしとせらるゝを常とす。元來科學道德は、人類經驗の部分的統一なり。故に十分の信頼を置くに足らず、道德を修して悲境に陥れ

ば人自ら嘆嗟なきを得ず。科學の法則は亦往々にして人心を傷ましむるとあり。而も道德を修めて規矩を超えず、圓通無礙の自在を感じ、科學を究めて、宇宙の大法を樂むに至れば、是既に十分の信頼を科學道德に置ける者にして、單に人間經驗の一部を之に依りて統一したるにあらず、全部の統一に達したる者なり。蓋し全部の統一に達せずんば、斯くの如き絕對的満足を感じ得ざればなり。即ち知るべし、科學道德が往々にして宗教の域に入りたりと稱せらるゝ所以の者は、經驗の部分的統一より絕對的統一に進みたる結果なるを、斯くして吾人は宗教の本質を捕捉し得たるを思ふ。即ち宗教は全人生自然の絕對的統一なる是なり。此一原理を以てすれば如何なる經驗をも統一して、人類の證據すべき設想方針を與へ、以て境遇順應の妙用を營ましむるに足ると云ふ者は、即ちこれ宗教なり。且つ宗教の原理は之を現在に施して過たざるのみならず、三世十方に通じて悖らずと信ぜらるゝ所の者なり。從て此原理を把持する主觀の態度、即ち歸命、眞摯、敬虔といふ者並に之を把持する結果として現はるゝ主觀の狀態、即ち安心立命と云ひ、解脱、喜悅と云ふ者も、科學哲學道德のそれに比較すれば、自ら熱烈強大と

なりて、共通の性質にてあり乍らも、宗教に於て特に顯著なるを認め得る者なり、全人生自然の絶對的統一にてあらば、凡てこれ宗教なるが故に、其統一原理の人格神なると、涅槃なると、自然力なると、精靈なるとは宗教たるの資格に於ては別に問ふ所なかるべきなり。只此理は直に宗教の進化を説明するに足るものにして、時代を異にし、國情を異にし、文明を異にするに従ひ、所謂全人生自然と見做さるゝ所のものも亦異なる。されば原始人は其日常の生活に直接重大の關係ある自然界を以て其經驗の全範圍となし、後世に見るが如き人生の疑問を感ずることなきが故に、其宗教も亦素樸なる自然神の原理に依つて統一せらる。之を要するに宗教の進化は、人類經驗の擴大増進即ち文明の進歩に伴ふを原則とする者なり。此理は猶後章に於て説く所あらんが、世に所謂正信迷信の區別の如きも、もと絶對不變の標準あるにあらずして、時代の科學的智識に反する者あれば、これを稱して迷信と呼ぶを常とす。而も科學的智識なる者も、本來進歩の中途に在る者にして、完全無缺とは謂ひ難く、之に反する者悉く迷信なりと論じ得ざる場合なきにはあらずるも、大體に於ては斯く判断して大過なかるべし。只科學的智識に

反する者と、科學的智識を以て説明し得ざる者の間には、明白なる區別を置かざるべからず。前者は之を迷信と呼んで可なるも、後者は必ずしも然らず。人類の宗教的經驗の中には、科學の充分に説明し得ざる者少からず。宗教的真理に伴ふ神秘の如きも、其一にして、仔細に吟味すれば、これ必ずしも非經驗的性質の者にあらず。況んや單なる妄想幻覺の類として排し去るべきにあらずるも、世の所謂識者すら往々これを諒解し得ざる者あり。すべての神秘的經驗を一括して迷信の部類に投ぜんとするは、思はざるの甚しき者なり。されど正信迷信の區別は、單に其科學に合致するや否やに依りて定めらるべきにあらず。宗教は全人生自然の絶對的統一なるが故に、宗教的信仰を評價せんには、其統一せんとしたる經驗の範圍と、其統一の方法とを吟味せざるべからず。今左に之を圖表せん。



此圖に依りて試みに定義を下さんか。正信とは經驗の範圍に於ては廣さと深さと共に時代文明の高標準に達し、統一の方法に於ては、科學的若くは超科學的方法に依る者はなり。迷信とは前者に在りては廣さ深さ共に時代文明の低標準に止まり、後者に於ては反科學的方法を取るものは是なり。何れにしても宗教の高下は其標準を時代の文明に求めざるべからず。此理は次章に入り益々明白ならん。

宗教の原始及び其發達

一、宗教と文明との關係

宗教の原始及び其發達を攻究せんと欲せば、先づ宗教と文明との關係に就いて明確なる觀念を有するの要あり。如何なる國民に在りても、宗教の實質は其國に於ける文明の程度に適應することは是なり。然らば高度の文明を有する國に於て、野卑なる宗教の猶旺盛なるは何故ぞとの反問起らんか。蓋しこれ宗教の一大特質たる保守的永續性を示す者にして、或種の信仰の一次び移植せられ若くは發

生するや、年處を重ねるも容易に死滅せざるの事實を想へば、別に怪しむを須むざるべきなり。單に年處を重ねると謂はず、時としては政治的迫害の激烈なるにも拘らず、依然として社會のある一部に數十百年の生命を保つ者すらあるなり。宗教が此一大特質を有するは如何なる理由に依るか。想ふに是宗教の根源の深く人心に根ざして、其信仰の本體は人間の最高價值を置く所なるが故ならん。宗教既に此保守的永續性あり、故に文明の進歩に拘らず、低級なる宗教の依然として痕跡を社會の一部に留むるを見ると、雖此所謂社會の一部は進歩せる時代文明と殆ど交渉する所なき、また假令交渉する所あるも、極めて皮相なる關係を有するに過ぎざる部分なるべくして、進歩せる時代文明を享樂する智識階級と、低級の宗教を信奉する下層民衆とは、素より日を同じうして語るべきにあらず。低級宗教の信奉者は即ち前代に於ける低級文明の繼承者にして、新時代に於ける文明人士は、又自ら別種の宗教を有せずんばあらざるなり。蓋し宗教は文明の内部生活に外ならずして、凡ての時代、凡ての國民の内部生活、根本精神は、其宗教に依りて最も明白確實なる表現を示す者なり。さればこそ學者往々にして、宗教史を充

分に會得すれば、これ即ち文明史の全體を知得したる者なり」とも揚言するなれ。吾人は先づ文明と宗教との此根本的必然的關係を認知して、而して後初めて宗教發達の秘義を解し得べきなり。

此故に宗教の原始を明知せんには、先づ文明の起源に就いて學ぶ所あるを要す。人種學者の研究に依れば、今日の開化國は、其有史以前に於て既に蠻民の生活したりし所にして、金屬時代の前に石器時代の存せると事實疑ふべからざるなり。即ち凡ての文明人が其歴史の發程に上りし以前に於て、多くの自然人は或は洞穴に棲居し、或は湖上に生活したりしなり。無智にして頼りなかりし是等蠻民が、如何にして火を作り、武器を作り、獸類を養ひ、家屋を構ふるに至りし乎、これ自ら文明史上の一大研究部分たるべくして、今敢へて考究せんとする所にあらずも、只一事の知らざるべからざるは、人類が其原始に於て野蠻未開なりしも、不斷にして慘憺たる外國との闘争に依りて、漸進歩を贏ち得たる者なる事是なり。古人の多くは黄金時代を遼遠の過去に置き、人類はある開化の境涯より墮落して、今日に至れる者と思惟したりしも、此説は今や全然棄てられて復た何人も信奉

する者なし。諸の民族は進歩の速度に遲速あり、又その進歩の外的影響に依れると、内的自發に依れるとの差異あり。且つ諸民族の中には進歩の殆ど謂ふに足らざるものありと雖、兎も角も未開の状態より漸次向上したるの一事は疑を容れざる所にして、高度の文明より低級の文明に墮落したるの事實明確なる者は、全世界中只僅に埃及及西部亞弗利加なる二三の蠻族あるに過ぎず。たゞ多少の進歩はあるにもせよ、殆ど文化の開發を見ずとも言ひ得べき蠻民は今日なほ存し、文明社會の中にも又未開人の遺物と認め得べき風俗習慣信仰傳説を存す。原始時代の人類生活に就いては直接に之を知るべき材料あるにあらざるも、此二大事實、即ち現代の蠻民と、及び古代の遺物とに依りて之を察知し得る者なり。メソポタミアの『古代法』、タイラーの『原始的文化』、ラボックの『文明の起源』の如きも、畢竟この二大事實を根本資料として、原始社會の文明史上に新光明を投じたるものなり。宗教の原始を學ぶの法は、亦文明の原始を學ぶの法と同じ。凡ての開化國が嘗て一たびは蠻民の住所たりしとせば、凡ての開化國の原始宗教は、必ず蠻民の宗教たらざるを得ず。蠻民は一として宗教を有せざるものなければなり。尤も野蠻暗

黒土地を往來したる旅行家の中には、宗教を有せざる蕃族の存するを記述し
 かる者なきにあらざりしも、其觀察の誤謬に過ぎざるは、其後事情の判明するに
 従つて漸く證明せられたり、而して文明の進歩が宗教の進化を伴ふと既に前述の
 如しと雖、新しき宗教の勃興は必ずしも古き宗教を破滅に歸せしむるものに
 あらずして、前者の根底を社會人心に植ゑんが爲には、必ず後者と調和するを要
 するなり。換言すれば新宗教は凡て舊宗教に順應し得て初めて生長するを常と
 す。これ宗教發達史の一大法則なりとも謂ひ得べく、如何なる宗教も、此法則の支
 配以外に立てる者なし、世界的大宗教の如きも、皆夫自身の原始状態の儘に存在
 する者には、あらずして、之を信奉する者の意識なると否とに論なく、必ずや其
 先驅者たりし未開人の宗教的遺物を繼承して、不知不識、之を其宗教組織の中に
 包容し居るものなり。ラング氏の「神話、式典、及び宗教」(Langs' "Myth, Ritual, and Relig-
 ion")なる一書は極めて豊富なる實例を掲げて、如何に舊宗教の通俗的要素が之
 に代りし新宗教の中に殘存せしかを説明して、殆ど餘蘊なきを見る。此故に世界
 的大宗教に就て學ばんとせば、先づ之に先ちて其發生地を占領したる原始的蠻

民の宗教を學ばざるべからず、而して蠻民の信ずる諸の宗教を通觀するに、其類
 似の著しきこと研究を重ねるに従つて益々明瞭し、これ等の者は個々別々の孤立
 的宗教にはあらずして、殆ど一大家族をなすの觀なくんばあらざるなり。即ち蠻
 民の諸宗教と謂はんよりは、諸の蠻民の一宗教と謂ふの適切なるに、若かざるな
 り。

二、原始人類の心理

原始人の宗教を理解せんには、先づその心理に通ぜざるべからず。蓋し宗教は人
 類心意の欲求に發する者なるが故に、原始人の心的作用を理解するは、其宗教を
 理解するの準備段階なればなり。原始人に普通なる心的作用の第一は、稱して感
 覺的意識と謂ひ得べし。元來人間の事物を思考するや、全然感覺的の要素より離
 脱し得ざると、今も昔も變らざるなり。如何に抽象的なる言語を用ふるも、實際吾

人の意識に現はるゝに際しては、一切の事象、常にある具體的の形状を取る者なり。これ本來人間の有する概念なる者は、感覺を通じて認識し得たる事實に基づき之より抽象せられし者にして、感覺と全く相離れたる者にあらず、且つこれ素感覺的事實の統一に役立つべき者にして、若し全然之と相離るゝ者なりとせば、既に存在するの用なきものなければなり。然れども未開人の心理作用が常に感覺的意識に依ると云ふは、二の理由に基づく。即ち未開人に在りては、其意識作用が常に概念的ならざると其一なり。主観客觀の區別なきと其二なり。其結果として未開人のある事物に對するや、事物其者の性質と、其自己に與ふる快苦の感情との間に、何等の差別を設くる能はず。全然兩者を混淆融和して意識の上に現はし、一切の思考、此意識の作用に基づくと見る。此感覺的意識と伴ふて原始人の第二の心理的特質とすべきは、一切の自然物が彼等自身と同じく生氣を有すと思惟するとは是なり。彼等は、自己と外圍との異なる所以を知らざるが故に、獨動物のみならず、樹木泉石も等しくこれ生氣を有する者にして、宛ら小兒が其愛し又は惡む所の自然物に感情意思あるが如く考ふると同じく、一切の自然物に對したり。

しなり。素より原始人の間に感情意志と云ひ、若くは自己を以て他物を類推すと云ふが如き明確の考ありしにはあらず。只主客を没却し内外を一に視るの心理作用は、彼等をして自ら萬物皆生くるの思想を懐かしむるに至りしなり。此思想を名づけて普通にアニミズムと云ふ。此語は時に依り人に依り、廣狹種々の意義に於て使用せらるゝも、此原意を多く離れざるなり。

太古原始人の心理既に斯くの如しとせば、其思考の渾沌として、凡ての空想も事實と信ぜられたる事改めて説くを須むざるべきも、人類心意の作用は自ら定まる所ありて、此空想の中にも或種の規律と一貫の條理は存し、従つて原始人の心理より生れ出でたる宗教も、諸の蠻民を通じて到る所に相契合し相會通する所ありとは、ラング、ダイラー、レヴィ、ユ等諸學者の皆一致する所なり。現存の如何なる蠻民も諸神の存在を信じて之を崇拜せざる者なく、如何なる國民もその歴史のある時期に於ては必らず亦然りしなり。これ確に人類心意作用の劃一を證明する者、同時に宗教は、決して或種の論者が誇張する如き帝王若くは僧侶の人工的發明品にはあらずして、世界を理解し、欲求を満足し、經驗を統一せんとする人類

原始以來の努力の所産たるを了知すべきなり。

三、原始宗教の種類

然らば原始的信仰の對象たりし神々の性質種類は如何、現存蠻民の宗教を研究したる結果は、此問題に關して饒多なる資料を供し、その餘りに多趣多様なるに驚かざるの觀あるも、要するに原始宗教は蠻人の心理に應じて個々の感覺的物象を其神々となし、且つそは人間と等しく生命力を有する者と考へられたり、今之を彙類して左の四種と爲す。

- 一、自然崇拜 (イ) 大自然 (ロ) 小自然 (Nature-worship, great or small)
- 二、祖先崇拜 (Ancestor-worship)
- 三、精靈崇拜 (Fetich-worship)
- 四、最上神崇拜 (Worship of a Supreme Being)

一、自然崇拜

原始人の生活は天然の壓迫に左右せらるゝ事多く、彼等の安危禍福が天候の如何に繫ると、文明人の想像以上ならん。雨や風や、日光や、皆これその苦樂を支配する原動力たらずんばあらず。而もかれ等は是等外界の現象も自己と同じ感情意思を有すと信じたるが故に、之と交通せんとの思想を起すは、極めて賅易き徑路と謂ふべし。彼等は食を欲し、暖を欲するが故に、食物を實らしむる雨、暖氣を齎らす所の太陽が、彼等に幸福を與ふるの力ありと思惟するに至る。雷、電、天地、日月、風、湖水、大洋の如き、また略相似たるの理由に依りて、彼等の親類畏服を得るに足る。宗教學者レヴィ氏は之を呼びて「大自然の崇拜」と名づけたるが、蓋し後段説く所の「小自然の崇拜」と相對す者なり。神話の起源も茲に在りて、最初は自然物夫自身が生ける者として崇拜せられ、或精靈若くは或人格が其中に住めりとは考へられざりしなり。後代に於ける大宗教の中にも、其實體少なからず、例へばジエビターは全く天空を表し、ヘリオスは太陽を表はし、女神セレネは月を表はせるもの、吠陀の神話に於ても、其神々は、當初單なる自然物夫れ自身に過ぎざりしなり。

「小自然の崇拜」とは河、泉、樹木、洞穴、穀物、果實、岩石及び動物の崇拜を指す。而して原始人の心理は此場合に於ても、是等の物象は凡て人間と同じく生氣ある者と考へられ、後人の泉に水神ミヅノカミ躍り極トライクに山姫住ヤマノメノミヤむと云ふ如き想像を運らすには及ばざりしなり。例へばナイル河、ガンジス河の如きも、神話的精靈ありて茲に住むの故に神聖視せられしにあらざりして、河夫れ自身が神聖視せられたるなり。諸の動物は概ね一度は崇拜を受けたる者なり。

(二) 祖先崇拜

自然崇拜とは全然異りて、人類が其家庭生活に於ける経験より生み出せし者、即ち祖先崇拜なり。死者の崇拜、祖先の崇拜は、凡ての古代人民に見る所、現存の蠻民亦之を實行す。原始時代に在りては人々死の何たるやを知らず、彼等は之を夢と同様視し、類推に依りて解釋を下せり。即ち死は一の長夢にして、靈魂肉體を離れて遠國に遊び、旅行終りし日、再び歸生する者と信じたるなり。而して靈魂は其形狀肉體に類するも薄くして且つ軽く、行動自由にして如何に小さき罅隙も透過し得ざるはなく、其顯現は種々の標徴に依つて之を知覺し得べしと思惟せられ

たるが、最古の蠻民は死者の靈魂を仇敵視し、其家に歸り來りて自己を煩はしめざらんとて大に警戒の方法を取りしが、斯かる恐怖心よりする者と然らざるとを問はず、近ける靈魂をして其居所に安せしめんが爲、之を歎ばしめんとする手段は種々に講ぜられたるなり。例へば葬式に際しては死者の地上に於て用ひたりし物品を其左右に置き、且つ食物と武器とを添ふるのみならず、死者之を待つとて奴僕を殺して同伴せしめ、妻女すらも亦命を棄つると珍しとせず。兎も角も人間は其肉體の死後も猶生存を保つて、小信仰は古代人民の間に普遍的なりし者なり。而も靈魂が仇敵として取扱はれたりとせば、宗教の特質と言はるゝ人間以上の威力との感應心通なる者とは、甚だ異なる事情ありと謂はざるべからず。蓋し蠻人は靈魂に對して何等の希望を繋かず、従つて之と交通せんとするの念慮を有せざるを以てなり。されど死後の生活に對する信仰は、寧ろ恐怖以外の情緒を含むを常とす。本來死者に對する自然の愛情は、全然消失すべきにはあらず。祖先は「家」を代表する者にして「家」てふ者の前には、個人は服従の義務なきを得ず。而して死者の靈魂は畢竟「家」の傳統を支持する者なるが故に、生存者は之を神聖

視せざるを得ず、されば、祖先崇拜は一見只恐怖の感情以外、何物もなきかの觀あるも、審に察すれば此服従承順の情緒も亦確に其間に作用するを見るなり。

三 精靈崇拜

上來説述したる自然及び祖先の崇拜に在りては、崇拜の對象たる太陽と云ひ、靈魂と云ひ、動物と云ひ、皆物象夫れ自身の中に、崇拜を受くべき性質を具有する者なり。然るに南亞弗利加のある地方に於ては全く之と趣を異にして、崇拜の目的たる者は、全く内有的性質の故に崇拜せらるゝにあらざりて、只此目的物が或他の精靈と關係を有するが爲に、崇拜を受くるに過ぎざるを見るなり。即ち石にもあれ、樹にもあれ、木の枝、鳥の爪、羽毛、齒牙、人工に成れる物品など何にてもあれ、苟くも目に新なる總ての物をみなこれ精靈を宿す者なりとて崇拜し、之に向つて祈禱を献げ、非常の熱心を以て何等かの利益を求め、時としては之を強ふるが爲に鞭つ事すらあるのみならず、功驗の顯著ならざるを見るや最早無用なりとて之を放擲し去るなり。之を名づけて“FETTERISM”と云ふは、素葡萄牙語の“fetter”より來り、製造若くは、人工の義なり。十八世紀の頃、葡萄牙の水夫、亞弗利加の

の西岸に於て土民の崇拜物を見、呼ぶにこの語を以てしたりしが、後佛國學者に採用せられて宗教學上の慣用語となりしも、エムト其他の學者復た之を用ひて天賦若くは大自然の崇拜を指すに至りし爲め、意義渾沌として曖昧不明の嫌なきにあらざるも、茲に解説したる如く、自然物内有的性質の故にあらざるに宿れる精靈の故を以てする崇拜、即ちこれなりと見るを以て最も當を得たりとなす。言葉の充分なる意義に於て、これ果して宗教と稱し得べき者なりや否やは一個の疑問たるべきも、精靈崇拜者は假令宗教を有せざるにもせよ、少くとも之を求めつゝある者と斷言するを得るなり。

四 最上神崇拜

以上三種の神々の外に最上神崇拜(Worship of a Supreme Being)と目すべき者あり、尤もそは自然神若くは精靈と相對立して、別に一類の神の觀念を形どるに足らざるやの觀なきにあらざるも、蠻民の諸宗教を通觀すれば、その中特に重視せらるゝ神ありて他の神々は往々之に従屬する者あるを見るべし。假に之を呼んで最上神となす、仔細に之を吟味すれば、必らずしも特殊の神にはあらずして、自然

神の中の或者より脱化し來りて殊に重んぜられ、遂に唯一最上の位地に立つに至れる者、其大部分を占む。北米のインデアンは、一大精靈を崇拜す。これ實は天空に外ならずして、日月の如き自然物は之に奉仕する者と見做さる。その他にも天空を以て最上神に擬する者少しとせず。太陽も亦時として最上神とせられ、ある蠻民は雷電を崇めて此位地に置く。されど又他の一方を見るに、自然神とは全く異なる根源を有する最上神もあるなり。即ちある蠻人は日月を崇拜し且つ精靈に奉仕するに拘らず、善良なる精靈なる者ありて凡ての上に支配權を振ふとなす。太平洋諸島に信ぜらるゝ最上神は、新西蘭に於てはタンガロア (TANGAROA) の名稱を負ひ、創造せられざる永遠の造物者と云ふが如き哲學的意味を寓せり。恐らくは基督教の影響を蒙りし者ならん。又ズル人の「最も古き物」なる語は、或は第一原因と云ふが如き者を指示するかの觀なきにあらざるも、仔細に之を吟味すれば、全く最古の人、人類共通の祖先を意味するを見る。北米の土人中には野兎、香鼠等を以て最上神と崇むる者もあり、斯く最上神の性質は頗る多様にして、其出處明白ならず。之を以て直ちに原始的、一神説を肯定する資料となすには

足らざるも、人間心意の素樸なる本能が、その神々を崇拜しつゝあるに際してすら、其中の一を擇んで、特に最上神となし、之に對して特別の尊信を傾くるを見れば、以て人類の思想の一神的傾向を察知するに難しとせざらん。

四 最古の宗教は孰れぞ

原始人にして如上四様の崇拜をなすとせば、その中の孰れが最も早く行はれ、世界諸宗教の原始根源となりたるか。この疑問に對して學者の説未だ一致する所を見ず。最近に至るまで精靈崇拜を最古の者なりとする説廣く行はれ、蠻人は偶然の出來事に依りてある物象に精靈ありと信じ、之を崇拜するを初めとして、漸次に樹木、山嶽、河川、湖水、太陽、星辰を崇拜するに至り、最後に天を以て最高精靈となし、之より一步を進めて一神教に入る者なりと解せられたり。此説は一見眞實を得たるの觀あり。宗教進化の歷程も之に依りて明白に説明し盡せるに似たる

も實は決して然らず。人が小石や樹枝の如き物體を以て神となし、超自然的の勞力其中に潜在すと信ずるは本來何故なるや。小石や樹枝が蠻人をして斯かる思想感情を起さしむる動機を包含すとは到底推想し得ざる限り、神てふ觀念は必ず他の何處よりか學び得たる者ならざるべからず。故に近頃の學説は精靈崇拜を以て、之より一層高尚なる宗教の墮落せる者にして、最古の崇拜は自ら別に存すとなせり。蓋し文明とが宗教と盛衰の徑路を同じうすとせば、文明に退歩ある如く、宗教も亦退歩ありと見ざるべからず。精靈崇拜以前他に、より高尚なる宗教ありと云ふも、決して宗教全體としての向上進歩を否定する者にあらざるべし。然らば人間若くは死者の靈魂崇拜が最古の宗教なりしか。スペンサー、タイラーの二氏は相異なる論據より、等しく此説を唱へたり。スペンサー曰く、凡ての宗教の發芽は逝ける祖先の奉祀に在りと、この説をして眞實ならしめば、古代人民の崇拜したる日月、星辰、樹木、泉石、皆これ死者の靈魂を宿す者なりとの結論に達せざるべからず。而も印度若くは希臘の神々は、果して聖化せられたる祖先として了解せられ得べき乎。これ何人も容易に首肯し得ざる所なるべし。タイラーはス

ペンサーと異り、アニミズムを以て太古の宗教を説明せり。謂へらく人間の肉體を離れて別に靈魂ありとの思想が、やがて人間以外の物象にも適用せらるゝは頗る自然の徑路に屬す。主客内外の區別なき原始人の心理に於て、此事あるは怪しむを須むざる所なるべく、萬有悉く生活すとの思想は夙に原始人の特質たるなり。即ち人間の肉體は其内に宿れる靈魂の力に依りて活き且つ働くが如く、外界自然の活動もまた其内に宿れる生靈の力に依るとは、蓋し其素樸なる論理なるべしと、茲に至りて吾人は三種の靈魂あるを認めざるべからず。其一は祖先の靈魂、其二は自然物の中に宿る靈魂、其三は獨立の靈魂これなり。然らばスペンサー説の能く解釋し得ざりし希臘印度の高尚なる自然神の如きも、此説に依りて理會し得べし。如何と云ふに、タイラーは直ちに之を肯定して曰く、多神教に見る所の高等なる神々も、畢竟人類の生靈的に萬有を理解せんとする思想系統の中に各、其位地を占むる者なりと、即ち會長若くは君王の群民の間に於けるが如く、偉大なる神々は諸の小さな生靈の間に立ち、日も、空も、星も、人間の靈魂を有すると同じく靈魂を有するが故に、生ける存在物たりと考へらる。斯くてタイラーに

依ればこの生魂説に於て古代宗教全體の起源を見出し得べきも、只如何なる徑路を経て、生靈崇拜が多神教の大なる神々を生むに至りしかは、タイラーも未だ充分に説明し難しとなせる所なり。而してタイラー説また一大弱點を有せずんばならず。若しこの説を眞實ならしめば、自然の中にも生靈ありとの信仰が確立せざる間は、自然の威力が人間の崇拜を誘ふに足らざる者なりと認めざるべからず。而も事實は必らずしも然らず、自然は直ちに原始人の感覺に訴へて深甚なる印象を起し、驚嘆、恐畏の情緒を喚起せずんば措かざるなり。この深甚なる印象は所謂蠻人共通の心理作用たる感覺的意識にして、必らずしも外物に生靈ありと云ふが如き明確の觀念にはあらず。此點のタイラーの説も亦完全なりとは認め難く、何等か修正の要あるを見るなり。

今こゝに一言を要するはアニミズム (Animism) の思想是なり。曩に野蠻人の心理を説ける條に之を説明し置きたるが、宗教學に於ては通例タイラーの用ひたるよりも一層廣き意味に於て此語を用ふるを常とす。多くの大宗教は生靈の原始的崇拜より起りて諸神の崇拜まで進歩したりと認めらる。生靈と諸神と異なる所

は前者が極めて不明晰不定形なる存在なるに反し、後者が明確なる人格的性質を帯べる點に在り。且つ前者は恐怖の情を以て時々の崇拜を受くるのみなれど、後者は信頼感謝の情緒を以て不斷の崇拜を受く。故にある學者の如きは、神々の現はるゝに至り初めて宗教なる者あり、夫れ以前には宗教なしとさへ唱へたり。蓋し諸神信仰の未だ現はれざるや、無形の存在物に對する祈願の様式は、専ら咒術及び淨祓の類に止まれど、諸神信仰現はれて初めて禮拜の域に達し、神々と感情意志の交通を冀ふの行事を生むに至れるなり。普通にアニミズムなる語は明確に諸神崇拜と區別せらるゝ生靈崇拜を指すに用ひらる。古代人は兎も角も生靈ありて自己を圍繞すと考へたるが、此意味よりすれば、アニミズムは疑もなく大宗教中の或者の起源をなす者なりと斷じて不可なきを見る。(上來所説中、精靈と靈と其の世の「Spirits」なる英譯の譯と知るべし。Fetichismの場合には精靈と云ふ。Ancestor-worshipの場合には多く靈魂と云ふ。Animismの場合には生靈と云ふ。)

最古の宗教に就いては異説猶紛々たり。レヴィユは思へらく、樹木、泉石の如き小自然は最古の神々にして、大自然の諸勢力を神と崇むるに至りたるはその後の事なりと。之とは正反對に大自然の諸勢力を神と崇むるの宗教が原始的にして、其

他は後に現はれたりとの説も碩學の間に行はれ、マックス・ミュラーの如き、エドワール・ト・フ・ン・ハルトマンの如き、その説明相同じからざるも、結局はこの説に歸す。吾人はその孰れに従つて可なるべき乎。以上述べ來れる精靈崇拜、靈魂崇拜及び自然崇拜の中、第一の精靈崇拜は最古の者ならずして一層高等なる宗教の墮落せる結果なりとは最早學界の定説と謂ひて可なり。靈魂崇拜と自然崇拜とは、其孰れを先驅とせざるべからずと謂ふの理あるを見ず。由來蠻人の思想は渾沌錯雜を極むるが故に、其經驗を統一するに唯一不變の基礎概念ありとは信じ難し。原始の家庭的崇拜の對象は、自然物より抽出せられたりとは認め得ざると同時に、大自然力の崇拜の如き、亦之を家庭的崇拜の對象たる靈魂の信仰に基づくとは解し難し。所詮此兩者は蠻人の心理に共存し得べき者なれど、死者の靈魂に關する信仰の一念を除外して考ふれば、大體宗教の原始は自然崇拜に在りと斷ずるも、大なる誤謬なかるべし。而して蠻人の感覺的意識と生靈的觀念とを併せ考ふれば、大自然及び小自然の崇拜は同時に發生し得べしと思はる。蓋し大小の區別は學者便宜の爲めに設けたる所にして、蠻人は大小の間に性質上の區別を立て

たりとは考へられず。大自然も小自然も等しくこれ彼等自身と一樣の生靈的存在と感ぜられ、此感覺が具體的に意識の上に現はれて崇拜心を喚起する者なれば、時としては大自然の勢力が此崇拜心を喚起する事もあるべく、又時としては小自然の現象が之を喚起する事もあるべく、兩者は同一程度の文明に於て、並存し俱に現はれ得るものなり。前後の論は畢竟蠻人の心理を解するに文明人の思考法を以てする結果たらずとせず。自然の大小に依りて人心に對する印象を異にし、人心の内部に於ける經驗統一の作用に、差異を生ずるに至るは、蓋し宗教の原始的事象にあらずして發達の第一歩を進めたる後ならん。發達は即ち分化を意味し、現象を區分彙類する如き、亦これ分化作用に外ならざればなり。

五 原始宗教の發達

(一) 大自然崇拜の發達

原始宗教は互に相錯綜して存すれども、就中最も重要視すべきは自然崇拜、殊に大自然崇拜なりとす。蓋しこれ文明社會に於ける大宗教の萌芽なり。今その發達の徑路を簡単に説明せん乎。天地、日月、雨、嵐、雷、電等の崇拜は、蠻人の宗教にも存する如く、現存の文明的宗教の中にも殘存す。各民族は其獨特なる空想力と命名法とに依て、是等の自然を壯嚴にし、以て崇拜の對象となす。命名は事小なるに似たれども、實は決して然らず。名稱其者は崇拜の目的物に對する新なる興味を喚起する者にして、且つ同時に之を永續せしめ普及せしむるの妙用をなす。例へば月は時として角狀を呈するが故に牝牛と命名せられたりとせよ。牝牛の性質は蠻人にも熟知せらるゝが故に、新名稱を緣として月を生物化し、牝牛の有する性質を移して月の性質となし、更に多くの空想を附加して之を崇拜の目的物とするに至るべし。これ即ち自然物の動物化にして、所謂神獸同視時代の (Zoomorphic) 現象なりとす。之に尋て來たるは、神人同視時代 (Anthropomorphieage) なり。尤も此兩時代に前後を劃するの可否は一個の疑問にして、兩者共に文明の同一程度時代に在りと見るを穩當とすべし。月にして一度動物化せられ牝牛の名を得んか、日と

之と相對して牡牛の名を受くるに至り、日と月、即ち牡牛と牝牛とは、空天を相趁ふ者とせらる。之やがて神話成立の端緒なり。更に他の一例を引かんか。天は高きに在りて萬物を掩ふが故に父と呼ばれたりとせよ。然らば地を母とし、人類を子とするの思想は容易に起り來たるべく、世界到る處、此思想の擴充せらるゝの理も斯くて了解し得べきなり。此種の命名法と神話化とに依りて、自然物は漸次に其原態より離れたる新性質新形狀の存在物となり、徐々に獨立の發達を遂げ、之を崇拜の對象とする民族の生活高上して、道德と政治の進歩するに伴ひ、漸然文明的性質を帯びたる神々として寫象せらるゝに至る。大自然神の發達史は略、斯くの如し。

(二) 多神教の進化

大自然の神々が文明的性質を帯びて寫象せられ、人類崇拜の目的となるに至れば、これやがて多神教の成立を見たる者なり。蓋し多神教とは之に要するに、個々獨立の發達を遂げたる大自然の神々が雜然共存したる儘、人類心意の中に於て如何様にか統一せられつゝある信仰の状態を概稱する者なり。本來小兒と雖同

時に多數の人を父と呼ばざる如く、奴隸と雖同時に二三の主人に仕へざるが如く、野蠻未開の民族と雖、凡ての神々を一樣に崇拜する者にはあらず、其中の孰れかを特に重しとし高しとするの傾向は、原始に於ても之を見ると難しとせず、然れども原始人の思想は素より論理的ならず、又一貫的ならざるを以て、朝に太陽を拜み夕に星辰を祀り、昨日は大海を拜し、今日は風神を祀るは寧ろ其常態ならざらばあらず、時處の變化に伴ひ、境遇の推移に従ひ、その崇拜祭祀する目的物を代へて毫も怪しむを知らざるは、文明人の心理に照しても容易に理解し得る所なるべし。目的物は變化するもその最高價值を置く所の神は、自ら定る所なしとせず、原始人は多神教信者なるも、同時に一神的傾向の其間に窺知せらるゝ所以なり、而して多神教にも種類あり、マックス・ミュラーは之を二種に分てり。

(イ) 交替多神教 (Kathenotheism)

(ロ) 單一多神教 (Henotheism)

前者は神々の存在を信ずると共に、時々其中の或一神をば特に至上最高なりとして崇拜する者これなり、後者は神々の存在を信ずるも、常に其中の或一定の神

に限り之を崇拜する者これなり。

大自然崇拜は神話を生み、神話は漸然發達して雜駁を極むる諸神に對し統一的有機的の説明を下すに至る、之を呼んで組織的多神教と云ふ。多神教もこゝに至れば漸く自然的性質を離脱して人文的性質を増加し、同時に發展の徑路に自ら二大方嚮を生ず。

(一) 諸神の關係を統一的に説明するに當り、重きを人文的性質、即ち道德的社會的方面に置くもの。

(二) 之と方嚮を異にして、重きを自然的性質、即ち自然力、自然法に置くもの。前者は専ら倫理的説明を主とし、後者は専ら哲學的説明を主とす。前者の發達したる極致は一神教 (Monotheism) にして、之をイスラエルの宗教に見るべく、後者の極致は汎神教 (Pantheism) にして、之をインドの宗教に見るべし。之を圖表すれば左の如し。

大自然崇拜 | 個別的的多神教 | 交替多神教 | 組織的多神教 | 一神教 (人文的、倫理的宗教) | 汎神教 (自然的、哲學的宗教)

(三) 宗教發展の三段階

斯く宗教は原始の自然崇拜より發展して一神教又は汎神教の程度に進みたるがその歷程の間に於て組織的多神教を生ずる頃までは、部族各自の奉じたる宗教に止まる。後、是等の部族相合して國民を形成するに及び、その宗教も亦結合を餘儀なくせられ、種々なる神話雜然として相交錯するに至る。茲に於て經驗を統一せんとする人類の欲求は自ら組織的多神教の成立を促し、此新多神教はのち更に其國其民族の性質に依りて、或は一神教に傾き、或は汎神教に傾くも、其未だ國民的結合力たるに止まる間は、之を名づけて國民的宗教と謂ふ。

ある宗教が國民的となるには、其自然的生長に依るよりも、寧ろ軍事的征服の結果に依る者多し、而して部族的宗教より國民的宗教に移る變化の特質如何と云ふに、その第一は神の性質若くは勢力の點に於て現はる。國家の君王が部族の酋長より其支配力強大旺盛なると等しく、國民的宗教の神々は部族的宗教の神々よりも其勢力偉大なり。蓋しこれ民族の膨脹に伴ひ、人類經驗の範圍擴大なるが爲めに、その經驗の統一なる神の觀念も亦自ら擴大せざるを得ざるなり。單に勢

力に於て擴大するのみならず、その性質に於ても進歩の跡を認め得べし。即ち部族的宗教の神よりも國民的宗教の神は、仁愛寛洪の美德に於て遙かに優越せるを見るなり。且つ此宗教の差異は其社會的意義に於て之を認め得べし。部族的宗教に在りては、其神を崇拜し之を奉祀し得る者は、全く同一部族のみに限る。故にその神は全く血縁關係の間に於てのみ社會的結合力を得れども、血縁以外の人間に對しては、寧ろ怒りの神、憎みの神たらずんば、措かず國民的宗教に至つては、即ち然らず、其神は血縁の有無に拘らず、同一君主の下、同一國家の民として生活する者には、齊しくこれ恩恵の神なり、審判の神なり、茲に於てか國民的宗教の時代に至れば、血縁以外、別に精神的なる社會の結合力を顯出するに至るなり。然れども是等部族的及び國民的宗教は、なほ未だ客觀的宗教の範圍を脱せざるなり。客觀的宗教とは其崇拜の對象、換言すれば神と云ひ若くは梵と云ふ如き統一原理を我心内に求めずして、外界に求むるを謂ふ。部族的國民的宗教の時代に在りては、文明の程度も漸く進み、最早原始の時代とは異りて、事物の認識も概念的となり、又主觀客觀の區別も明白となり、其經驗を統一せんとするや、主觀を願

みるの事なかりしにはあらず、且つ當時の宗教は既に多分の道德的要素をも含めり、然れども結局其神と云ふ如き統一原理はわが心内に輝ける者にあらずして、何等か外部的存在なりと考へられたり。此實例はイスラエル、又はインドにも徴し得べし。蓋し人類經驗の統一原理は、初め必ず客觀に求めらるゝものなり。これ哲學思想發達史の明證する所なるが、人は終に之を以ては満足する能はず、一切は主觀の投射なるを知れば、眞個の満足は只主觀の改造に依らざるばあらず。茲に於て主觀の中に神を求むるの努力起り、所謂「In thy breast are the stars of thy fate」(爾が運命の星は爾の胸に輝けり)と云ふ悟得に入る。一度此悟得開けば、神は最早外界の存在にあらずして、わが裏に在り、わが外に在り、わが上に在りて、信境に達せずんば止まざるべし。今是等の語句が如何の深義を寓するかに就いては敢へて詳解を試むるの要なからん。只此種の信仰に至れば、これ客觀的宗教の範域を脱して、主觀的宗教の領土に入れる者、同時に所謂國民的宗教なる者の範域を脱して、個人的宗教の領土に入れる者なり。

この客觀的宗教より主觀的宗教へ移るは、素より歩一步の經過なり、而して其大

成はある宗教的大英雄の出現に俟つ者なり。基督釋迦、マホメット、ゾロアスター孔子の事業は即ちこれなり。此主觀的宗教たるや、直に神を我心中に求むる者なるが故に、特別の仲介者を要せず、又煩瑣なる儀式供物をも要せず、單刀直入、神と相交感し得るが故に、之を名づけて個人的宗教とは云ふなり。個人的宗教の神は最早部族、若くは國民に限りて恩恵を施すが如き者にあらず、直に萬人の胸と相感應するが故に、即ちこれ世界人類全體を愛育し啓導し保護する者と認めざるを得ず。換言すれば個人的宗教は同時に普遍的世界的宗教なり。斯くの如くして宗教進化の歷程を通觀すれば、自ら三段部族的、國民的、個人的、二様(客觀的、主觀的)の變遷を認め得べきなり。

因に云ふ。古來宗教を區分する者、或は眞偽(True and false)の別を立つるも、これ畢竟一個人の信不信に基づく評價に過ぎずして、學者は之を採らず。或は自然的、天啓的(Natural and Revealed)の區分を立て、從來廣く行はるゝも、天啓の意義必らずしも一様に解釋せられず、之を自然に對立せしむるの可否すら既に一疑問なり。學問上之を用ふるは極めて不便とす。或は自然的歴史的(Natural and Positive)の名目を立つる者あれど、此區別も亦明確なるを得ず。本書説く所の三段二様の見、

一は社會的觀察、一は心理的觀察より出て、最も適切なるを思ふ。

バビロニア及びアッシリアの宗教

ライムリス(Euphrates)エーフラテス(Euphrates)兩河の流域は、かのエチプト(Egypt)なるナイル(Nile)の河畔とともに、地味膏腴にして灌漑に便に、最も耕作に適せるが故に人口夙に繁殖し、或は西紀元前八千年の太古に於て、既に業に或程度の文明を有したりきと傳へらる。もとより歴史の據るべきものなれば、如何に發達せしかは漠として知るによしなしといへども、そが太古の住民はチュアン民族(Turanians)に屬し、其北方に住せしをアカデア人(Accadians)と云ひ、南方に住せしをスメリア人(Sumerians)と云ひ、共に支那人と同血縁を有するものなりと稱せらるゝは事實なるが如し。而してバビロニア(Babylonia)王國及びアッシリア(Assyria)王國と稱せらるゝ處のものは、西紀元前凡そ四千年頃セム民族(Semites)の一派この地に侵入し來たるあり、漸次舊住民を征服して、建設するに至りたるものなり。即ちバビロニ

ア王國には舊バビロニア王國と新バビロニア王國との二つあり、舊バビロニア王はまたカルデア(Chaldees)とも稱せられて、西暦紀元前二千二百年ころに創められ、同八百九十二年頃アッシリアの爲め併せられたり。新バビロニア王國は西暦紀元前六百六年頃、アッシリアの將ナボポラサル(Nabopolassar)と云ふものアッシリアに叛き、その首都ニネヴェ(Nineveh)を陥れ、これを滅して、みづから立てし處のものにして、その子ネブカドネザル(Nebuchadnezzar)大王は英邁にして、四隣を征服し、バビロニア文明の極盛期を現ぜしが、のち四代凡そ六十八年にして、ペルシア(Parthia)王シルス(Syrus)に亡されたり。有名なるイスライル人のバビロニア囚虜はこのネブカドネザル大王のときに起りたる事蹟なり。アッシリア王國はもとバビロニアの殖民地なりしといふ。その漸次勢を得るや、ついにバビロニアを併呑し、一時其版圖は西はナイル河より東はインダス(Indus)河に達し、全盛を極めしが、政治的統一鞏固ならず、叛亂止む時なく、終に其將の爲めに滅さるゝに至りき。斯く政治上よりこれを見れば、セム民族の王國と稱すべきものあれども、その文明は長く舊住民の遺風を承け、かの文明に至大の關係を有する文字の如きも、夙に舊住民

によりて使用されし楔狀文字を襲用し、復た改むる處なかりし程にして、其文明の上より謂へば、寧ろテニラン民族の文明と稱すべきものありしなり。されば茲にバビロニア及びアッシリアの宗教と稱すれども、實は古くアッカデア人乃至スメリヤ人の有せし信仰にして、その大に發展するに至りたるはセム民族の影響を蒙りたる以後のバビロニア王國の盛時にあれど、その根柢は依然としてかれに存し、セム民族固有の信仰とは頗る、その趣を異にするものあり。世界に於ける一種特別なる宗教として獨立の發達をなせり。

斯くの如くテ、 그리스、ユーフラテス流域に於ける文明はその起源頗る遠遠なり。従つてその古代の諸國民の文明と相交渉するところもまた甚だ古く、且つ大なるものありしが如く、或は學者によりては、支那、エジプトの文明の如き亦その源泉はこれをテ、 그리스、ユーフラテスの間に培はれたる種苗を移植せるものなりとまで唱ふる者あり。蓋しその支那との關係に就いては今日吾人の到底測り知るべからざる處にして、唯その民族を一にすと思はるゝ點、及び思想に於て稍や一致すと認めらるゝ處あるよりして想像せる説に過ぎざるべけれど、そのエヂ

プトと非常に密接なる關係の存せし事に至つては、殆ど疑を容るゝの餘地なきが如し。例へば今日エヂプトに存する殿堂の中には、全くその建築の様式をテ、 그리스、ユーフラテスの流域に取りたりと認めらるゝ處のものあり。天文学の如きもまたこの殿堂建築術に伴ひて、西暦紀元前五十年以前に於て、此流域より輸入せられたるものなりと稱せらる。乃ちこの兩地の文明に果して父子の關係の存するものありや否やは、容易に決せらるべき處にあらずと雖、尠くともこの交渉交通の頗る太古に於て既に行はれたる者ありとは、必ずしも想像説とのみは言ひ去り難きものあり。後セム民族がこの流域に侵入し、所謂バビロニア、アッシリアの國勢漸く伸張するに及びては、その諸國民に影響せる處も自づから大に、小亞細亞より遠く歐洲にまで及びたり。殊にイスラエル人との關係は頗る古く、かのアブラハムの起れりといふ舊約書の中なるウル(Ur)は、乃ちユーフラテス下流のウルなりと稱せられ、また代々の豫言者は皆バビロニアの商業に關して知れる處あり。或はそのバビロニア囚虜以前、即ち舊バビロニア王國の時代に於て、既に屢バビロニア軍隊のバレスチナに來りしことあるを傳ふる等、その關係の古

さを示すもの甚だ多し、神話その他宗教上の交渉に就いては更に後段に於て述ぶる處あるべし。

然らば斯くの如く、古く且つ重要な關係を世界に有せる國民の文明乃至宗教とは如何なるものなりしぞ。今これを考ふるに、從來これに關する史實としては、既に現今キリスト教が舊約書として傳ふるイスラエル人の記録、又はギリシア、ローマの文明書の中に散見せらるゝ處のものに過ぎずして、頗る茫邈たるを免れず。最近五六十年以來、歐洲の學者にしてこの古文明の研究に意を注ぐ者あり。その舊都市の廢墟を探り、楔形文字の文を刻する數多の煉瓦板、その他の研究資料を發見し、これが研究を試むる者の輩出するに至り、稍やその面影を明瞭にするものありと雖、而もなほその發見せるられたる資料は比較的近代のものに限られ、西曆紀元前八世紀頃より以前のものに至りては、僅に斷片的の事實の知られたるに止まりて、到底未だ正確を期すべからず。然れども今暫くこれ等の斷片的の事實より推測するに、大凡西曆紀元前二千二百年前、即ち未だ舊バビロニア王國の勃興せざりし時に當つては、大小數多の都市、ティグリス、ユーフラテス流域

に沿ふて散在し、時にある都市の勢力強大となりて、他の數市乃至十數市を併呑し、一王國の觀をなせる事なきにあらざりしも、大體に於て各獨立し、其間に政治的聯關なく、特殊の神を信じ、特殊の發達を示したるが如し。例へばエア (Ea) はペルシア灣頭の一市エリド (Eridu) の神にして、海の神なりと稱せらる。後にはこれをまたオアンチス (Oannes) と呼び、その貌半人半魚にして、海より來つて人に學問技藝を教ふる神なりとせられ、アヌ (Anu) はユーフラテス下流に住するエレク (Erech) の神にして、天の神なり。ベル (Bel) はニブル (Nipur) の神にして、地の神なり。その他セルグル (Sergal) に於ては、火神ザウル (Savul) を主神とし、クタ (Cutha) に於ては、死の神にして、地下の世界の主たるナルガル (Nergal) を祭れるが如し。或はこの中、アヌ、ベル、エアの三神は、天地海に當るが故に、三位一對の神とせられし事あり。その他三位一對の神としては、エア、その妻地神ダツキナ (Davkina) 及其子太陽神ドムヂ (Dumuzi) の三神、また月神シン (Sin) 及びその二子天陽神シャマシ (Shamash) 及び生成及び愛を司れる女神イスタル (Ishtar) の三神、イスタルはのちには、死及び戰爭の神ともせられたり、等あり。然れども想ふに、斯くの如きは、新舊バビロニア王國

乃至アッシリア王國が、ティグリス、ユーフラテス流域を統一し、文化大に興り僧侶の階級さへ生ずるに至りてのちに定められたるものにして、その最初に於ては各地方の特別なる一地方神たるに過ぎざりしなり。蓋し當時の僧侶は祭祠を司ると共にまた一種の學者にして、かのバビロニアの學術として有名なる天文學の如きも亦實に彼等によりて研究されし處なり。勿論學と云ふも今日の所謂天文學とは異り、天體を天體として研究せしにはあらず。之を畏懼し、崇拜する宗教的要求より觀測するに至りたるものにして、宛も支那若くはわが國の上古にありし天文博士と稱するものゝなしたる處に似、天體の運行を以て、國家乃至個人の運命を卜知せんとしたるものに他ならず。今日より之を見れば學術としても、宗教としても、甚だ奇怪至極なるものなれども、その究むる處は意外に精巧にして、彼等がこれをその殿堂建築に應用したる跡を觀るに、例へばある殿堂は春分の日に當つて、太陽が正しく其殿堂の西端に中するが如き方法に作られあり、以て當時の生活に至大の關係ありたる、河水氾濫を豫知するの用に供したるが如き、その正確なること後人を驚嘆せしむるものあり。斯くの如く當時僧侶の一方に

専ら思索に耽れる間に、他方には國內に政治的中心の生じ、統一の行はるゝあり。僧侶の思辨と國內統一の趨勢と兩々相須つて、こゝに宗教も亦多少の組織的説明を見るに至れり。即ちこれまで分立したりし小國が合して、一大王國を形作りしと共に、その宗教も亦合して、一大宗教とならんとする傾向を生じたるなり。三位一對神の如き、或はかの神々を諸星に配したる如き、即ち彗に擧げたる死の神ナルガル(また軍神ともせらるる)を火星とし、天啓を司り僧侶の神たるナブ(Nabu)を水星とし、新舊バビロニア王國の首都たりしバベル(Babel)の地方神にして、その首都たりしが故に屢、全王國の主神の位置を占め、王の神とせられたるメロダク(Mardach)はこれを木星に配し、また彗に擧げし愛の神イスタルはこれを金星に配し、風雨及び戰の神たるニニブ(Ninib)はこれを土星とし、これに太陽及び月を加へて七神として、各循環して一日を支配するものとしたるがごとき、或はその他の神話に於て現れしきごとき、皆この統一的要求よりして、諸地方神を合して組織的説明を試みたるものに外ならず。この七星を七日に配する事は今日廣く行はるゝ七曜日の起源にして、後ローマ人がこれをバビニアより輸入し、歐洲

一般に傳へたるものなりと云ふ。イスラエルの宗教に於て重要なものとせられたる安息日、即ちサバスなるものも亦その起源はバビロニアにあり、この七星の信仰と關係あるものなりといふ。勿論この組織的説明は決して一朝一夕にして成りたるものにあらず、これを單に僧侶の思辨作爲に歸するが如きは、謬れるの酷だしきものにして、未だ歴史の何たるかを解せざる者の言と謂はざるべからず。蓋しこれ宗教が部族宗教より國民宗教に進む自然の經過として起り來たるものに外ならず、此各地方神の統一的經過に就いては、更に後段に述ぶるところあるべければ、茲には猶暫く舊バビロニア物典以前に於ける一般の信仰に就いて勘へんと欲す。

曩に述べたるが如く、凡て古代原始の宗教は大自然崇拜、小自然崇拜、乃至精靈崇拜に起因せり。而して吾人は今これをこのテイグリス、ユーフラテス河畔の宗教に於ても見るを得、その大自然崇拜に就いては既に少しくこれを述べたり。即ちベル、アマ、エアを首め、曩に擧げたる地方神は大抵皆それにして、其中には起源を或は小自然崇拜に在りやと認めらるゝものなきにあらず。例へばエアのごとき、恐

らくは其初めは魚なるべしと稱せらるれども、それとて夙くより海といふ大自然に推し考へられたるが如く、各地方の主神たるものは、殆どみな大自然若くは大自然に結び付けられたる神々なり。なほ曩に擧げたる外、嵐の神にマツ (Mahu) あり、嵐の神にリンモン (Rimmon) あり、又太陽及び月は天地と共に何處の國民にも盛に崇拜せらるゝと同じ理由により、テイグリス、ユーフラテス河畔に於てもラルサ (Larsa) シンバラ (Sippara) のごとく太陽を主神とせるあり。ウルのごとく月を主神とせるあり、その他後代に於ける大なる神は多くは皆太陽と關係を有したるものなり。星の崇拜せられしは既に述べしが、この崇拜の起源も亦甚だ古きものにして、かの七星の信仰の如き、その明かに唱へ出されたる舊バビロニア王國の盛時ハンムラビ王の頃にあるが如きも、その以前に於て既に久しく民間に信ぜられ來りたるものなるや明かなり。天文學の如きも乃ちこの民間の信仰の漸次蘊釀したる結果、遂に之を専門とする僧侶の起り、精巧なる發達を見るに至れり。

次に少しく小崇拜、自然崇拜に就いて述べん。小自然の中バビロニア、アツアツの

宗教に特に著明なるは動物崇拜なり。尤も羅に述べしが如く、テイクリス、エトフラ
 ナス流域の文明の開けしは、すでに西暦紀元前八千年の古に在りと稱せらるれ
 ども、今その文明を研究せんとするに當つて、吾人の有する資料は僅に西暦紀元
 前八百年頃までの者に止まり、断片的には多少その以前をも知るべき材料の發
 見せられざるにはあらずと雖、これまた漸く舊バビロニア全盛期に溯り得るに
 過ぎざれば、既に其資料の中に現れたる宗教は、比較的進歩したる後代の者にし
 て、その最も初期若くは未開の人間の中に存すべき動物崇拜の如きは、僅にその
 痕跡を神形に示すに過ぎず、而してその神形の示す處によつてこれを見れば、直
 接ある動物を崇拜するときは、すでに殆どなかりしが如し、乃ちその多く今日
 に知られたるものは、半人半獸、半人半魚、或は半神半鳥の神にして、例へば鷲頭
 にして人體なるごとき、頭肩魚鱗を被れる如き、人頭にして翼ある大牡牛の如き
 神あり。これ蓋しその當初は動物の崇拜せられしが、漸次その人形化する經過を
 示すものにして、更に進みては人形をなせる神の動物の背上に跨れるあり、初め
 その神と同一視せられし動物の神が人形化すると共に、終にその乗物と化した

るなり。其の他翼ある牡牛或は翼ある龍の如き、全く動物の形をなせるものも多
 少は存したり。

斯くバビロニア、アッシリアの宗教には自然崇拜及び動物崇拜の存在するなり。然
 れどもさらにこの地の宗教の特色とも謂ふべきは、精霊崇拜の甚だ盛なりしこ
 となり。固より精霊崇拜のことたる敢へてバビロニア、アッシリアの宗教に限らず、
 大凡宗教と謂はるゝ程のものは、必ず一度は經過し來りたる處にして、別に奇と
 するに足らざるが如しと雖、殊にバビロニア、アッシリアの宗教に於てはこの風盛
 にして、既に動物崇拜廢れ、神はみな大自然に關係せる大なる神となり、更に進ん
 て、自然崇拜の域をも脱せんとするの勢を示し來りし時に於て、獨且つこの精霊
 崇拜だけは依然として行はれたるを看る。蓋し斯くの如きは世界に於てその例
 甚だ尠きものにして、多くの宗教に於ては、その原始時代こそ精霊崇拜は盛なれ、
 漸次その宗教の進歩するに及びては、假令一般の信仰の中にはその遺風の殘存
 するものありとも、高等なる人士間にその信ぜらるゝことは甚だ稀なるを常と
 す。されどバビロニア、アッシリアに於てはこれと異り、その最も高尚なる經典の中

にさへ公然呪文、呪法を掲げられたり。こは一方に頗る精神的なる祈禱懺悔の文の掲げあるに對して、甚だ興味ある對照をなせり。彼等は此の精靈を呼んで千(Σ)といひ、大小、強弱、善惡等種々なる千あり。人の運命を司る疾病、災害の如きは、乃ち此の惡なる千の作す業にして、彼等は之を退散せしむる爲めに或は呪文を誦し、或は呪法を行ひ、また他の強大なる千を招きてその惡なる千を驅逐せんとし、種々なる儀式を行ひたり。殊に天及び地の精靈は惡魔を退治する力あるものとして、最も崇拜せられたるが如し。

さて以上略、バビロニア、アッシリア宗教の自然崇拜、動物崇拜、精靈崇拜に就て述ぶる所ありしが、さきにも説きたるが如く、これ等の信仰は決して初めより一の宗教として組織的發達をなせるものにあらず。後バビロニア王國乃至アッシリア王國の勃興するに及び、稍、統一的氣運を示すものあり。或は時に強ひて政府の力によりその統一の企てられし事あり。バビロニアに於ては、メロダク、アッシリアに於ては、アッスル(Assur)が、宛も全國の主神の如く崇拜せられしことあり。種々なる神話の起りて、諸地方神に組織的説明を施し、一大多神教の觀を呈せしこともあれ

ど、これたバビロニアの首都、乃至アッシリアの首都といふが如き一地方の宗教が、その地方の政治的勢力を得、文化進むと共に發展して、その中に他の地方の神をも取り入れたりと云ふに過ぎずして、全國を擧げて一宗教に化したりといふにはあらず。畢竟バビロニア、アッシリアに於ては、我國に於ける神道のごとき意味にては、終にその最後まで國民的宗教と稱せらるべきものゝ存する期はなかりき。

斯くバビロニア、アッシリアの宗教はその統一といふ點に於て甚だ缺けたる處あり。また動物崇拜は漸次その影を沒したるも、かの精靈崇拜の盛なるあり。また最後まで自然崇拜の域を蟬脱する能はざりしと雖、しかもまた世人の屢考ふるごとく、決して單なる野蠻未開の宗教にはあらず。その今に傳ふる新バビロニア王國時代の祈禱乃至懺悔の文を讀むに、既にその神はある特殊の人、又は人民を保護する單なる威力の神にあらずして、天下萬民を愛護し、肉體的苦惱を治するのみならず、また精神的罪惡を罰し、又は宥す道德的の神として考へられ、死後も亦その大慈の攝護によつて、天國に導かるべしと信じたるが如し。勿論佛教乃至キ

リスト教に於て見るが如き高尚なる精神的情調のあるなく、その懺悔といふもその犯せる罪を滅せんとはあらずして、寧ろそれに對する神罰を恐れ、そを宥されんことを乞ひたるものに過ぎざれど、若し茲に何人か宗教的偉人の現はるゝあらば、必ずや一大世界的宗教を組織するに至りたるなるべしと想像せらるゝまでに、その宗教は精神化されあり、即ちバビロニア、アッシリアの宗教もまた客觀的宗教より漸次主觀的宗教に進む、自然の經路を取りつゝありしものなりといふべし。

なほ最後に、一言附け加へ置かざるべからざるは、そのユデヤ教との關係なり、我にも述べたる如く、既にかのアブラハムはユーフラテスのウルより出てたりと稱せらるゝほどにて、バビロニア王國乃至アッシリア王國の建設者たるセム民族の、イスラエル人と親密なる關係あるは明かなる事實なるが、殊にその神話に於て著しくこれを示し、屢人をしてその一致の酷しさに驚かしむるなり、就中その有名なるはかの世界大洪水の説話にして、殆ど符節を合したるが如きものあり、學者をしてその孰れが起源なるやを知るに苦ましむる處なるが、恐らくは未だ

セム民族が分裂移動せざりし初めに於て、既に有せし處のものなるべきか、その他天地創造説の如き、また多少一致の認めらるゝ處なしとせず、勿論人間の思想は大體同じ經路を進むものなれば、假令直接相關する處なきも、屢一致する處とあれば、一概には斷ずる能はずと雖、バビロニアとイスラエルとの間には見逃すべからざる關係の存せしこと、蓋し疑ふべからざる處なり、ただイスラエルの宗教は純セム民族の宗教として發展したるが爲めに、遂にキリスト教をも産するに至り、バビロニア、アッシリアの宗教は舊住民の宗教を、僅にセム民族化したるものに止まりしが故に、甚だしくイスラエルの宗教とその面目を異にし、十分な發展をも遂げずして終るに至りしなり。

エジプトの宗教

ナイル沿岸はまたティグリス、ユーフラテス流域と共に氣候炎熱、禾穀豊稔にして、

文明夙に開けたり。その河口に近く三角洲を以て成れる邊を下エジプトといひ、それより南方河を溯ること凡そ二百四十里の間を上エジプトと稱す。その太古の状態は、邈として容易に知るべきなしと雖、想ふにその國狀また酷だテ、 그리스、ユーフラテス流域に似たるものあり。全國數多の小部族に分れ、各、その首長を有し、首都を立て、獨立せる一國を形成せること、宛も群雄割據の狀の如く、その數大凡上下エジプトに各二十を存したりと云ふ。西歴紀元前三千二百年の頃、或は四千年以前なりとも云ふ。メナ(Mena)又はメネス(Menes)と稱する者あり。全國を統一して初めて第一エジプト王朝を立てたりと傳へられたれども、その謂ふ所の統一とは、ただある一部族に豪傑の起るあり、その勢強大となりて、一時他の部族を屈服し、朝貢せしめたりと云ふまでのことにして、諸部族の各、獨立せる首都、首長、軍隊、政治、徵稅の機關を有して、一國を形成せることは依然たるものなり。從つて甲部族衰へては乙部族起つて全國に君臨し、乙部族倒れては丙部族これに代り、斯くして終に西歴紀元前五百二十五年ヘルシア王カンピセス(Kambyzes)の爲めに併せられ、エジプト全土を擧げてその屬領となるに至るまで、王朝の代るこ

と實に二十有六回に及びたりと傳ふ。さればその文明乃至宗教と稱するも、大體に於ては全國一致する處なきにあらずと雖、而も亦必ずしも劃一なりとは言ふべからず。各地各部族各、その特殊の神を奉じ、各、特殊の發達をなせり。而して或る部族の文明を現出するに至りたりといへども、而かもその統一たるこれ亦政治上に於けると等しく、絶えずその中心は移動して、最後まで眞の融合を見るに至らずして終りたることは、全くテ、 그리스、ユーフラテス流域に於けると異らず。研究者をしてその高尚なる文明と、劣等なる文明との種々混亂紛糾せるに呆然たらしむるものあり。

エジプトは古來歐洲の學者によりて、世界に於ける謎の國と稱せらる。その建築彫刻、繪畫、文字の如き、近代特にその文明の泰西に關係あることを發見せられてより、銳意これが研究に努むる者あり。エジプト學(Egyptology)なる名稱まで起りたる程なれども、而もなほその茫邈たること依然たり。抑、エジプト人は如何なる民族に屬し、何處より來りしものなりや。この地に移住し、建國するに至りたるは何年代なりや。これ吾人の知らんと欲して、未だ知り能はざるところなり。たゞ近時

纔にその言語學上の研究より、セム民族の祖先と近親の關係あるものなるべしとの説の立てらるゝに至りたりと雖、往時はアフリカの内地より移住し來りたるものなりと信ぜられ居たり、これとてもいまだ多く想像の範圍を脱せざるものなり。その他の事に至つては殆ど杳として今これを探るべきなし。その文明乃至宗教に就いても前にバビロニア及びアシリアの宗教に於ても述べたるがごとく、或はこの起源を以てテグリスエトフラテス流域に歸するものあり、而して此兩者の間には實に何等かの關係の存せしものあるは殆ど疑ふべからざる事實なるも、而も未だこれを以て遽かに一方を他方の起源なりと速断すべからず要するに今日吾人が有する知識を以てしては、到底エヂプト國民乃至その文明の起源はこれを知る能はず、従つてその種々なる程度の文明の紛糾混亂して存し、一方に頗る高尚なる一神教的思想の存するかと思へば、他方に動物崇拜の甚だ盛なるあり、動物崇拜と、天地日月の大自然崇拜と互に錯綜して、相分ち難きものある如き、如何にして斯かる状を現じ、混亂紛糾を生ずるに至りたるか、その徑路は今日未だ確實なる説明を下し能はざるなり。蓋しエヂプト人は頗る保守的

傾向を有し、既に金屬を使用することを知りて以後も、尙久しく石器の使用を廢せず、殊に宗教上の儀式に於て然りとす。今日屢、木伊乃の匣中に發見せらるゝ石製の小刀は當時木伊乃の製造に用ひたるものなりといふ。またエヂプトに於ては既に頗る夙く神聖文字 (Hieratic writing) と呼ばはるゝ一種の音文字の發明あり。文書の多くはこれを以て記述せられしが、而も猶それ以前に行はれたる不便なる繪文字 (Hieroglyph) の使用を廢せず、神聖文字は此の繪文字を原として工夫せられたる者なり、宛もわが假字の漢字より工夫せられたるが如し、殊に宗教上の事項は必ずこの兩様の文字を以て二重に記載したるが如き、以てエヂプト人の氣風殊に宗教に關する態度の察すべきものあり。その動物崇拜と、大自然崇拜と乃至一神教的思想との相混亂錯綜して存する事實も、亦多少彼等の此の保守的氣風、若くは新舊併用の氣風とも稱すべきものに由る處あるは、推測するに難からずといへども、これ等の三者の中に就いて、其孰れを以て原始のものとなすべきものに至りては、學者により種々の異説あり、或は動物を以て先きとし、或は一神教を以て初めとすと雖、畢竟共に多分の確證ありての說にはあらず。若し誤

りなきを期せば、ただエジプトの宗教にはしかく種々なる要素の紛糾錯綜せるものありたりと言ふより以上、多く語るべからざるなり。今順次に其の動物崇拜より述べん。

エジプトの動物崇拜に關しては西曆紀元第一世紀前後のギリシア、ローマの學者にして之が記述をなせる者あり。例へばヘロドタス(Herodotus)は當時エジプトに於て崇拜せられし諸種の動物の名を列擧し、その崇拜の殆ど凡ての動物に及びたるを説き、パプレンミス(Paprenis)に於ては海鳥崇拜せられ、テーベス(Thebes)に於ては鱈の崇拜せられつゝありし事を記し、またルシアン(Lucian)はエジプトの殿堂は金銀珠玉彫刻を以て飾られ、その外面頗る廣大壯嚴を極むと雖、吾人一人たびその中に入らんか、その神の或は猿、或は紅鶴、或は山羊、或は猫等なるに一驚を喫すべしと記せり。その他當時アレキサンドリア(Alexandria)に在りし學者等にして同様な事實を傳ふる者尠ならず。以て如何に西曆紀元第一世紀前後のエジプト人の間に動物崇拜の盛なりしかを察知すべし。實に彼等の崇拜の對象となりしものは、ヘロドタスの記せる如く殆ど動物のあらゆる種類を賞し、犬猫蛇

蛙、諸種の鳥類は勿論、その微甲蟲にまで及びたり。かれ等は獨動物のみならず、また諸種の樹木をも拜したることは他の諸國民と異らず。ただ不思議にも棕櫚のみは曾て崇拜せられしことなしと云ふ。而して中にはメンフィス(Memphis)の牡牛、アピス(Apis)ヘリオポリス(Heliopolis)の牝牛、ムネツニス(Menesis)或はメンデス(Mendes)の山羊の如く、獨りその地方にのみならず、全國一般の崇拜の對象となれるものなきにあらざれども、その多くは一地方に限られ、他の地方には及ばず。或地方に於ては猫を以て神聖とし、これを崇拜すれども、その隣地に於ては蛇を崇拜して、猫をば普通動物として取扱ふが如し。かのアピス、ムネツニスの如きも、其原はメンヒス乃至ヘリオポリスの地方に限られたるものなりしが、後その地方の政治的勢力を得るに及び終に全國一般の崇拜するところとなりしなり。而して斯く崇拜せらるゝ動物は、先づその一は代表者として神殿の中に養はれ、他は特別の保護と尊敬を加へられて、これを殺しその肉を食ふが如き事は絶対に禁止せられ、若し過つて殺せし者あらんか、假令その神聖動物なることを知らざりし外國人なりとも、用捨なく死刑に行はれたり。一地方の神聖動物が他の地方の者の爲め

に侮辱さるゝ處となり乃至害されし爲めに、その兩地間に戦端の開かれたる例、甚だ稀ならざりきと傳ふ。

さて以上述べたる如き動物崇拜の風習は西暦紀元第一世紀前後に盛に行はれ、其起源もそれを溯る事甚だ遠からざるが如く、殆どエジプト宗教史の結果に近き者なり。然らば其以前に於ける状態は如何、茲に於て吾人をして頗る怪訝に堪えざらしむるものは、今日エジプト研究の貴重なる資料として吾人に残されたる、エジプト中世期の王朝乃至僧侶の手によつて作りし記録の中に、動物崇拜に關して何等傳ふるものなき事これなり。而してある學者は屢、この事實よりして、動物崇拜はエジプト宗教の起源にあらずと斷じ、更に一層高尚なる宗教の墮落して、茲に至りたるものなりと説くものあり。然れども吾人を以てこれを觀るに未だ必ずしも然りと云ひ能はざるものあり。かの西暦紀元前三世紀に出てたる僧にして史家たるマナト (Manetho) 曰く、動物崇拜は第二王朝時代に生まれりと、固よりこのマナトの言も一概に信すべきにあらずと雖、しかも當時既にその起源の甚だ遠遠たるものあることを認められたるは證すべし。殊に今日吾人に殘

されたる種々の神祇を視るに、その太陽なり、その他の大自然なりとせらるゝ者もありても、その形は全然ある種の動物の表象を留めたるを視る例へばホルス (Horus) は全部鷹の形をなし、或は鷹頭人形として現はされ、ハトル (Hathor) はまた女神にして、牛頭牛角を有せる人形として、或は人形にして、ただ頭に牛角を存せるものとして現はされ、その他セプ (Sop) はその頭上に雉を戴き、バスト (Bast) は猫頭の女神たり、オシリス (Osiris) は牛頭若くは紅鶴頭として、クヌム (Knum) は羊頭アモン (Amon) また羊頭若くは鷹頭として現はさるゝがごとし。而してその最も古きは全部動物形をなせるものにして、その半人半動物の神を見るにいたりしは、漸く第十二王朝の頃始まれるを以て察するに、その起源の正確に何時頃なりやは、もとより明かにする能はずと雖、兎も角もエジプトに於ける動物崇拜は甚だ古く、また頗る深き根底を國民の信仰中に存せしものなることは、蓋し斷言するに難からざるなり。その五朝乃至僧侶の記録に存傳せざるは、想ふに當時エジプトの文明は最も高潮に達し、一般には動物崇拜の存せしに相違なきも、僧侶若しくは宮廷に於ける教養ある人士の間には、すでに頗る進みたる宗教思想の瀾漫せ

るあり、動物崇拜の如きは眼中に置かざりしが爲めか、而してまたその後代に及びて甚だ盛となりしは、僧侶乃至宮廷の文明の漸次衰退し來り、一時その爲めに壓迫を加へられたりし一般衆俗の信仰の勢力を復活し、表面に現るゝに至りたるが爲めなるべきか。然らば茲に第二に起るべき問題は、その動物崇拜なり。如何にしてエジプトに於ては、しかく動物崇拜の古く、且つ深き根底を國民に有するに至りしか。これ順序として吾人の説かざるべからざる處なるが、これに關しては、さきに述ぶる處ありたるが如く、諸説紛々として殆ど歸する處を知らずと雖、その最も今日に於て確實なりと信ぜらるゝは、トラム崇拜にその基を開けるものなりとする説なり。もとよりエジプトに於て果して然るや否やを證すべき材料の、今日に存するものなしと雖、その神聖動物の地方地方によつて異なる點、その他種々の點より類推して、しか斷ずる事の甚だしく誤れるものにあらざるは多くの學者の認むる處たり。

次に大自然崇拜に就いて述べん。エジプトに於ては又夙くより天地、日月、乃至河川(殊にナイル)その他眼に見えざるものに於ては地下の世界死後の信仰に就い

ては後に述べん。生成秩序、正義、真理、知識の類、また神格を有したり。而してこれ等の神々は吾人の前に觀たるが如く、その形に表はさるゝや、或は全部動物の姿とせられ、或は半人半動物とせられ、またその一部に動物の表象を存するものあり。而も亦その神話乃至讃歌に現はるゝ處を見れば、明かに人間的なるを示すものあり。學者をして抑、エジプトの動物崇拜と、大自然崇拜との間には如何なる關係のありて存するか。動物崇拜より大自然崇拜起りしが、または大自然崇拜より動物崇拜起りしか。その解決に惑はしむるものあり。而して今日吾人が有する知識を以てしては、この問題は到底解決すべからざるものに屬すれども、想ふに動物崇拜よりして大自然崇拜の起るべきなく、また大自然崇拜よりして動物崇拜の導かるべき理由を發見する能はず。兩者は到底その起源を異にするものにして、而も共に頗る原始時代より存すべき性質のものたるは、既に論じたるが如し。恐らくはエジプトに於ても然るべき乎。唯茲にエジプトに於て奇とすべきは、その兩者の關係の頗る密なる者あることなり。天地日月の動物形を以て現はさるゝに至りし所以は解するに苦しむものなりと雖、想ふにこれ原始時代の思想の幼

稚なる、茲に二個の彼等の生活に重要な關係を有するものありとせんか、忽ちこの兩者を結び付けて、一は他の原因なり、豫兆なり、乃至化現なりと説明せんとする傾向あり。所謂迷信の心理なり。彼等エヂプト人も亦この同様なる心理に基づきて、彼等の崇拜する動物と、天地自然と、相聯關せしむるに至りたるものなるべき乎、暫く更に確實なる研鑽を俟つ。

エヂプトの大自然神はまたその神聖動物と等しく、その崇拜せらるゝ處、地方地方によりて異れり。例へばラ(Ra)はヘリオポリスの神にして、オシリスはアビドス(Abydos)の神なり、プター(Ptah)はメンヒスの神にして、アモンはテーベスの神なり。其他オキシリンクス(Oxyrhynchus)に於てはセト(Seb)崇拜せられ、サイヌ(Sais)に於てはナイト(Nait)の崇拜せられしが如し。然れども後國內各地間には漸次政治的乃至社會的關係の生じ來りて、これ等地方神の間にも亦種々なる融合行はれたり。而して神話はその間の關係を説明せんとして起れり。例へばアビドスに於てはオシリスの外にまたイシス(Isis)及びホルスの二神を祭り、メンヒスに於てはプターの外にセケト(Seche)及びイムホテプ(Imhotep)の二神を祭り、テーベ

スに於てはアモンの外にムート(Mut)及びコンス(Chons)の二神を祭れるが如く、三神を一座とし、父母子の關係あるものとして崇拜せるものあり、また種々なる地方神を結合して一神とせるものなり。アモン・ラ(Amon-Ra)ラ・ハル・マキス(Ra-Har-Machis)プター・ソカル・オシリス(Ptah-Sokar-Osiris)といふが如し。殊に政治的勢力を得たる地方の地方神は、種々なる地方に於てその地方神と結び付けられて崇拜せられ、ラの如きは其の變體實に十四に及びたりといふ。而して今その神話に就いて是等諸大自然神の性質を観るに、その多くは太陽乃至光明に關係したり。併しこれは必ずしも初めよりこれ等諸神の悉く太陽乃至光明を表現せしことを示すものにあらず。西曆紀元前凡そ二五〇〇年第五王朝の時代、ヘリオポリス地方の政治的中心をなすに至るや、其地方神ラの勢亦從つて強大となり、各地方に崇拜せられしが、このラは太陽神なりし故、茲に諸種の太陽神話起り、終に太陽に關係なき他の地方神までをもその中に吸収し、是等に光明界上の二位置を與ふるに至りたり。蓋しエヂプト諸神の殆ど總てが光明化せられ居るは、斯かる原因に基づけるものならん乎。例へばオシリスは普通アビドスの太陽神として傳へら

るれど、その起源は寧ろ生々として、禾穀を人類に與ふる大地を神化せるものにして、メンヒスのプターまた後には太陽神とせられ、世界の創造主として非常なる尊崇を加へられたれども、その起源は大地の生物を發育せしむる力を神化せしものなりといふ。さて以上述べたる如く、エジプトの神は元來皆一地方神なれば、其地方の政治的勢力の消長に伴ふて、その崇拜の狀も或は盛となり、或は衰ふるに至りたり。而して太凡第六王朝時代まで最も其崇拜の盛なりしはラ、プター、オシリスの類にして、殊にラは其勢實に全エジプトに及びたり。然るに後第十二王朝(西曆紀元前二〇〇〇年頃)の起り、所謂エジプト新帝國を組織するに及び、其首都テーベスの地方神アモンの勢強大を呈し、終に舊帝國の主神ラと結合して、アモン・ラとなり、世界の創造主或は保護者とせられ、エジプト全土の最高なる神の位置を占むるに至りたり。エジプトの宗教はこれよりして漸次唯一神教的思想に近づけるを見る(アモンはまた元來は大地の生育力なり、その性質宛もメンヒスのプターに似たり)。

エジプトの唯一神教的思想は何時頃より始まりたるものなりや、學者或はこれ

を西曆紀元前三〇〇〇餘年の太古に置き、而してかのエジプトの多神的大自然崇拜乃至動物崇拜は、此唯一神教の墮落して生じたるものにして、エジプトの宗教の起源は唯一神教なりと説く者あり。蓋し其始源の古きこと斯くの如きは或はこれあらん。然れども其エジプトの宗教の起源の唯一神教に在り、多神教的思想は却つてこれより派生したりとなすに至つては、吾人は遂にこれを信ずる能はざるなり。人類一般の思想の進化史の決して斯くの如きを示さざるのみならず、またエジプトに於て特に斯くの如きものありたりとの證據の、ただその起源の甚だ古きものありたりとの外に殆どこれなきに於てをや、吾人は寧ろエジプトの唯一神的思想は多神教的思想の、その至るところまで至りたる結果、其發展の極に於て現はるゝに至りたるものなりとするの至當なるを主張する者なり。蓋しエジプトの唯一神教的思想は僧侶乃至宮廷文明の所産なり。アモン・ラの讚歌には、萬物の創造者、法の主、諸神の父、人類の作者、動物の創作者、野の獸に食物を與ふる穀物の主、一ありて二なき者、神の中神、唯一の王、プター讚歌には、手に技巧を與へ、足に歩行の力を與へ、眼に見えしめ、耳に聞かしめ、鼻に臭はしむるもの、心

の勇氣手の力乃至諸の神と諸の人と諸の生物との體と口とに活力を與ふる主知識言語その他凡そ心にあり口にあるもの悉く彼の供するところにあらざるはなしといふなり。またホルスを讃しては諸神は普遍の主を認むかれホルスは己れの意志に従つて世を治む。天地は彼の下に在り、過現未の三世に互りての諸民、エチプト人もエチプト以外の國人をも悉くかれこれを支配す。日月星辰風雨山河草木皆彼の指揮に従つて動き、總ての人彼によつて歡喜し、總ての心彼によつて怡樂す。誰かかれを讚嘆せざらん、彼の慈悲わが心を覆ひ、彼の愛わが胸に充ちて大なり。といへるあり。而してその最も盛なりしは、今日残れる所の讚歌等に徴するに、大凡西曆紀元前一五九〇年前後第十八王朝時代なりしが如きも、恐らくはそれ以前に於て既に一部の僧侶若くは宮廷に於ける教養ある人士の間には抱懐し來たられたる處なるべし。今その所謂唯一神教的思想の如何なるものなりしかを見るに、斯くの如き類例は他國に於ても甚だ尠しとせず、吾人はかの讚歌を讀んで、その著しく汎神教的なること、或は單一神教的なることに於て直ちに印度に於ける古ヴェダの讚歌を想起せざるを得ず。彼等はそのアモンラに

對し、或はプターに對し、或はホルスに對するや、呼ぶに最高最大の神を以てす。然れどもその最高最大のものなりといふは、決して他の神の存在を否定したるにはあらずして、唯諸神中の最高最大のものなりといふに過ぎず。エチア教若くはキリスト教に於けるが如き意味の單一神教は、かれ等エチプト人の未だ認めし處にあらず。寧ろ印度のヴェダの宗教と共に單一神教と呼ぶを至當なるものなりとす。エチプト一神教の思想を傳ふるものとして有名なる文句に、神の言葉として、
「我は天地の創造者なり。一切の神々にその靈を與へたる神なり。我眼を開くや、茲に光明あり。我眼を閉づるや、茲に暗黒來たる。朝には我ケペラ (Chepera) たり。晝にはラたり。夜にはツムたり」といひ、また雍きのアモンラの讚歌に、其名の多き事數を知らずといふが如き、以て如何に當時のエチプトの宗教が一神教といふよりは、單一神教或は汎神教と稱することの適當なりしやを知るに足るべし。即ち彼等は此の思想を以てその多神を統一し、説明せんとしたるものにして、この企圖は或は時に王の權力によつて試みられたる事あり。殊にその有名なるはアメンホス第四世 (Amenophis IV) がアトーン (Atou) と呼ぶ太陽神を以て、一切の他の諸神を

否定し去らんと努めたることにして、頗る一神教に近きものを實現せんとしたるものなれども、そのアトンたるこれまた一自然神たるに過ぎず、自然神を以て自然神を壓せんとす、到底失敗に終らざるを得ず、かれの死すると共にその業の全く水泡に歸せしは、蓋し當然といふべきか、要するにエジプトの宗教は多神教の範圍を多く超ゆる能はざりしなり。

最後に吾人はエジプト人の死に關する觀念に就いて簡單に述ぶる所あらんと欲す。蓋し古來世界中エジプト人ほど死に對して特殊の注意を拂ひたるものは多くあらじ、その神はラにせよ、オシリスにせよ、又はプターにせよ、多く皆現世の支配者たると共に、また死後の世界をも管掌するものとせられたり、彼等は人の死後その靈魂の存續するを信じ、その靈魂は幾百千年かの後にまた再び元の身體に復歸し來たるものなりと思ひたり、之エジプト人が死者の身體の保存に努め、木伊乃として堅牢なる墳墓に納むるに至りし所以にして、かの三角塔(Pyramid)は即ち國王の墓にして、貴族はマスタバ(Mastaba)と稱する石造の建築物を墓とし、庶民といへども其貧富に従つて、夫々相當の設備をなせり、而して彼等

は人の死後と雖、眼には見えざれども、その靈魂は生前と同様なる働きをなすものと信じ、木伊乃とともに種々なる家具、書籍、繪畫等を入れ、また時々飲食を供養したり、死後の世界に就きて彼等は多く之を日没より聯想して、地下暗黒の世界と考へ、死者はラに導かれて、その世界に下るものなりと信じたるが如きも、亦幸福快樂に充ちたる樂園の想像をも有し、死者は先づオシリスの下に、その生前の所業につきて制裁せらるゝものとせられたり、有名なる死者の書「死後の世界に關する古傳説をも集めたるものにして、彼等はこれを死後世界の案内として尊重したり、てふ奇書の第百二十五章に、その裁判に當りて死者の答ふべき個條を挙げたり、その中に、余は虚言せざりき、余は人を餓えしめず、悲しめず、又人を殺さず、或は他をして人を殺さしめざりき、余は他に苦痛を與へたるとなし、余は神殿の供物を減じ、或は死者に與へし食物を盗みたることなし、余は升目、料目、又は尺度を偽りたるとなし、余は姦淫せず、余は眞理に耳を塞ぎたることなし、余は悲哀に前後を忘れたることなし、余は驕慢多言なりしとなし、余は斯くの如く罪なくして此處に來れり」と云ふ一節あり、以てモーゼス(Moses)マン(Mann)の法典にも

比すべく、人類の思想の何處に於ても同じ經路を取りて進むものなるを觀て、吾人は頗る興味あるを覺えたり。

ギリシアの宗教

古史に曰く、太古のギリシア人をペラスギ民族 (Pelasgians) と云ひ、小アジアの西北より移住して半島を占領し、エピルス (Epirus) のドッナ (Dodona) を信仰の中心としてこの地に居ると、故に我等はギリシアの宗教を述べんとするに當り、先づ彼等の宗教より説き起さざるべからず。

「余がドッナに於て聞き得し所によれば、ペラスギ人は神を總稱してゼオス (Zeos) と云ひ、各神靈に一の固有名稱を與へざりしが如し」とは、ギリシアの史聖ヘロドタスが公言せし所、然らば彼等の所謂ゼオスとは何ぞや、プラトニに従へば古代のギリシア民族は他の蠻族と等しく、天地の諸現象を神として崇拜せりと

云ふ、蓋し原始人類は強大なる自然界の諸現象に面接して驚異の念を懷くと雖、未だ人知の幼稚なるが爲め、之を解して科學的なる能はず、夢的想像に耽りて之を人格化し、自然現象を以て一種不可思議なる意志の作用となす。而して此靈力の強大なる人類の如何ともする能はざると同時に、之によらずんば一日も生存すべからざるなり。茲に於て彼等は自然現象に對して畏敬と願望との念を生じ、之を神として祭祀せり、所謂靈魂崇拜なるもの即ちこれなり。而して斯かる情想は、嘗に自然現象に對してのみ起るにあらず、そが祖先に對して起る、之を祖先崇拜と云ふ。思ふにペラスギ人がゼオスと稱して祭祀せしものも亦斯かる範圍を出でざるべし。

故に太古のペラスギ人は他の諸民族の如く、神を自然界の想像に宿らしめ、之を聖なるものとして崇拜する、フイテン崇拜に耽り、金石、土木、乃至井戸、その他あらゆる人類の生活に重大なる關係を有するものを祭祀せしならんもの、ちに最も耐久の性質を有する金石を以て精神の象徴となしたるが如し。西曆紀元前二世紀頃、かの地理學者パウサニアス (Pausanias) は、*Phrae* に於て見たる方形石像

像に就いて曰く、古代のギリシア民族は精神の像として天然の石を崇拜せり、されど余の見たる聖石は鬚髯を有する頭を頂き數十個の方形の石其周囲を圍めり」と而してセスピエ (Shespiea) に於けるエロス神の偶像が天然の石なることは等しく學者の認むる所なり。而して思ふにかの金石を以て神の象徴となす、これは實に偶像崇拜の起源なるべし。かくて後に及び彼等はこの方形の石を個性化して特殊の神となし、終にホーマーに至りてジウス神の子にして諸神の使者なるヘルムス (Hermes) となりぬ。つぎにペラスギ人の聖石崇拜に就いて述べんに、前に説けるが如く、彼等は畏敬と願望とより神を創造するが故に、あらゆる手段と方法とを盡して之を祭祀し、その忿怒に觸れざらんとし、欲求の満されんことを計る。茲に於てかの呪法、供拜又は祈禱等の宗教的儀式を生ずるを常とす。ペラスギ人の聖石崇拜の儀式も亦之と其軌を一にせり。之を例へばデルフィー (Delphi) に於ける聖石の崇拜に就いて云はんに、此地の住民は日々その上に油を澆ぎ、祭典には紡がざる羊毛を被ひ、且つ其周圍に神餐を捧げて祈禱せりと云ふ。斯くして彼等は此の宗教的儀式に一種の呪法的能力を認め、願望は之によりて聽かれ、呪

咀は之によりて達せらるべしと信ぜり。考古學上の研究の結果によれば、ペラスギ人は西曆紀元前二〇世紀以後に所謂ミッセニア文明を産出し、廣く地中海岸の文華を集輯せりと云はる。斯くの如き經驗の蓄積と人知の發達とは、自ら彼等の宗教にも多大の進歩を促し、先きに固有名詞を有せざりしセオスは知性の成熟するに従ふて個性化せられ、方形の聖石は技術の進歩に伴ふて人間的形態を探り、以て偶像の崇拜を生み、生活の安易に連れて詩的想像に耽り、戯曲的物語なる神話を作るに至りしことは論を俟たず。然れどもペラスギ人は賊にギリシア半島の永久的君主にあらざりき。彼等は西曆紀元前一五世紀頃に小アジア地方より侵入し來れるヘラス (Hellas) 民族の爲めに征服せられ、終にその文明と共に人文史上を去りぬ。離は自らその間に風俗習慣の差異を生じ、而も前者の宗教と後者の宗教とは永く彼等の日常生活を支持せるものなるが故に、容易に調和渾融すべくものあらざり、斯くして各民族と都市とは各、その好む所に從ひ、遂に雜多なる神靈の崇拜を

生じ、半島の宗教は暫らく混乱の状態を示せり、されど彼等は同一半島に住し、互に共通せる利害関係を有するが故に永くこの状態を持續する能はず、次第に相互の習慣を知り、風俗を解するに及びて、國家的統一の機運を生ずると同時に、宗教思想の融合を來たし、西曆紀元前十一世紀以後に現はれたるホーマー(Homer)及びヘシオド(Hesiodus)の如き詩人によりて、こゝに新宗教を構成すべき運に會せり。ホーマーが世にありし當時のギリシアは貴族專政の時代なりき。故に彼は多數の神靈中より十二神を選び、之に他の諸神を隸屬せしめて神の貴族的王國を作り、半島の北境オリブス山上をその靈地とせり。世人これをホーマーの合社(Homer's Pantheon)と云ふ。

十九世紀の大哲學者ヘーゲルは常にギリシアの宗教を呼びて、美の宗教と云へり。實に彼等の神は自然界に現はるゝ審美的現象なりしなり。想を三千年の昔に馳せて當時の宗教思想を懐けるギリシア人と談笑の中に相見たりと假定せよ。かれは半島の北境に端然として動かざるオリブス山頂を指示して、そこに天地の創造主なるジューズ(Zeus)神が世界を瞰下しつゝあるを語らん。若しそれ暗雲山

峽を塞ぎて中に電光の閃くあらば、そはジューズ神が電雷を驅りて不敬なる罪人を鞭打しつゝあるを意味す。大洋の波靜にして白帆の影倒に映ずるときは、海神ポセイドン(Poseidon)がオリブス山を訪へる虚に乗じ、その美しき女神と逢引せんが爲めに、火の神ヘフエストス(Hephestos)が地下より來れるなり。而してまた太陽の中天に懸かるは實にアポロー(Apollo)が火焰の車を驅りて天上を旅行しつゝあるなり。ニムフ(Nymphs)は小川の中に隠れ、月光物凄く林間を照す時こゝにアテミス(Artemis)を見深淵の中には天上を戀ひて病に細れるプルトー(P Pluto)のあるあり。海岸にはプロタス(Protes)その角を巻き、シレン(Sirens)は岩窟の中に悲しき曲を奏て、オーロラ(Aurora)は美しき曙の色に染められてアポローの先驅をなし、梢を渡る朝風にエオルス(Aeolus)の面影を忍ぶべし。

ギリシアの神は斯くの如く自然界の美しき現象なると同時に、その性情行爲に於てもその形態容姿に於てもまた壯大にして端麗なる人間なりき。實にジューズ、アポロー、アゼン(Athene)及びアンロダイト(Aphrodite)その他ホーマーの諸神は圓満無上なる美の形容を有し、而も人類の視力以外にありと雖、その姿を現はせば

必ず人目を眩するが如き後光に包まるゝ若人として見られたり而してその性情と行爲とに至りては益、人間的なるものありき。彼等は時に争闘し時に譎詐し或は不倫なる戀愛をなし、或は歌舞靡樂に耽りて日も尙足らざるがごとき生活をなしぬ。吾人一度ホーマーの詩篇イリアド(Iliad)及びオデッセー(Odyssey)を繙かば、こゝにオリムプス山上の諸神がその奴隸バルカン(Vulcan)を叱咤し嘲笑しつゝ杯盤の中に狼籍を極め、或は美しき音聲に連れてアポラーがその豎琴を弾じ、或は日没して興盡くれば諸神が各その住家に歸り、ジューズ神もまた戀人なるヘレ(Here)の腕に縋りて樂しき床に急ぎつゝあるを見ん。而して又彼等は互に相闘ぎしのみならず、人間とも亦戰を開けり。されど戰へば必ず勝つと云ふにあらず。敗るれば走りてジューズ大神の許に行き、その不平を訴ふるを常とせり。斯くの如くかれ等は純然たる人間的性情を有するが故に、暗黒なる運命の支配を脱する能はざりき。即ち彼等は全く自然法の命令に服従せざるべからざりしなり。オリムプス山上の諸神が不死なるはその本性より來たるもあらず、チクター及びアムプロシアと稱する靈藥を服用しつゝありしが故のみ、世界の重なるジューズ

ス神の如きも猶その子サーペドン(Serpent)の死に對しては運命の下に屈せざるべからざりき。時には彼等を全知全能なりと云ふと雖、そは眞に然るにあらず。誠に運命は彼等の主なりしなり。
故にホーマーの神は超自然的神靈にあらずして現實に即したる人間的の神靈なりと云ふべし。そは未だ全くその粗野なる原始的性質を解脱せざりしが故に、完全にして嚴格なる道德的善の理想として現はされず。彼等の善は感性を犠牲とするも尙悔ひざるが如き絶對的價値を有するものにあらずき。彼等の問ふ所は抽象的美徳又は善行にあらずして、個人の氣質と衝動とより來たる美徳又は善行なりしなり。故にホーマーの神は具體的善の理想なれども抽象的善の理想にあらず。例へば正義秩序乃至仁慈を以てその本質とせるジューズ神の如き、神人の主なると共に正義の代表者なりと雖、猶萬事を犠牲とするも服従せざるべからざるが如き絶對的善の理想にあらずき。感性と理性、美と善との調和、これ實にギリシア民族の理想にして而も諸神の本質なりしなり。而して又彼等が斯くの如く一方に峻嚴なる道德的理想としての神を有せんとして、他方に未だ自然

的色彩を超脱する能はざる神を有せし所以のものは、この民族の境遇と性情とに起因すと雖、尙他に一の看過すべからざる者あり。そは實に彼等の宗教が豫言者乃至僧侶によりて作られずして、詩人の手によりてなりしこと是なり。詩人によりて作られたるギリシアの宗教は、次ぎて來たれる詩人及び藝術家により益、その内容を豊富にし色彩を鮮明にして、遂に後代の人士がギリシア文明の粹として尊重する文藝を産生するに至りぬ。先づ詩人の方面より説かば、かのテイルチニス(Tyrtæus 西暦紀元前六五〇頃)は愛國的宗教思想を歌ふてこれを國民に教へ、ピンダー(Pindar 西暦紀元前六二四頃)は善惡の應報を説きて自然法を神人の支配者なりと主張せり。而して悲劇詩人エスキラス(Aeschylus 西暦紀元前五二五)は神人の背後にかれ等を支配しつゝある運命の神テメシス(Nemesis)の存在を認め、以て運命と自由、感性と理性、偶然と必然等の間に生ずる争鬭を歌ひ、ソフクレス(Sophocles 西暦紀元前四九七)の如きに至りては就中敬虔なる詩人にして、その詩篇中にアンテゴーン(Antigone)をして云はしめて曰く、然り姜は國法に服従するあたはず、何となればそは神の法にあらず、不死なる神の正義より出

てさればなりと、而してまた藝術家は神の性情を益、醇化して、調和的形式の中に宗教的善美と崇嚴との思想をつたへたり。例へばフィディアス(Phidias 西暦紀元前四九〇)のジウス神は、神の絶大なる能力と聰明なる知性と比類なき壯美との表現を有せり。しかもこの大理石像は有名なるオリムピアの殿堂中に安置せられ、ギリシア民族の崇拜をこゝに集めぬ。史上所謂オリムピアの競技とは實にこの神の祭典に外ならざるなり。

斯くの如くホーマーの宗教思想は一方に詩人及び藝術家の手に移りてその内容を發展すると同時に、又他方に僧侶の手に渡りて益、道德的色彩を増加するに至りぬ。蓋しギリシアの神は審美的理想なりしと雖、そは全然道德的要素を缺除せしにあらざして、必ずや當時の人心に宿れる道義的理想を體現せしは言を待たず。而して就中この側面を代表して國民道德の軌範となり、ギリシア民族が崇拜の對象となりしものをデルフィーに於けるアポローとなす。アポローは父なる天地の主ジウス神の意志を人類に傳ふるものなるが故に、かれの一言一行は直ちに國家の方針となり、國民の範典と見られたり。されどかれは直接に父の意志

を一般の民衆に傳ふるものにあらず。なほその間に僧侶の介在を必要とせり。故にデルフィーに於ける僧侶は神の啓示を承けて、之を國民に傳ふるものなりき。これをデルフィーの託宣と云ふ。而してそがギリシア民族の全生活を支持指導せるは西曆紀元前九世紀以後なりと傳へらる。立法にまれ、殖民にまれ、同盟にまれ、デルフィーの託宣によらずんば一としてこれをなす能はざりき。されど最も吾人の注意すべきはそが國民道德の上に與へたる効果なりとす。純潔節制乃至自覺等の高尚なる道德的思想はこの神より出でて、而もそは國民の修養に多大の影響を與へたり。これ一はギリシア民族が次第に社會的關係に醒め來たれる結果なりと雖、尙吾等は人生の博き經驗と深き理解力とを有せし豫言者の僧侶の慎重なる考慮と省察とによるものと見ざるべからず。今や正義の標準は常に外面的なる行爲の如何にあらずして、内面的なる意志の如何にありき。内心の純潔は行爲の道德的價值判斷に於ける唯一の標準となれり。吾人はデルフィーの殿堂に於て當時の道德的思想の一般を窺ふを得べし。曰く、美しき者は一滴の水を以て足る。されど邪なる者は大海の水と雖、その罪を洗ひ去る能はず。汝自身を知れ。如何

なるものも節制に優らずと。

されど西曆紀元前六世紀頃に及びて、デルフィーの託宣は頗にその信頼と勢力とを失墜するに至れり。これ一は僧侶の救す可らざる過失によると雖、尙時代の變化に伴ふ思想の推移をその最も大なる原因と見ざるべからず。當時ギリシアは實に根本的革新の時機に達し、在來の貴族專政は倒れて共和政體之に代り、舊信仰と舊習慣とを打破して新思想と新信仰に生きんとする欲求を生じ、國民は自覺して自由を求め、以て合理的生活を送らんとするに至りぬ。而してこの時代精神は宗教思想に現はれて、ホーマーの神話に對する反動となり、二方面に發展して一は共和主義に伴ふ自由思想より來たる民族的乃至平民的神靈の崇拜となり、他は神話的宗教に對する哲學的批判となれり。斯くしてギリシアの國運は旭日の勢を以て興隆せしと雖、西曆紀元前五世紀の中葉に及び、内訌外患交起り、國力疲弊してギリシアは昔日のギリシアにあらず。その結果遂に厭世的思想と懷疑的精神とを生ずるに至りぬ。前者を代表するものは平民的神靈の崇拜より來たれる秘密教(Mysteries)にして、後者を代表するものは自然哲學に始まり、ソフィス

ト(Sophs)に至りてその極點に達せる懷疑論なりとす。

古代のギリシア人はデメター(Demeter)及びディオニシアス(Dionysius)をば農業の神として崇拜せり、その神話によればデメターはブルトと稱する死の神に奪はれたる娘パーセフォン(Persephone)を索めてこれに遇ひ、終に昔日の如く樂しき生活を送るを得たりと云ふにあり。これ實に植物が秋に凋落して、春に再生するを象徴せるものなり。されどそは時代を経過するに従ひ、他の宗教思想と結合して遂に敬虔なる人に來たるべき幸福なる來世の保證となり、一定の儀式によりてそれを獲得すべしとなすに至れり。之を秘密教と云ふ。而してそは古代の傳説乃至神話を適用して教理を作り、之を古代の豫言者なるオルフニス(Orphens)に歸して神の啓示なりと稱し、以て神學を組織せり。秘密教の神學の中心思想は實に人類の復活にありき。人間は神と神ならざるものとの二要素より成る。即ち人の靈はその起原を神に有すと雖、犯せる罪惡の爲めに地上に降り、肉體と稱する牢獄に幽閉せられ、死も亦そを解く能はず。輪回轉生の中に彷徨するに至れり。故に人はこの苦しみ多き輪回より解脱せざるべからず。この道はたゞオルフニス

が制定せる儀式によりてのみ開かる。而して之を行はんが爲めには先づ禁欲的生活を送り、殊に肉食を斷つべしとなせり。斯くして來世の幸福と神の如き運命とは齋戒せるこれ等の人にのみ與へられ、他の人類は悉く地獄の苦しみを嘗め然らずんば新なる肉體的生活に入るべしと説けり。

この神秘思想と相對して啓蒙的運動は起れり。エレア學派の祖ゼノファテス(Zenophanes)西曆紀元前五七五頃⁵は古來の神話に峻嚴なる批判を下し、神に人間の性情と形態とを與へたるを難じ、神は純然たる靈にして人類に比すべくもあらずと論じ、バルメニデス(Parmenidas)西曆紀元前五世紀頃⁶は神を一にして而も萬有を包含する不變不動の實在とし、雜多にして變化極まりなき現象界は夢に等しと説けり。されどヘラクライトス(Heraclitus)西曆紀元前四八〇頃⁷出で、之を難じ、世に何等の永久的實在なし、存するものは只變化のみ、世界の運行は走馬燈の如しとなしぬ。こゝに於て吾人は如何にギリシア民族の思想が現實界を厭ひ且つ疑ふに至りしかを認むるを得ん。この傾向は遂に生活の價值、正義の存在及び宇宙の秩序を疑へるソフィストに至りてその極に達せり。いまこの思想を概観

せんが爲め、彼等の口にせし言を述べんに、吾人は全く神の存在を知る能はずと云ひ、「我は萬物の尺度なり」と説き、神は怜悯なる政治家の創造物にして、法律は强者の権力と同意義を有すと唱ふるに至れり。

古來社會生活の方針が一度其權威を失ふや、一方には既に棄てられし過去の生活方針を呼び來りて之に依らんとする懐古の人を生じ、他方には全然過去を破壊して新なる生活方針を建設せんとする急進の人を産するを常とす。されど正道は中庸にあり。果せる哉、此時ギリシア民族の互に相衝突する二大思潮を調和せんとして現はれたる二大哲學者のあるありき。ソクラテス(Socrates 西暦紀元四六九及び一三九九)プラトール(Plato 西暦紀元前四二九一三四七)の事業即ち是なり。ソクラテスは、汝自身を知れ、の箴言を前提として國民に覺醒を迫れり。實に彼は國民の自覺を促すを以て己れの天職と思惟し、最高にして萬事を處決する理性の存在を信じ、そをダイモニオン(Daemonion)と云ひ、且つ彼の心奥より來たる良心の叫をばダイモニオンの聲と云へり。斯くして彼は死の面前に立つも、なほこの神靈的實在の命令に従ふて國家の權威に反對し、從容として刑場の露と消え

しなり。プラトールはソクラテスの所謂汝自身を知れの思想を繼承して之を超越覺界に及ぼし、以て二元哲學を組織せり。かれの所謂超感覺的たる觀念界、即ち理想界は神の世界にして眞善美の永久的典型なると同時に、現實界に起る諸現象の基礎にして又その目的なり。現實界は神即ち最高眞善美の統一的觀念の中にその源を發するが故に、人間の靈もまた觀念界より來れるものなり。換言すれば人間の靈は神より來たれるなり。而して靈が苦痛多き現實界に下れるは無知の結果に外ならず。されどそは猶地上に降れる當時、臘氣に天上の記憶を留め、初めは殆ど無意識に等しと雖、理想界の反映なる現實の事物を見るに及びて、次第に觀念界の姿を思ひ浮ぶに至る。茲に於て靈は反省して美しかりし天上の生活に遺瀨なき憧憬の念を生じ、爲に現實界の眞善美に對して熱烈なる愛を生む。之をエロスと云ふ。エロスは神人の媒介者にして救濟的神靈なるが故に、人類は之によりて理想界に至るを得。茲に於てプラトールはエロスによりて人類は救濟せられざるべからずと説けり。而して此思想は後に至リストア學派によりて採用せられたり。

ストア學派はプラトーンに因る處多しと雖、それはプラトーンが現實界と理想界とを分離せし二元觀を放棄して、ヘラクリイトスの汎神論を復活するに至りぬ。その説によれば、宇宙の實在は物體なり。されど物體は二面を有し、一は精神にして他は物質より成る。斯くしてストア學派は物心一元論を組織せんとせり。而して精神は理性 (Logos) にして即ち神なるが故に、宇宙は神の現顯に過ぎず。人は地上に於ける最高の實在にして其靈は神なる理性の一部なり。人間の義務はこの宇宙を支配する道、即ち神の理法を知りて之に従ふにあり。されど理性は人間の靈に宿りて之を性と云ふ。故に神に従ふは性に從ふを意味す。斯くしてストア學派は宗教の極意を、天地の道に従ひ天命に安じて己れの性を冥想するにありとなせり。「天命に安んず」之實にストア學派の根本思想にして又當時の人心を支配せし大要求なりしなり。何となればギリシア民族は一度北狄マセドニア王國の前に膝を屈して再び立つ能はず。次で當時興れるローマ帝國の下に壓せられ國家的獨立を失ふと雖、社會的生活の安易を奪はれ、爲めに遂に厭世的となり内心に安立の地を求めんとするに至りしが故なり。

ギリシア民族が斯くの如き宗教思想に耽りつゝありし時、俄然キリスト教はその故國を去りて歐洲に移れり。吾人は彼等が如何なる態度を以て之を遇せしかを基督教の章に於て述べんとす。

ローマの宗教

イタリヤ半島の西岸タイパー河の流れて海に注がんとする邊、所謂ローマ七丘の上にローマ府を建設せる民族は、もとギリシア民族と等しく印度歐羅巴人種に屬すと雖、數千年間に亘れる境遇の差異は兩者の間に大なる逕庭を生ぜしめ、半島の地理が異なるが如く、建國の由來が同じからざるが如く、其性情に於ても亦越ゆべからざる溝渠を鑿てり。ギリシア民族は天才創意に富み文藝學術に於て他を壓し、風丰温雅にして言行多趣なりしも、ローマ人は固陋粗笨にして高遠なる思想と風流なる韻事とは唯他の後塵を拜せしに過ぎず。前者が輕快、圓滑動き易

きに反し、後者は眞摯着實にして民族的結合の情深く國家的秩序の念強くして愛國的精神に富めり、實にローマ人が地中海を以て自己の庭池となせし古代の偉業は素より言を待たず、天下後世に統治の範典を垂れしローマ法はよくこの民族の性情を表はすと共に、又その精華なりしなり、而してその所以のものは彼等が貧弱なる小都府より起りて、民族吞噬の渦中にその存在を完うせざるべからざりしが故なり。

ローマの宗教をヌマの宗教と云ふ所傳によれば、ローマ第二代の王ヌマ(Numa)によりて制定せられたるが故にこの名ありと、蓋し人類社會に起り來たる凡ての現象は必ず民族の境遇と性情とに規定せられてその色彩を異にす。ローマの宗教も亦この範に洩れず、故に我等は先づその特色を擧げて然る後その細説に及ばんとす。

ローマ人の固陋粗笨にして眞摯着實なる性情は彼等の神によりて赤裸々に現はされたり。ローマの神は未だ全く素朴的性質を解脱せず、依然として自然現象の中に宿る精靈的實在と考へられ、自然の運行を管理支配し、人類の生活を保護

指導するものなりき。換言すればローマの神は未だかの幼稚なる靈魂論的實在(Animistic reality)以上に出づる能はざりしなり、而もこの民族の實際的精神はこゝに働きて、神を人類及び國家の爲めに存在するものとなし、ローマ民族の爲めに働く一種の奴隸と見たり。故に彼等の神は天來の賜にあらずして悟性の産物なりと云ふべし。ギリシアの神は各自獨特の性格を有して意の欲する儘に云爲するを得たりと雖、ローマの神は然らず。彼等は義務の中に生きて遂行すべき職責を有し、且つローマ人が次第にその勢力を増大して他の民族を征服するや、好みて彼等の神を採用し之を祭祀せしと雖、そが自己または國家に何等の益を來たさざる時は之を棄て、願ざりき。故に彼等の神は功利的産物なりしなり。斯くの如くローマ人の問ふ所は一に神の職能にありしが故に、純然たるヌマの宗教にはギリシアに於けるが如き神の畫像なく、神話なく、殿堂なく、所謂フレイシの崇拜に過ぎざりき。然れども後ギリシアと接觸するに及び其文明を輸入し、なほ諸民族の征服に伴ふ宗教思想の影響はそが宗教の方面に於ても亦一段の進歩をなすに至れり。

而してその神人間の關係に至りては益々ローマ的なるものありて存せり。彼等が立法的性質はこゝに現はれて神人の間に何等の情緒的分子を混入せず、萬事は權利義務の觀念によりて制定せられたり。蓋しその原始時代に於て彼等は他の民族と等しく、自然現象の偉大なる勢力に對する畏敬と依頼との情を以て出立せしと雖、漸次自己の性情を其中に投射し、神人の關係を法律的契約關係と同一視するに至りしなり。故に神人共に其約束を履行すべき責任を有す。若し神にしてその靈驗を垂れんか、人は供拜を捧げて之に報ひざるべからず。人あり一定の儀式によりて神に祈らんか、神は祝福を下して之に應ぜざるべからず。若し神にして此契約を破棄せば、人は彼を忌避して他の神に縋るを得たり。之ローマ人が次第に舊を去りて新しきに就き、他の民族の神を採用するに至れる所以なり。神人の關係にして既に斯くの如し、其儀式の如何に至りては自ら知るべきのみ。世人はローマの宗教を目して儀式の宗教なりと云ふ。ローマの宗教に於ては敬虔の情は煩瑣なる形式の下に蹂躪せられ、信仰の念は繁文縟禮の中に消滅して、祭典と儀式とは實にその主なる要素となれり。祭典は國民の日課に等しく、儀式

は國家の法律と同一視せられ、以て寸毫も其亂れざらんことを期せり。實に彼等の宗教的儀式は一言一行の微と雖、之を苟くもすべからず。若し之を誤らんか、それは直に効力を失ふて神の容るゝ所とならざるが故に、再三反復せざるべからず。祭典の時と處とは規定せられ、祈禱及び供物も亦必ず法に従ふて而も定まれる人によりて行はるべしとなせり。斯くしてユマの宗教は遂に其中核を棄却し、専ら其形式に慣れて言行の法に合せば、内心の如何は措いて問はざるに至りぬ。然らば祭典は如何なる人によりて行はれしか、僧侶か、あらず。そは神靈が宿りて之を保護干渉する事物の管理者によりて行はれたり。神人の間に僧侶の介在を認めず、直接に神を祭りしは、蓋し原始宗教の特色なるべし。例へば家庭の神はその家長によりて祭られ、國家の神は國王によりて祭られ、竈及び庖厨の神は主婦によりて祭られしが如し。然らば羅馬には僧侶の階級は存在せざりしか、否然るにあらず。彼等は一方に宗教的儀式の傳授者なると共に、他方に國家の大祭にその助手を務めたるのみ。然るに後ト占術の勃興すると共に、彼等はト占者として國民の間に重大視せらるゝに至れり。

齎つてローマ建國の由來を見るに、所傳によれば太古一民族ありて七丘の一なるパラタイン山上に居を定め、稼穡牧畜を業とせりと、故に當時彼等が崇拜せし神は家庭と農業との神なりき。然るに漸く人口の増殖するに、従ひ其版圖を擴大し、遂に近傍に住せし民族と結合して所謂ローマ府を建設し、以て國家的組織をなすに至れり。茲に於てローマ人は家庭及び農業以外、尙一の國家的團體として存立すべく、内は社會の秩序を保ち、外は他民族の侵入に備ふべき必要を生じ、古來の神を採りて國家の神となし、以て其安寧を祈るに至るは極めて自然の數なりと云ふべし。されど彼等は之が爲めに家庭及び農業の神を忘却したるにあらざるが故に、又その宗教は中に三種の禮拜を留めたり。

人類が未だ國家をなさざりし以前、彼等がその城砦として一身の安危を委ねし所は家庭に外ならず。故に未だ國家的團體を作らざりし當時、而もその性情に於て眞摯着實なりしローマ人が一家を思ふの念深く、爲めに家庭の神靈を崇拜して、之に家門の繁榮を祈るは蓋し怪しむに足らざるなり。門戸は一家の鎖鑰にして、出入共に之に縁りしが故に、家庭の守護神として之にヤヌス(Janus)の名を與

へ、庖厨は日常生活に缺くべからざる食物を調理する所なるが故に、之を祭りてペナーテス(Pentes)と云ひ、竈は食物を煮且つ暖をとる所なるが故に、之を神としてその名をヴェスタ(Vesta)と呼べり。外にラル・ファミリアリス(Lar Familiaris)及びゼニウス(Gonius)と稱する神ありき。最初羅馬にはラルス(Lares)と云へる幾多の農業の神ありしものちに、至りてその中よりラル・ファミリアリスのみ選ばれて家庭の神となり、一家の大事に際しては必ずこれを祭るを常とせり。ゼニウスは一種の精靈にして人心に宿り、その氣質となり、且つ生殖力を與ふるものとなれ考へられき。故にそは家人の誕生日に祝はれ、結婚の床に祭らるべきものとなれり。その他羅馬には胎兒或は小兒を守護する數多の神と、婚禮に行はるべき雜多の宗教的儀式とあれども、こゝにこれを述ぶるを得ず。故に我等は直ちに彼等が祖先の靈に關する思想を見んとす。羅馬人は人死すれば現世を去りて冥府に赴くとの思想を有せり。冥府は現世と何等の交渉なきが爲め、神の支配し得る範圍にあらず。故に死せる祖先の爲に祈るは全く徒事なりとせり。然るに素も靈はあ

る一定の時に冥府を出て、地上に遊ぶと考へしが故に、この時に彼等は恰もわ

が國の「魂祭り」とも云ふべき祭典を行へり。されど後に至りて冥府の神を作り、之に祈れば亡靈の幸福を得べしとの思想を生じ、遂に彼等は祖先の爲めに彼岸の善生を祈るを子孫の等閑視すべからざる義務となすに至れり。

次に農業の神を見るに、その數の夥多にして禮拜の複雑なる、悉くこれを擧ぐる能はざるが故に、就中主要なるものを執りてその特色を見るにとどめん。羅馬人は三月を以て年始となせり。故に農業の神の祭典もこの時に始まる。而して農事に三期あるが如く、その神の禮拜をもまた自ら三期に分つを得。第一期は春の祭典にして植物の發芽し生長する時なるを以て、神は主として種子の發育を保護し、植物の生長を掌るものなり。例へば四月十五日に行はるゝ神の祭、フォルディンディア(Fordicidia)及び四月十九日に行はるゝ植物の神の祭、セラリア(Cerialia)のごときこれなり。斯くして豊作物は漸次生長し、秋に至りてついに成熟の期に達す。茲に於て秋の祭典は來たるなり。この時期に禮拜せらるゝ神は收穫に關するものにして、八月二十一日に行はるゝ納屋の神コンヌス(Conusus)の祭、及び八月廿五日に行はるゝ穀類の神オプス(Ops)の祭のごときその主なるものなり。づぎに冬の

祭典期に入る。冬は來たるべき春の準備時代にして、田圃は耕され種子は播かる。時なるが故に、農民は一方に農具の除祟祭を行ひ、田野の穡を被ひ播種の祭をなし、以て種子發育の前途に危害なからんことを祈れり。

然るにローマが一度國家的團體として成立するや、そは一面に於て農業國なると共に、他面に於て軍國となれり。軍國となりし羅馬は其存在の安易を助くべき神の必要を生ぜり。茲に於て彼等は從來國民が崇拜せる家庭の神と農業の神とを採りて、その職能を變じ以て國家の神を作れり。家庭に於て門戸の神なりしヤヌスはローマ城門の神となり、國家の守護神として全國民の崇拜を受けたり。ジュピター(Jupiter)は素と天の神にして空中に起る諸現象を掌り、農業の神として祭られしものなれども、國家の神と變じてその風雨雷電を驅る狂暴なる威力は戰場に應用せらば軍神となり、而も勝利を與ふる神として考へられ、又内治の必要上之を秩序の支持者となし、正義の神と見るに至れり。イーノー(Eno)は初めジュピターと並稱せられたる月の女神なりしが、のちその溫和なる性質はローマ婦人の守護神として分娩を助くると共に結婚の仲介者となりぬ。又植物の神、マー

ス(Mars)は軍神となり、勝利の神なるジビターと並びて軍略の神として崇拜せられ、三月一日より數十日間之を祭り、野猪を以て其犠牲とするを常とせり。斯くの如く雑多にして煩瑣なる神と祭典とを以てして、尙ローマ人の宗教的感情は満足せらるゝ能はざりき。彼等は一行爲を起さんとするや、危惧逡巡何等かの形に於て、神の助力を得たりと信ずるものあらずんば、之をなす能はざりしなり。この傾向は次第にその勢力を増加して、遂に彼等は卜占術を案出し、自己の意志を神に通じ、而して神の意向を問はん、とするに至れり。斯くして卜占術は羅馬の上下にその勢力を逞うし、時代を經るに従ふて益、その煩に堪へざるに至りぬ。然らば彼等は如何にして之を行ひしか。星晨の位地に於ける變化、鳥類の飛翔する方向乃至有様及び動物の内臓器官の形狀等より暗示を得、卜占者ありて之を解釋し判断し、以て事の吉凶を決せり、而して神に三種あるが如く卜占術にも亦三種の別ありき。

モンゼン曰く、ローマがその勢力を増大して版圖を擴張するに従ひ、個人の自由は益、輕減せられ、法律は萬能となり、規則は嚴格となり、彼等の思想及び行爲は狹

隘なる範圍の中に封鎖せられ、人民は一方に全力を盡して一家を經營すると共に、他方に從順なる國家の奴隸となるを以て最大の義務となすに至れりと、換言すれば、個人としてのローマ人は國家と稱する大磐石の下に壓倒せられ、一團體としての羅馬人は之を認むるを得れども、一個人としてのローマ人は之を認むる能はざるに至れりと云ふにあり、これ實にローマの帝國主義的政策上止む能はざる結果なり。されど人類は次第に發達し進歩するが故に、何時までか斯かる沒個性的境遇に満足するを得ん。小兒は何時か親の支配を脱して個性を發揮し、獨立自治の人とならざるべからず。之と同じく偏狹なるローマの愛國的精神は其反動たる個人的自由の興味に覺め、茲に啓發的思潮は次第に頭角を現はすに至れり。そは實にギリシア思想の影響によりてその端緒を開けり。試みに當時ローマの先覺者がその胸中に懷きし感想を想へ、彼等は如何にギリシア民族の自由にして快活なる性質と、光彩燦爛たる文藝學術とを見て、己が生活の空虚にして思想の貧少なるを感じたるか。ローマは伊太利半島を統一せる時代より、漸次ギリシア化せられつゝありしなり、而して後彼等がギリシア半島を併呑するに

及び益、其影響を蒙り、ギリシア哲學の輸入と共に、從來の宗教は嚴肅なる批判の下に鞭撻せられ、ストア學派の信仰が勢力を得るに至りぬ。

されど斯くの如きは、社會の上流に位する識者の事にして、一般民衆は未だ古來の迷信的信仰を棄つる能はず、殊に卜占術の如きは時と共に益々盛大を極め、加ふるにギリシアの秘密教と合し、殆ど救ふべからざるに至れり。斯くしてローマの宗教は無知なる者の迷信と賢明なる者の不信仰とに終れり。ローマは外に全世界とも見るべき大版圖を有しながら、内は信仰上の危機に瀕し、國民は健全なる生活の方針に惑ひつゝありしなり。然らば此欠陥を補ふて、彼等に新しき信仰の光を與へしものは何ぞ。そは必ずや一般民衆を救ふべき平民的宗教ならざるべからず、此任にあたらんとして來れるものは即ちキリスト教なりしなり。

ユデアの宗教

ユデア教はバビロンの虜囚後に發展したるイスラエル人 (Israelites) の宗教なり。

西曆紀元前六百年頃イスラエル人は、東の方バビロン王國の爲めに斃れて虜囚の民となり、その奴隸として殘酷なる壓制の下に生活せりと雖、古來その守護神として崇拜せる神を忘れず、益々之に祈りて來たるべき幸運を待ちつゝありき。果せる哉、五十年の苦役はベルシア國王の免する所となり、本土に歸るを得、イェルサレム (Jerusalem) を中心として遂にこの特殊なる宗教の發展を遂げたり。故に吾人は先づユデア教の前身なるイスラエル人の宗教より説き起さざるべからず。

太古セミチツク人種の一派漂流してカナイン (Canaan) 地方に入り、酋長エフレイムに導かれてヨルダン (Jordan) の流を渡り、西方に下りてこの地に住し、稼穡牧畜を業とす。これを稱してカナイン人と云ふ。彼等はエチプト人と同じく天地の現象に宿る靈魂を祭りて、フェイスン崇拜に耽り、日の神バール (Baal) を農作物の守護神となし、之に祈りて收穫の多きを願へり。

されど當時なほ南の方アラビア (Arabia) 半島の西岸紅海に斗出するシナイ (Sinai) 地方にイスラエルと稱する一民族ありき。彼等はカナイン人と同じくセミチツク

人種に屬し、本土エヂプトを去りて遊牧の民となり、水草を逐ふて漂流の生活を
 送り、故に最初はエヂプト人と等しく自然現象の中に宿る靈魂を祭りてこれ
 を神となし、信條なく經典なく開祖なき所謂自然宗教 (Natural Religion) を奉じ、呪
 法禮拜を以て神を祭り、墳墓井戸乃至高山を聖地として種々なる物語を作り、神
 を讚美せしならんも、境遇の變化は何時までか舊き信仰によりて内心の要求を
 満足するを得ん。遊牧の民となりし彼等は終に新なる信仰の中に生きざるべか
 らず。蓋しアラビア半島は熱帯の域にあり、天變地異の最も激甚なる地方に位す。
 而して遊牧の氏イスラエル人が、其生活に最も多大の關係を有するものは天候
 の如何にありき。茲に於て彼等は空中に起る諸現象の支配者を雷霆となし、之を
 神として南方平野の中に突出するシナイ山上に居らしめ、エホバ (Jehova) の名を
 與へて諸神の王と見たり。

而して雷霆の神エホバは後に軍神となり、民族の守護者となりぬ。前に述べしが
 くイスラエル人は漂浪の民なりしが故に、他の民族と接觸し易く、時に隣邦民族
 の領地を侵略して之に住し、時に強大なる民族に逐はれて困憊の苦を受くるを

常とせしが故に、その獨立と存在とを保たんと欲せば、内は民族の統一を鞏固に
 し、外は其生存を保護すべき強大の力に頼らざるべからず。斯くしてエホバはイ
 スラエル民族の獨立を保護する職能を有するに至り、その閃々たる電霆は戰場
 の劍光に比せられ、その轟々たる霹靂は武夫の喊聲と見られて軍神となりしな
 り。而してイスラエル人はこの神の崇拜に全力を傾注して一身の安危を委ね、エ
 ホバが彼等に與ふる恩恵に報ぜんには、彼に對して絶對的敬虔の念を以てせざ
 るべからずとなし、他の諸神を放棄して顧ざるに至りぬ。此排他的思潮こそ實に
 夙くイスラエル人をして一神教の民たらしめし所以なれ。

斯くの如く唯一神を崇拜せし遊牧の民は後に流れて北方エルサレムの地に移
 住し、遂にカナアン人と合して所謂エデア (Eden) 王國を建設せり。然れどもイス
 ラエル人はこの地に居を卜するや、直ちに其隣人と合せしにあらざる何となれば
 彼等はカナアン人が築ける城壁を突破して、之を征服する能はざりしが故なり。
 茲に於て彼等は隣人を放逐せんとする要求を制止し、平和なる手段によりてこ
 れと親交を結び、遂にカナアン人より農業の術を學びて農民となり、エルサレム

をエホバの聖地としてこの地に定住するに至れり。これ實に西曆紀元前一千年頃にして、ダビテ王の時代なりき。

既にイスラエル人はカナイン人と合して遊牧の生活を棄て、順良なる農業の民となりぬ。茲に於て彼等は過去に崇拜し來れる軍神エホバのみを以て生活上の要求を満足する能はず、隣人と共に農業の神を崇拜するは、蓋し止む能はざる勢ひなりしなり。斯くて彼等は遂に異教の神として侮蔑せるバールを崇拜し、其祭典を行ふに至りぬ。されどエホバは全部忘却せられしにあらず、農業の神バールと並立する軍國の神として崇拜せられたり。茲に於て兩民族の宗教は混融せられ、イスラエルの一神教は多神教となり、次第に偶像の崇拜に傾きつゝありき。例へば彼等が一方に春の大麥祭乃至秋の葡萄祭を行ひしと同時に、他方に小羊を犠牲とせる遊牧時代の祭典「パスサー」(Passah)を舉行せしが如き是なり。斯かる祭典の混同は次第に兩者の神及び聖地を同一視するに至り、新なる物語を作りて終にエロヒム・エホバ (Elohim-Jehova) の名を生じ、エホバがエロヒムを合せたるか、エロヒムがエホバを同化したるかを明にする能はざるに至れり。而してイェルサレ

ムの殿堂には牡牛の姿せるエホバを祭り、一種獨特の色彩を存せしイスラエルの宗教も今は全くその特色を失はんとせり。

されど此異教的傾向の裡に尙一道のイスラエルの精神なきにあらざりき。カナイン人の文明と宗教とに感染して祖先傳來の信仰を忘却せんとするを惡み、禁欲的生活を旨とする人において、祖先の如く遊牧の民として生活するを眞に神の好む理想となし、家屋の下に住せずして天幕の中に起臥し、而も農業に従事するを以て罪惡となしぬ。反動は得て極端に流るゝを常とす。彼等の思想は餘りに保守的なりしが爲め衆人の認容する所とならざりしも、其言動の熱烈なるは、其信念の鞏固なるとは、後に幾多の志士を呼び起せり。就中著名なる者をネビーム (Nebim) とす。彼は當時豫言者として敬虔せられざりしのみならず、狂熱的夢想家と目せられ、民衆の罵詈譏諷の中に薄命なる生活を送りしと雖、後にユデア國が隣邦民族の爲めに侵入せられ、國家存立の危機に瀕せし時、國民に宗教的自覺を興へ、彼等をして一層高尚なる信仰に向はしむべき先驅をなせり。

實にソロモン (Solomon) 王朝の榮華は楨花一日の誇に過ぎざりき。四境より壓し

來たる隣人の喊聲に泰平の夢覺むればユデアは昔日のユデアにあらず。國民が常勝の神として崇神せしエホバの威力は既に竭きて彼等を救ふべくもあらず。さなきだに異教化せられんとしつゝありしイスラエルの宗教は、この逆運に會して益、其權威を失墜し、エホバの崇拜も爲に懷疑の雲に包まるゝに至れり。斯くして社會的保護と精神的安住とを失へる、多くのイスラエル人は終に非愛國的となり、民族團結の念を薄うし、古來の信仰を疑ふて崇拜の對象を代へ、以て自己一身の幸福を得んとしたるが爲め、彼等は、アッシリア人の宗教を容れてその神を祭り、先きに異教化せられたるイスラエル教は、こゝに全くその跡を絶たんとせり。されどなほ二三の眞イスラエル人なきにあらず、彼等は永く祖先の抱懐せる信仰を弊履の如く放棄するに忍びず、何等かの形に於て舊新仰を改釋し、新なる境遇と要求とに應ずる新信仰に生さんとせり。その督教徒が所謂紀元前八世紀の豫言者とは即ちこれなり。而して就中主要なる豫言者を擧ぐれば、(エリヤ (Elijah) アモス (Amos) ホセア (Hosea) イザイア (Isaiah) 等にして、外に彼等を幫助してこの宗教の隆盛を計れるヘゼキヤ (Hesekiah) 及びヨシヤ (Josiah) の二國王ありき。

然らばこれ等の豫言者は如何にして胸中に蟠れる信仰上の難關を越えんとせしか。彼等の目的とする所は専らエホバの尊嚴を恢復せんとするにありしが故に、國民の悲運を神の羸弱に歸する能はず。従ふてその原因を内に永めて遂にイスラエル人の罪に歸せり。彼等が日にその勢力を失墜して、社會的安立を得ざるはエホバの力弱さが爲めにあらずして、國民の不道德と不信仰と不誠實とが神を怒らして、かれ等を懲罰するに因るものとなせり。斯くして「悔ひ改めよ」の叫を生子、エホバは正義の神となり、イスラエル人は滅亡すと雖神の權威は永久に保證せられ、今や世界の列強は神に叛けるイスラエル人を懲罰せんが爲めに干戈を執るものとなり、エホバの勢力は増大して世界的性質を有するに至れり。茲に於て我等が特に記憶せざるべからざるものは、此紀元前八世紀の豫言者によりてエホバは遂に素朴的性質を解脱して正義の神となりし一事にあり。斯くして美德と幸福とは相即不離の關係を有し、幸福は一に其行爲と品性と如何によるものなることを明にせり。されど彼等はなほ舊き壺に新しき酒を盛りしに過ぎざりき。即ちこの新しき宗教も猶依然として物質的なると共に政略的なる

範圍を超越する能はずして止みぬ。何となれば此宗教の特色なる美德も單に神の恩寵を呼び其必然の結果として國家の繁榮を來たさんとする呪法的手段に過ぎざりしが故なり。斯くの如く豫言者の信仰は猶迷信的にして其効果は未だ呪法的なりしと雖、天の恩恵は外形的儀式によりて來たるものにあらず、内心の美德によりて來たるべしとの思想は明かにイスラエルの宗教に二個の看過すべからざる新思潮を齎せり。一は彼等が美德を愛するに至りしとにして、他は日常起り來たる禍福を犠牲乃至祈禱等の宗教的儀式によるものにあらずして、品性及び行爲によるものとなせしことこれなり。斯くして彼等は道德に呪法的價値を付することによりて宗教に道德的價値を與へ、而も道德の直接目的はエホバの恩恵を享くることにして、究極目的はユデア王國を恢復するにありき。實にこの功利的思想はユデア人の宗教を通じて失はれざりし要素なりとす。

この宗教思想の變化に伴ふて西曆紀元前七世紀頃に至り、尙一の注意すべき新傾向を生ぜり。そは古來の傳説及び豫言が神の啓示として見られ、犯すべからざる信條となりしとこれなり。蓋し知性の幼稚なる原始人類は傳説乃至儀式を神

より出てしものとなし之を神聖視するを常とす。何となれば彼等は自然界を聖靈に満たされたるものと考へしが故に、人心に神靈の宿るなしと信ずる能はず。天才の胸臆より流出する新案至想をば悉く神より來たる啓示と思惟したればなり。斯くして彼等は傳説乃至儀式をば神の意志に基すとなしぬ。然るに紀元前八世紀の豫言者は燃ゆるが如き熱誠を以て、彼等が政治的に必要なりと認めしものを説くに、神斯くの如く告げ給へりの言を以てして、其云爲は悉く天啓の致す所なりと叫べり。茲に於て僧侶も亦古來の傳説を集輯し、そを太古彼等の祖先をばエジプトの壓制より救濟せりと傳へらるゝモーゼ (Moses) に歸し、モーゼ曰く、の言を付し、遂に所謂「モーゼの五書」を作るに至れり。こはシシヤ王の御代西曆紀元前六七九—六〇八に起り、斯くして萬事は神の意志となり、一種の權威を生じて後に來たるべきユデアの律法的宗教の前提となれり。

豫言者及び國王の努力によりてエホバ崇拜は次第にその勢力を増進し、エルサレムの殿堂は改築せられ、イスラエルの宗教は再び存在の安固を得るに至りしと雖、これによりて國民が期待せし政治的幸運は終に來らず、前途に光明を認め

得ざりしのみならず、益、隣邦の侵略を受け不吉なるゼレミア (Jeremiah) の豫言は、
 竟に實現せられて、かれ等はバビロン王國の配下に屈するに至りぬ。斯くしてイ
 ルサレムの殿堂は再び破壊せられ、イスラエル人は虜囚の民として故國を去れ
 り。時に西暦紀元前五百八十六年なり。されど亡國の民ユデア人はこの逆境に投
 ぜらるゝも猶その信仰を棄てず、神と律法とに固執して益、敬虔の念を強め、民族
 的結合を堅くして時の來たるを待てり。西暦紀元前五三八年かれ等はヘルシア
 國王の爲めに許されて故土イルサレムに歸ることを得しと雖、この國家的滅亡
 と民族的逆運とは彼等の宗教思想に一大變化を來たし、新なる信念と形式とを
 採りて所謂猶太教を構成するに至りぬ。吾人はこの宗教思想を二方面より考察
 せんとす。一は後世に傳はりて現今のユデア教となりしものにして、他は基督教
 の基礎をなせるとのこれなり。

前者の思潮を代表せる者はバビロンの虜囚中ユデア的信仰を鼓吹し、彼等をし
 て其神に對する信念を固執せしめしエジキール (Ezekiel) なりき。彼はかの紀元前
 八世紀の豫言者と同じく、國民の困苦を以て正當なる應報となし、之を過古に於

て彼等が神に叛きし冥罰なりと見たるが故に、彼は國民に罪惡の感情を深から
 しめ、贖罪の念を強め、神の恩寵に浴せんと欲せば禁欲的生活を樂しみ、現世の快
 樂を棄つべしと説きぬ。幸福を趁ひ國家の安危を懸念するは最大の罪惡にして、
 謙遜を旨とし克己を努め、自己の賤弱を自覺して神に縋るは最も賞賛に値する
 美德なりとは、此豫言者が常に口にせしところなり。これ實にユジア王國の涯し
 なき衰頹に國家的存立の希望を失ひ、政治的成功の念を斷ち、古き國家の廢墟の
 上に新なる神政的王國を建設せんと志せしによるものなり。故にエジキールの
 理想は僧侶の配下に敬虔なる民衆の團體を作り、教會を中心として政教一致の
 制を布かんとするにありき。而して斯かる團體の鞏固を保たんとせば、他の民族
 と混同すべからざる特徴を要す。茲に於て彼はユデア人の最も注意して忘るべ
 からざるものを律法となし、宗教的儀式を嚴守し、且つ異教徒との接觸によりて
 聖なる心身の穢れざらんとを努むべしと説けり。此思想は後に一世紀を経てユ
 ヅラの採用する所となり、實現せられて、教念的組織をなすに至れり。
 エヅラ (Ezra) は西暦紀元前四百五十八年ユデアの隊商を率ひてバビロンよりイ

ルサレムに歸り、嘗てエジキールが理想とせる神政的王國を實現せんとせり。故に彼はモーゼの書を増補して之を律法となし、ユデア人を他の民族と峻別して之に交るを許さず。異邦人の習慣を排斥して彼等との雜婚を禁じ、且つ其侵入を防がんが爲に、エルサレムの周圍に城壁を築かんと企てたり。されどこれはベルシヤ國王の喜ばざる所となり、一時坐折せしと雖、後にネヘミア(Nehemiah)なる者ありて、再びベルシヤ國王に懇願しその許す所となりて、遂に城壁を完設するを得たり。故にエヅラとネヘミアとはユデア人の信頼を博し、モーゼの五書は國民の法律として認容せられ、僧職政權とは一致して信條は法律となり、教會は國家の形式をとるに至りぬ。時に西曆紀元前四百四十五年なり。而して萬事は煩瑣なる形式の中に行はれ、先に無意味なりし慣習も、今は神を喜ばすべき儀式となり、これを行ふと否とはユデア教會の一員たる資格に多大の關係を有し、且つこの排他的思潮は彼等のみを神の寵兒となし、自らその選民と稱して終に誇大妄想狂的宗教を作り出せり。

されどこれは虜囚後に發展せるユデア教の一面面に過ぎざりき。この堅き外殼の

裡になほ新にして一層生命ある宗教思想の潜在するものありしなり。かの紀元前八世紀の豫言者が期待せし政治的成功も今は全く一場の夢と去り、如何なる儀式も、律法も、贖罪も、將た良心も何等の幸福を來さざるのみならず、彼等は益隣邦の侵略に屈して、この難關より救濟せらるべき望なし。されど神の限りなき恩寵は、聖にして義なる者に降らざるべからず。而してユデア人は専心神に仕へつゝある聖にして義なる國民なるが故に、神の恩恵は彼等に來らずして又何處にか來らんとは當時一派の人心を支配せる信念なりき。然れども日常の事實は全くこれに反し、信仰深き者は屢、逆境に苦しみ、神を棄つる者反りて幸運の海に棹しつゝあるにあらずや。斯くの如き經驗は如何にして、義しき者に幸し、邪なる者に禍する正義の神の觀念と一致し得べきか。この懸案を懷きてユデアの思想家は深き冥想の中を辿れり。斯くして彼等は其宗教を深め強め、且つ高めて、後に來たるべきキリスト教の準備をなしつゝありしなり。今やかれ等の理想は律法と儀式とにあらずして、神そのものに對する畏敬と信頼とより來たる聖き心と、貴き行爲とを以てする神への絶對的從我の態度にありき。この思想の精華として

現はれしものを詩篇(Psalms)箴言(Proverbs)傳道書(Ecclesiastes)及び約百記(Job)となす。誠にジブが重なり來たる災禍の下に暗黒なる思想上の迷路を辿り、忍び難きを忍びて何處にか安立の地を得んが爲に奮闘努力せる勇氣は、吾人の最も讃嘆に値するものありき。當時かれの知人はユデアの應報的信仰に囚へられしが故に、この悲惨なる境遇を見てそを人知れざる罪惡の結果なりと思惟せり。されどジブは内心に一の疚しき所なきが故に、これに反對して神を呼び、この誤解せられたる人々の名譽を恢復し、その堪へ難き苦みより救ひ、以て敬虔なる人の爲めに祝福を垂れんことを祈れり。斯くして彼は日のあたり神に語り、己れの義しき者なることを保證せられぬ。されどこれは從來の如く應報的思想を以てする限り神の恩寵と兩立すべくもあらず。茲に於て彼の動かざる信念は舊思想を打破して外的境遇の如何を問はず、神との精神的交渉の自覺を有する者を以て神の恩寵に浴する者となし、神は愛する者を譴責すること、恰も親が其愛兒に於けるが如しとの結論に達するを得たり。クリストが富める者は幸なりとの一語も實に其淵源をこゝに發す。斯くしてユデア教は全く精神化せられ、美德には絶對の價

値を付せられ、外面の苦樂によりて神の恩寵は判ぜられず、安心の平和と義しきとが眞に神に棄てられざる唯一の道となりぬ。斯くの如く内的にして精神的なる宗教思想と、外的にして形式的なる宗教思想とは爾來常にユデア教の中に相對流せしと雖、次ぎて來れる異教思想の侵入によりて後者は頓にその勢力を増し、自衛の結果としてユデア教は益、形式の中に封鎖せられりぬ。

西曆紀元前三世紀頃に至り、ギリシアの啓蒙的思潮は漸次ユデアの上流社會に浸入し、爲めに儀式と律法とに疑を懐ける多くの國民は之に走り、在來の信仰と慣習とをば漸次にギリシア化せんとする傾向を生じ、加ふるにヘルシア乃至バビロンの諸國より流れ入る異教的信仰の爲に、ユデア教は其面目を一新せんとせり。茲に於て古來の宗教的精神は一派の人心を呼び覺しぬ。彼等は異教的思潮の浸入を防がんが爲に、最も煩瑣なる法則と儀式とを以て民衆を束縛し、ユデア人の特色を發揮して其結合を堅からしめんとせり。所謂パリサイの徒及び學者等即ちこれなり。彼等は從來の律法がこの目的に對して餘りに貧少なりしが爲

め、法教律令なるものを設けて民衆の云爲を狹隘なる範圍に幽閉し、日常生活の周圍に儀式の垣を繞らし、精神的にして道徳的なる詩篇乃至約百記中の理想を排して律法を神の意志となし、そを遵奉する者を最も神に忠實なる者と見、これによりてのみ人は神の恩寵を享け、幸福なる生活を送り得べしと考へたり。斯くして律法は凡人の知る能はざるものとなり、そを知らんと欲せば特殊なる修養を經ざるべからずとなせり。試に當時パリサイの徒が懐ける思想を見んに、彼等は常に「無學なる者は罪惡を犯さざらんとするも能はず、普通の信者は眞に敬虔なる能はず」と云ひ、律法を知らざる者を侮蔑し、爲めに修養ある學者と無學なる民衆との間に越ゆべからざる一線を畫するに至りぬ。イエスが所謂イスラエルの迷へる羊とは即ちこの無學なる民衆の謂なり。

されど斯かる律法的宗教も一度流れ出てたる時代思潮をば如何ともする能はざりき。或者是詩篇乃至約百記の中に現はれたる深き敬虔の念を以て神に對し、或者是ギリシア乃至ヘルシアの思想に接して律法を無視し、自由なる精神の中に世界の謎を解かんとする、これ實に當時のユデアに於ける宗教思想の概観な

りき。故に當時の宗教思想は頗る多岐に發展し、次第にその範圍を廣め且つ意味を深くして、後に來れるキリスト教の準備をなしつゝありしなり。この時代の思想を代表する者を黙示録(Apocalypses)となす。而してその特色とする所は實に宗教的意識の個人的傾向にありき。われ等は次ぎに西曆紀元前二世紀以後に於てキリスト教の準備をなし、且つキリストを産出したる宗教思想の一般を述べ、以てユデア教に筆を擱かんとす。

學者及びパリサイの徒の高壓手段も、能くギリシアの合理主義及び東洋の宗教思想を防止する能はざりしことは、吾人のすてに述べし所なり。然らばユデアの宗教思想はこれによりて如何なる進歩と改釋とを行ひしか。吾人は先づヘルシア思想の影響より述べんとす。聖靈の領域、天使と惡魔、復活と審判及び來世の賞罰等に關する思想は、實にヘルシアの宗教より來れるものと見るべきなり。勿論ユデアに於ても古來知恵、聖典、聖靈及び光榮の如き神の屬性は、屢詩人によりて人格化せられたることあれども、今やそは全くヘルシア教に於けるアムシヤパン(Amchspan)の如く、神と世界との間に介在する獨立的人格となり、從來神の使

者なりしエンゼル(天使は戲曲的に發展して種々なる階級を生じ、神が世界を支配する時、その命を奉じて一定の職責を盡すべきものとなり、國民も個人も共に天使を守護神とし、自然現象さへも亦彼等によりて支配せらるゝ者と考へらるゝに至れり、而してペルシアの宗教が聖靈と悪魔とを對立せしめ、世界をこの善悪二靈の争闘場となせしが如く、ユデア教も亦古來民間に於て崇拜せられたる鬼神を天より墮落せる悪魔となし、サタン(Satan)をその首領として神意を破壊するものと見たり、斯くして約百祀中には神の從者なりしサタンも今は神に對立するものとなり、人類の祖先を誘惑して罪と死とを神の善なる創造物中に挿入せるものと考へられ、且つサタンの臣なる悪魔を以て心身に害ある疾病の原因となせり、故に當時の人心はこの邪惡なる靈力を驅逐せんが爲めにその肝膽を碎きつゝありき、茲に於て彼等は又ペルシア宗教の中に見ゆる神の最後の勝利に關する信念を繼承し、之によりて、聖なる民は救濟せられ、敬虔なる人は復活すべしとの希望を懷くに至れり。

斯くの如き未來に關する思想は西曆紀元前後二世紀間に互りてユデアの宗教

思想を代表する黙示録の主要なる問題にして、かのマカベウス(Maccabees)の時代に著されたるダニエル(Daniel)書を以てこの思想の嚆矢となす、そは一種の宗教的歴史哲學を説きて世界の發展を四期に分ち、各期を三千年となし、最後の時期をばあらゆる異教國の没落して、聖なるユデア人の永久的王國の建設せらるべき時なりと豫言せり、然るに當時國運の疲弊より來れる厭世思想とペルシアより輸入したる二元的世界觀とは、聖なる國民の救濟を自然的經過によりて來たるものと考へしめずして、必ずや世界の形勢を一變する奇蹟的悲劇に伴ふて實現せらるべしと見たり、然らばこの超自然的なる神の王國は如何なるものなるべきか、そは地上に出現すと雖、なほその到來によりて古代の敬虔なる人は其幸福を享けんが爲めに死より復活し、信仰なき者は奈落の底に沈みて永久の苦を受くべしとなせり、斯くしてペルシア思想の影響はダニエル書に現はれたる復活の希望を確的となし、ヘノク(Henoch)の如き黙示録に於ては來世の賞罰に關して、信仰なきものは地獄に落ち、敬虔なるものは天の樂園に入るべしとの思想を生ずるに至れり、實に世の惱に疲れたる當時の人心は、敬虔なる人に來たるべき

來世の幸運を望みて、自己に慰安を與へ、靈魂の不滅なるべきを信じて神の國を憧憬しつゝありしなり。然らば來たるべき世を實現する救世主の人格は如何。時と人によりて各、其見る所を異にすと雖、要するに下の二種に分つを得べし。一はヘノクの黙示録にして、之によれば救世主は超自然なる半神的人格を有し、世界の創造に先ちて神と共に居り、一定の時期に及びて世界を審判し、ユデア國民を救済せんが爲めに天より來たる神秘的實在なりき。されど西曆紀元前一世紀の中葉に著はされたるソロモン詩篇(Psalms of Solomon)によれば、救世主は古來の豫言者が理想とせる姿に於て畫かれ、地上に生るゝダビデ王家の後裔と見られ、神の助力によりて異教徒を亡ぼし、正義によりてユデア人を支配すべしとなせり。斯くの如き宗教思想の中に於て吾人が特に記憶せざるべからざるはエッセニス派(Essenes)の宗教思想なりとす。故に我等は茲にその特色に説き及ばん。要するに彼等の特徴とする所は、只その生活方法と道德的觀念とにありき。即ち彼等はユデア教に共通なる政治的色彩を解脱して、平靜なる遁僧的生活の中に禁欲主義を固執し、一種の教會的組織を作れる宗教的團體なりしなり。而して或る者

は耕作し、或る者は牧畜し、或る者は手工を業とし、時に卜占と醫術とに秀てたるものあれば民衆の需に應じてこれを行ひ、且つ共產主義を執りて私有財産を許さず、商業は彼等の嚴禁する所、奴隸制度を非難し、結婚を輕視せり。何となれば結婚は妻への愛情と子孫への配慮とによりて人の自由を奪ひ、彼等をして利己的ならしむるが故なり。彼等は又常にユデア教の律法を無視せざりしと雖、その最も重大視せる儀式は日に一回必ず冷水に浴することによりき。之を洗禮と云ふ。而して彼等の道德思想は神と美德と人との對する愛の中に含まる。神への愛は彼に對する信頼と生活の純潔とを要求し、美德への愛は克己、節制、無欲によりて表はされ、人類への愛は慈悲、嚴肅、同情及び弱者を憐み、老人を尊敬することを意味す。且つ彼等の多くは靈魂の不滅と神の救済とを確信せしが故に、信仰の爲めには喜んで死の苦痛をも忍ぶを常とせり。

終りに望みてギリシア思想の影響によりて成れるユデアの宗教思想を見ん。この兩思想の混融は最も圓熟せる形に於て、ユデアの神學者なるフィロ(Philo)西曆紀元前二〇頃の思想に現はる。フィロの世界觀はプラトールと同じく二元的な

りき。かれの説に従へば神は純なる靈にして有限を絶し、束縛を脱し、物質の正反對を示すものなるが故に、物心の間には何等の類似を認めず、ある媒介者のあるにあらずんば両者は互に交渉する能はざるなり。而してかれはその媒介者をばエンゼル(天使)となし、世界を支配して之に秩序あらしむるロゴス(Logos)即ち理性に従属するものと見たり。これフィロソフがストア哲学より學び得たる所なり。ロゴスは神の長子にして神より出て、人類を涙の谷より救済して永劫の歡樂に充てる天國に導くものなりき。何となればフィロソフは又プラトールと同じく人の靈は天上の觀念界より墮落して地上に來り、肉體の中に幽閉せられたるものと見たればなり。故に人類の最大目的は拘束繁々感覺界を解脱して、自由なる觀念界に上ることにあれども、彼等は自己の能力を以てしてはこの目的を達する能はず。必ずや神人間の媒介者なるロゴスの救済によらざるべからざりしなり。斯くしてプラトールの救済的努力即ち眞善美に對する憧憬の念は、身を卑うしてロゴスの指導に従はんとする敬虔の情となれり。而して吾人は後の章に於て上に述べ來れるかの種々なる宗教思想が、如何なる姿と形とを採りてキリスト教となり

又如何なる影響をキリスト教に與へたるかを述ぶる時あるべし。

キリスト教

一 イエスの生涯

「經驗學派の大哲學者ジョン・ステューアート・ミル曾て曰く、幾千百回人類の記憶を促すも尙足らざるものは、往時ソクラテスと云へる人の世に存せしことなりと。されど之にも勝りて絶えず人類の記憶を促す必要あるは、イエスキリストと呼べる人の曾て地球上に生存せしことなり」とは、アドルフ・ハルナクがその名著「キリスト教の眞髓」に於て述べし所なり。イエスキリストが斯くの如く人文史上凡ゆる偉人豪傑にも勝りて、吾人の回想を値するや否やは暫く間は、我等は先づ當時のユデア民族が組織せる社會状態と、その産物として生れたるイエスの天職とを述べんとす。

ソロモン王朝の榮華は實に槿花一日の誇に等しかりき。曾てイスラエル人が常

勝の神として崇拜せるエホバの威力も、バビロンの虜囚以後順に落日の勢を示し、國民は隣邦の爲めにその獨立を奪はれて、復た起つ能はず。されど尙彼等は正義の神によりて天國の來たるべきを予期し、かくて露滋き世に僅なる光明を認めつゝありしと雖、西曆紀元前一世紀頃に及びて、ローマ帝國の配下に降り、彼等が期待せる天國も終に實現せらるべくもあらず。斯くてかれ等はローマ總督府の壓制に苦み、稅吏の收斂に泣き、一日として涙痕の絶ゆる時なかりき。加之、學者及びパリサイの徒は、當時の執政者と交通する機會を有せしが故に、比較的優良の地位を占め、無知なる民衆を侮蔑して之を虐遇せり。彼等の主義とする所は禮拜上の儀文と、之を行ふ正義とにありしが爲め、無知にして不明なる者に同情と慈悲とを失ひ、遂に彼等をば神も亦救ふ能はざる罪人と見、來たるべき神の國に入る能はざる者となすに至れり。斯かる壓制と侮蔑との下に生を享けし憐むべき國民には、實に生活は苦痛を意味し、人生は「涙の谷」に等しかりしなり。かれ等は天を仰ぎて祈れり。番人よ夜は未だ明けざるかと、實に暗黒の夜は未だ明けざるか。そは永遠に明けざるべきか。否何時かは東天紅を潮して上る旭日の爲めに悲

雨凄殺の暗夜は明けざるべからず。何となれば人類は希望に生きて絶望に死し、光明なき所には只死あるのみなればなり。

然らばこの暗黒の夜は如何にして明けたるか。そは誠にイエスが畢生の事業なりき。彼は涯しなき迷路に救済の導者を求めつゝ、彷徨へる小羊の如き人々を救ひ、これに安立の地を與へんが爲めに來れるなり。イスラエルの迷へる小羊の外に我は遣はされず。馬太一五の二四。實にイエスが世に出てし天職はこの一語よくその全般を盡したりと云ふべし。然らば彼が生涯の事蹟は如何。

吾人はイエスが生涯の事蹟に就いて、その多くを語る能はず。何となれば他の宗教的天才と等しく、彼が一言一行は殆ど凡て宗教的即ち神話的色彩を帯び、古來傳へらるゝ傳説の多くは一も信を置くに足らず、就中信憑するに足る共觀福音書(馬太、馬加、路加)の如きも、尙彼が短き公生涯を傳へたるに過ぎざればなり。故に我等はこの稀少なる文献に徴し、比較的事實として認め得る部分を綜合して、不完全ながらも彼が生涯を叙述せんとす。

イエス (Jesus) は西曆紀元前四年、パレスタインの邊陲ガリラヤのナザレに生

父をジョセフと云ひ、大工を業とせり。福音書がその母と兄弟とのみを語る所より見るに父は早く世を去りしならん。而して彼が三十才を越えて公の活動に入る迄の生活に至りては、吾人は何等の信ずべき史蹟を有せず。偏に暗中摸索の感なくんばあらず。然れども彼がその後の性格より見るに、吾人は彼が従來の生活に大なる變化なく、平坦なる世路を辿りしことを推測するに難からざるなり。而して當時ヨルダンの野に一人の豫言者ありき。所謂バプティスマのヨハネ即ちこれなり。彼はヨルダン河の岸に住みしエッセンス派に屬し、熱烈なる信仰を以て神の國に近づけることを傳へ、國民に悔ひ改めよと教へたり。思想界の過渡期に生れて人生の歸趨に惑ひ、心私かに神の音信を望みし當時の人心には、實にこの野に叫べる人の聲は空谷の響音に等しかりき。民衆は競ふてその膝下に走り、來たるべき神の國を迎へんが爲め、ヨルダンの流に洗禮を受けぬ。イエスも亦その中にありき。洗禮を受けて水より出てし彼は昔日の彼にあらず。汝はわが子とて呼ぶ天の聲を聞きて、既に心奥に熟しつゝありし彼が天職の自覺は一時に爆發せり。後彼は道を修めんが爲めに荒野に下り、內的即ち心理的に幾多の悪魔と戰

ひしも最後の勝利を得、斯くてイスラエルの迷へる羊を救濟する者は我どとの信念を懐くに至れり。

故郷に歸りて後幾程もなく、イエスは人類救濟の途に上りぬ。されどかれの生地ナザレはその活動に不便なりしが故に、去りてガリラヤ湖の岸に榮えしかペナウンに赴きぬ。この地に於て彼はイスラエルの十二族に因み、弟子の中より十二人を選びて傳道の助手となせり。後世之を十二使徒と云ふ。イエスは道を説くに人を選びざりき。彼は法を語るに時と處とを擇ばざりき。而も病に惱める者を見て、彼は同情の念禁ずる能はず。己を信じて來たる者あれば、必ずその病を癒し、惱める者に平安を與へぬ。

イエスは必ずしも新宗教を開かんと欲したるにあらず。彼は只祖先に約束せられたる神意を實現して、イスラエルの迷へる人心を安んぜしむるを己が天職と見たるなり。されど之が爲に、彼は宗教の形式にのみ拘束せられしパリサイの徒の怨を買ひ、遂に彼等が嫌惡の中心となりぬ。茲に於てイエスは最後の勝敗を決せんが爲に、エルサレムに上れり。イエスは決して死せんが爲に、或は十字架上に

罪名を負はんが爲めに、エルサレムに上りしにあらず。福音書中に、彼が征途に上らんとする時、其心事を洩らせし詞あり。曰く、われ火を地に送らんが爲めに來れり。我何をか望まん、その火の既に燃えたらんを。されど我に受くべきバプティズマ（洗禮）あり。わが心の痛いかばかりぞ。その成し遂げられんまでは、路加一二の四九以下と斯くの如くかれは己が天職の容易に成就せらるべくもあらず、必ずや猛烈なる戦闘の來らんことを豫期せり。かれは戰場に向ふ勇士の如く死を覺悟せしと雖、尙この覺悟たるその一面に於て生還の希望に輝ける覺悟なりき。斯くして彼は弟子等が止むる詞をも用ひず、必勝を期して遠征の途に上りしなり。

イエスが國都エルサレムに入りしは、逾越祭を眼前に控へしときなりき。故に祭典の爲め都にありしガリラヤ人の群集は、忽ち彼を認めて歡呼の聲を擧げ、來たるべきダビデ國の王として彼を迎へたり。彼は直に神殿に赴き、商人を逐ひ、器物を破壊し、一見暴徒の如き行爲を敢へてしたるが故に、祭司長を初め貴族黨も彼を惡むに至り、一刻の猶豫もなく彼を捕へて高等法院に訊問し、直ちに之を總督府に渡せり。斯くてさしも勇しかりき必勝の希望は脆くも破れて、遂に彼は十字

架上の露と消えぬ。茲に於て弟子等は事の全く就らざるを知り、絶望の餘倉皇としてガリラヤに通れ歸れり。イエスは法廷の審問に答へて救世主の自信を吐露し、天の雲に乗りて再び來り、神の使命を完うせんことを約しぬ。即ち彼は尙最後の勝利を確信して十字架上に死の苦みを受けしなり。

二 イエスの福音

イエスは悔ひ改めよ、神の國は近づけりてふ簡單なる宣言を以て、彼が宗教的活動の端緒を開けり。この點に於て、彼は實にヨハネの弟子なりと云ふべし。然らば來たるべき神の王國とは如何なるものなりしか。そはユデア人の一般思想と同じく、イエスに於ても亦地上のもの有形的のものなりき。彼は溫和なる者地を繼ぐべし（馬太五の五）と教へ、弟子等にも來らん神の國に於て再び食卓を共にせん（馬加一四の二五）ことを誓へり。彼の思想が如何に當時の國民的宗教思想

と離れざりしかは、世革りたる時使使等は十二の位に坐し、イスラエルの十二族を擲き馬太一九の二八、アブラハム、イザイア乃至ジブの如き列祖も神の國に坐すべし(馬太八の一一)と云へるに徴しても明かなり。

而してこの神の國はユデア人に對しては、全く將來のものなりき。この點に於ても亦イエスは忠實なるイスラエルの家の子なりき。故に彼が説ける福音は、凡て來たるべき神の國に對する希望と約束との言葉なりしなり。されど神の國は遠き將來のものにあらず。彼は此震天動地の大活劇が、既に目前に迫れりと見たり。「こゝに立てる者の中、神の國が權威もて來たるを見るまでは死なざる者あり(馬加九の一)とまで、彼はその國の接近せることを語れり。否、彼はなほ一面に於て神の國が既に現はれつゝあることを信ぜしなり。我若し神の靈によりて鬼を逐ひ出さば、神の國は最早汝に來れるなり(馬太一二の二八)の一語は、よく此間の消息を洩らして餘りありと云ふべし。彼は實に神の國を現はさんが爲めには、先づサタンを亡さるべからずと考へしなり。

然らば神の國は如何にして來たるべきか。その來たるや、豫兆によりて來たるに

あらず、突如として來たるなり。例へばノアの洪水の如し。故にイエスはその口をの時を知る者は唯わが父のみ。天にある使者も子も之を知る能はず(馬加一三の三二)汝等常に祈りて神意に背かず、義務を遂行して神の國の來たるを待つべし(馬太二四の四二)と説けり。而して神の國の來たるは、この世の罪惡を亡さんが爲めに來たるなり。故に人の子の來たるは、牧者が綿羊と山羊とを分つが如く、善人と惡人とを分ちて、前者を天國に、後者を地獄に送らんが爲めに來たるなりと教へぬ(馬太二五の三一)斯くしてかれの所謂神の國と審判とは、國民的色彩を脱して個人的のものとなれり。彼が來たるべき審判を語るや、常に異邦人の滅亡を云はずして、只個人の將來に關する運命を説きしのみ。故にかれは忠實なる僕は主の喜に入り、不忠なる僕は榮光の國に入る能はず(馬太二五の一四)と教へ個人の功罪によりて將來の運命は決せらるとなしぬ。而して彼はメシア(救世主)はダビデの家より出づとの信仰に反對し、政治と宗教とを分ちて、カイゼル(皇帝)のものはカイゼルに與へ、神のものは神に與へよ(馬太二二の二一)と説けり。この點に於て、彼は明かにユデア的精神を蟬脱せりと云ふべし。これ國家の獨立を失へるユ

デア人の永き経験の結果、遂に政治的成功の念を断ち、他に之と代はるべき安住の地を求むる人心自然の要求より來れる産物なり。故に彼は政治よりも宗教を重んじ、ユデア人よりも人間を貴び、イスラエルよりも神を尊敬せり。

然らばイエスが所謂神とは何ぞ、彼は神と呼ぶに、父なる語を用ふるを常とせり。神を呼びて父となすは、宗教史上敢へて珍とするに足らず、今イエスが神を以て父となせし心理的経過を考ふるに、其中に一の新要素を含まず、敬虔なる人が神を父と呼びし心理的経過とその軌を一にす。只新しきは、彼が何人も企て及ぶべからざる宗教的経験より得たる神の内容にあり。故に吾人は次ぎにこの父なる神の性格を見、以てイエスが之に對する態度に言及せんとす。

イエスの神は生ける神にして、歴史及び個人の運命を支配し得る人格的の神なり。當時ユデア教は、學者及びパリサイの徒によりて煩瑣なる律法の中に生命を失ひ、生ける神は只理論上ののみ存して實際上に存せず、爲めに生氣ある神は、何處にも経験せられざりき。この時に當りてイエスは獨りこの枯渴せる外殼の中に、生命ある神を経験し得たるなり。従ふてかれは外的にして儀式的のもの

排し、われ舒恤を欲して祭祀を欲せず(馬太九の一三)の一語によく己が全精神を吐露せり。而してこの活ける精神的の神が、彼にとりて天地の主、萬能の神なりしことは論を待たざるなり。

斯くの如き萬能の神は、同時に罪惡と相容れざる本質を有し、己が善にして完全なる意志を飽くまでも貫徹せんとする正義の神として現はされたり。イエスが神の國は近づけりと傳へ、悔ひ改めよと教へて國民に覺醒を迫りしも、實に之が爲めに外ならず。

されど彼は正義の意味に就いて、從來のユデア的精神を超越し得たり。何となれば彼の所謂正義とは、國民的乃至律法的のものにあらずして、暖き愛の光に包まれたるものなりければなり。實にイエスの神は愛の神にして、愛はその本質なり。故に神は異邦人を惡み、或は人類をしてかれに對する恐怖の念より奴隸的服従をなさしむるが如き暴君にあらざりしなり。父なる神の慈悲は、汎く萬物に及ぶ。況んや萬物の靈なる人間をや。父は我等が求めざるに先ちてその足らざる所を知り給ふべし(馬太六の八)されば、求めよ、與へられん。尋ねよ、必ず逢はん。叩けよ、

然らば聞かれん(馬太七の七)。
 而してイエスの神は又悪人をも憐み給ふ神なりき、父よ我等が負債を免し給へ(馬太六の一二)とは、弟子等が常に神に對して祈れる詞なりしなり。これ實にイエスが深遠なる宗教的經驗の結果にして、彼等が如何に専心神に仕ふるも、尙人生は依然として涙の谷なるを見、その原因を内に求めて人心に抜くべからざる根底を有する罪惡に起因すとなしたるに由るものなり。何となれば、かく人類は其本性に於て罪惡に滿つる限り、功罪によりて賞罰を課する正義の神の觀念を以てしては、到底我等は幸福を得べき道なく、永劫にこの惱多き現世の苦を嘗めざるべからず、これ豈に吾人々類の耐え得る所ならんや。故にイエスは遂にその本性に於て罪深き人類も、一度神を顧みてその慈悲を祈らば、神は之を憐みて洪大なる恵の露を降し、以て吾人を救済すべしと説くに至れり。
 然らば我等は如何なる態度を以て、斯かる神と天國とを期待すべきか。イエスが山上の説教(馬太五六、七)は、實に吾人が現世に於て守るべき行爲の標準を云ひ盡したるものと云ふべし。彼は神意に違はざるを以て、天國に入るべき通行券と見

たり。然らば神意とは何ぞや。一般のユデア人は、モーゼの律法を以て神意の宿る所と見たり。この點に於て、イエスは又忠實なるイスラエルの子なりき。彼が神の國に入るべき道を問はれし時、これに答へて、律法に録されしは何ぞ、汝如何にか讀む(路加一の二六)と云ひ、天地の廢るは律法の一畫、一畫の廢るよりも易しと説き、己が使命を律法と豫言者との廢棄にあらずして、寧ろその成就にあり(馬太五の一七)と考へしに見るも、如何に彼が律法を尊重せしかを知るべきなり。實に彼は律法に於て神の聖なる意志を認めたり。
 されどイエスの態度は、當時の學者及びパリサイの徒が律法に對する態度とは少しく其撰を異にし、彼は律法の一言一句に拘泥せずして、之を改釋し、傳來の正義に代ふるに新なる正義を以てせんとせり。例へば、かれが「目には目、齒には齒を報ひよ」の如き舊約書中の教訓を否定したるが如きこれなり。然らば所謂新なる正義とは何ぞや。他なし、キリスト教の大綱たる「愛」の精神を云ふ。凡ての人に爲られんと欲ふことは、汝等又人にもその如くせよ(馬太七の一二)とは、彼が金石の文字なりき。實に彼は全心を捧げて神を敬愛し、自己の如く隣人を愛するを以て、最

も神意に合するものと見たり(馬加一二の二九以下)斯くて敵と味方との差別を絶し、汝等の敵を愛せよ(馬太五の四四)とまで主張し、以て凡ての人は神の前に平等なる價値を有すとすに至れり、而して彼は内心の自由を尊重し、布施も、祈禱も、斷食も、悉く衷心の至情より出づるにあらざれば價値なく、(馬太六の一以下)殺人又は姦淫の如きも、其行爲のみ悪しきにあらずと見、馬太五の二一以下及び二七以下)人を害ふものは外より來らず、内に生ずる惡念によるものなりと説けり(馬加七の一四以下)要するに彼の主眼とする處は、愛へず、顧慮せず、神に對する絶對の信頼と、敬虔とより湧出する熱誠を以て、善に進む無邪氣なる態度にありき、而してこの態度は、一見、イエスの宗教思想に厭世的色彩を與へたるが如し、即ち彼は神の國に入らんとせば現世に執着せず、財産を抛ち、父母、妻子、あらゆる身邊の境を棄て、神意に従ふべし(路加一四の二六)と説き、手乃至目が汝を躓かさば、それを切り棄てよ(馬加九の四三以下)を教へぬ、されどこれは決して消極的意味を含むものにあらずして、イエスが積極的原理を示すものと云ふべし、故に我等は其代表とも見るべき二三の例によりてその眞意を窺はん、曰く、それは生命を完うせ

んとする者は之を失ひ、わが爲めにその生命を失ふ者は之を得べければなり、若し、人全世界を得ともその生命を失はば、何の益あらんや(馬太一六の二五)と、又曰く、汝等の中にて大ならんと欲ふ者は、凡て人の僕とならん、又汝等の中にて首たらん、と欲ふ者は、凡て人の僕とならん(馬加一〇の四三以下)と、而して前者は、眞の救濟即ち究極目的の成就是、忘我と服従と神意の實現とにあることを意味し、後者は、各人の社會的價値は全世界に對するかれの貢獻の如何にあることを意味す、即ちイエスは自己の爲めのみを計り、一時的満足に永遠の目的を失ふ個人主義を排し、人類社會の義務中に神意の完成を求むる忘我の愛に於て、人生の最も豊富なる内容と永久の満足とを發見せしなり、死して生きよの箴言は實にイエスが倫理的原理にして、如何なる迫害も亦動かすべからざる信念なりしなり、

三 原始キリスト教

學者及びパリサイの徒との戦闘に於けるイエスの敗北は、その弟子等に對して實に晴天の霹靂に等しかりき。彼等はこの一撃によりて、イエスに囑したる希望と信頼とを破壊せられ、落膽と懷疑との餘り倉皇としてガリラヤに走り、就中かれの親任を博したるペテロさへも今はその師を拒否して、十字架の傍には只二三の忠實なる婦人が、イエスの悲惨なる最後を見届けたるのみ。されど弟子等が斯かる怯懦なる態度は一時的のものに過ぎざりき。彼等は幾程もなく新なる信仰と希望とを懷き、猛然としてエルサレムに上り、遂に熱烈なる傳導者となりて原始キリスト教を創設するに至れり。

然らば弟子等をして再び起たしめし新信仰とは何ぞや、それは、イエスは復活せりとの信念にてありき。前に述べしが如く、彼等はイエスの敗北を耳にして急遽ガリラヤに逃れたりと雖、漸く恐愕の念の薄らぐに及び、師の偉大なる人格の力は忘れんとして忘るゝ能はず。さしも崇高なる品性に生きし豫言者が如何にして十字架上に死滅するの理あらんや、必ず復活して神の側に上りしならんとは、彼等の心奥に萌芽せし信念なりしなり。斯くして此内心の要求は、或る機會に遭遇

して彼等の五官を刺戟し、こゝに復活せるイエスの幻影として現はれぬ。こは恰も父を失ひし孝子が眷戀の情に驅られてその父を復活せしむるが如し。

斯くて弟子等はイエス復活の信仰を懷くと同時に、救世主の信念を恢復するに至りぬ。既にイエスは死より甦りて永遠の生命を得、天の高さに上れり。然らば彼が豫言せる神の王國は如何にして實現せらるべきか。茲に於て彼等はイエスを天にありて神の右に座し、先にダニエルが豫言せし如く、再び雲に乗りて地上に降り、現世の惡を滅ぼして樂しき天國を實現すべき神的實在を見るに至れり。イエスは自稱して「人の子なり」と云ひぬ。されど弟子に至り彼は「神の子」となれり。これ實に彼等が教理の中心にして、神の國は近づけり。の福音は今やキリスト・イエスの福音即ちイエスによりて神の國は來たるべしとの福音となれり。而してこの福音を民衆に傳へんとする新運動の首領はかのペテロなりき。

されどユデア人の宗教的信仰より見るも、イエスが悲惨なる最後は彼をしてメシアたらしむべく餘りに不合理なる所ありき。故に弟子等はユデア人の最も信憑せる舊約聖書を借り來りて、イエスの運命を神意によりて豫定せられたるも

のとなし、以てその信念を保護せんとせり。即ち彼はイザイア書(五三)に見ゆる義人及び豫言者の惱を探りてこれをメシアの惱みに適用し、また義人が死の苦みを免るべきを歌へる詩篇(一六の二〇)を引いてメシア復活の意に改釋せり。加之、彼等はイエスの死に現はれたる神意を説明せんとして、イザイア書(五三)を利用し、メシアの死は神が罪人をも救済する深き愛の啓示にして、神の子イエスは罪深き人類に代りて、その罪を贖へる者なりと説きぬ。而して彼等が宗教的生活の特色を見るに、それは無邪氣なる熱誠の發露にありき。苟くもイエスを信ずる者は悉く同胞として歓迎せられ、貧民救済の事業を生じ、共產主義の實行となり、終に勇敢なる殉教に於てその至極を見るに至れり。

されど當時、それは未だユデア教と甚だしき間隔を有せざりしが故に、かれ等は異教徒としてユデア教徒の迫害を受くること少く、比較的平和なる生活を送るを得たり。然るにこの状態をば遂に破壊して、キリスト教會を獨立するに至らしめし誘因は、實に異邦人に對する傳道にありき。初めイエスの教理を信ぜしユデア人は、迫害の爲めに次第にイェルサレムを逐はれて小アジア、その他、地中海岸の各

地に移住してキリスト教徒の團體を作れり。就中、當時アンティオキアに住せしユデア人の如き、その過半数は律法を無視せる信徒よりなり、自ら卒先して異邦人のあひだに傳道し、新なる教會を組織するに至りぬ。この教會こそ實にキリスト教の死活問題を包藏せし酸酵素とも云ふべきものなりき。然らばこの死活問題とは何ぞや、一は律法の價值に關し、他はキリスト教の獨立に關するものなりき。而してこれ等の難問題を解決せんとしてあらはれたる人傑をかのパウロとなす。

四 パウロのキリスト教

パウロ(Paul)はシリシヤの都タルサスに生る幼にして信仰深き家庭に人となりしが故に、彼は夙に神に對する絶對的歸依の宗教的感情に覺め、その漸く長ずるにあよびて、嚴格なる律法を遵奉せる學者に就きて神學を修めたるが故に、かれ

は律法の要求するところを遂行して、神の前に正義の人たんとする努力を生ぜし。加ふるにタルサスは當時ギリシア文明特にストア學徒の巢窟なりしが爲め、彼はこれ等の影響をも受けその結果として、彼の思想はストア學者なるセネカ(Seneca)に酷似する所ありき。故に人動もすればセネカをパウロの師なりと云ひ、或はパウロをセネカの師なりと云ふ。而して又タルサスは管にギリシア文明の中心地たるのみならず、諸國民の神秘的宗教の集各地なりしが故に、かれはこれ等の感化をも受けたるが如し。要するにパウロは斯かる境遇の中に人となりしなり。

パウロはかの殉難者ステファノ(Stephanus)の迫害を以て歴史的舞臺に現はる。最初、彼はキリスト教を蛇蝎の如く嫌惡したるが故に、有司に乞ふてその教徒を迫害すべき許可を得、神に代りて不信者を誅する者は我なりとの自覺を懷き、猛然としてダマスカスへ向ひぬ。されど彼はダマスカスに近づくに従ひ、次第にその勇氣を失ひ、遂に處女の如き改宗者としてかの地に達せり。使徒行傳(九の二二以下)は具さにパウロがこの轉心の事實を語る。要するに、彼はダマスカスへの途上、

天より來れる聲乃至光によりてイエスが今なほ生きて世にあることを知り、終に彼をメシアとして信ずるに至りしなり。換言すれば、彼はイエスの幻影に接して轉心するに至れるなり。

されど斯くの如き轉心は突如として來たるものにあらず。然らばこの經驗に先てるパウロが心理的條件は何ぞや。そは實にかれの内心に蟠れる疑念にありき。彼はキリスト教徒が如何なる迫害をも堪へ忍びて敢へて意に介せず、反りて其敵をさへ愛する心情を見ては、眞理は己れより彼等にあらざるかの疑念を起さざる能はざりき。斯くして彼が從來の信仰と活動とは、果して神意に契合するものありや否やの疑問は、かれの心情に「荆ある鞭」使徒行傳二六の一四として伏在するに至れり。然るに今や、彼は自らキリスト教徒の迫害者として、ダマスカスに近づくに従ひ、一刻の猶豫もなく此問題を解決して、行爲の方針を定めざるべからず。さなきだに人をして恍惚たらしむる砂漠の熱氣は、かれの心奥に蟠れる敬虔なる情操を刺戟して、遂にイエスの幻影と現はれ、こゝに新なる信仰の光に浴するを得たるなり。

斯くしてパウロは新信仰の中に生きるに至りしと雖、かれが従來の境遇と感化とは、彼をして他の使徒等と異なる宗教的意識を懐かしむるは、蓋し自然の數と云ふべし。故に一度天來の聲に夢覺めて、ユデア教を超越せしパウロは、古來の偏見を打破し、キリスト教をばユデア教より獨立せる世界的宗教として經驗せり。斯くて彼は異邦人の傳道を思ひ立ち、異國の使徒として終に世界の舞臺に現はるゝに至りぬ。

パウロは轉心の後三ヶ年を経て初めてエルサレムを訪ひ、ペテロ乃至ヤブ等と面接するを得、後に去りてシリア及びシリシア地方に赴き、十四年間の平和なる生活をなせり。されど此平和は永續する能はざりき。アンティオキヤ教會が漸次隆盛に赴くに從ひ、此律法を無視せる新教會はエルサレム教會の憎惡する所となりしが故に、パウロは事の正邪を決せんと欲し、バルナバス(Barnabas)と共にエルサレムに上りぬ。今や律法の價值及び教會内にある異邦人の權利等に關する問題は、初めて使徒乃至信者等の前に提出せられたり。されど彼等の多くは、其判斷に惑ひぬ。獨この難關に處して惑はざりしものは、只教會の首腦なるヤコブ、ペ

テロ及びヨハネ等ありしのみ。彼等はパウロの主張を容れて、彼を異邦人の使徒たらしめ、以て傳道の區域を二分し、茲に初めて平和なる解決を見るを得たるなり。されどこれは未だ根本的解決にあらずき。後に至てペテロがアンティオキヤ教會を訪問せし時、彼はパウロと再び律法に關して衝突するに至りぬ。茲に於てパウロは決然公衆に對して、ペテロが矛盾せる態度を攻撃せり。有名なる加拉太書はこの反對論を記せるもの。と云はる。斯くして彼は左にユデア人の反對を受け、右にローマ官憲の迫害を忍び、東西に奔馳してキリスト教の傳道に勉めたり。然るに西曆紀元六四年ローマ市に於て、かれは終に殉教の死を遂ぐるに至りぬ。斯くして、異邦人の使徒はその天職に擲れたり。されどかれの遺せしキリスト教は、單に一民族の占有物にあらずして、全人類を救濟せんとする責任と能力とを自覺せる新宗教となれり。

然らば彼が新宗教の内容は如何。パウロがダマスカスへの途上、復活せるイエスの幻影を見てしより、彼に取て最も動かすべからざる眞理は、實にイエスは人類の救主なりとの思想なりき。直弟子等は只イエスをイスラエル人の救主とのみ

見たり、されどパウロは彼を全人類の救主と見るに至れり。これ實に彼が根本的信仰にして、又説教の中心點なりき。

パウロに従へば、イエスは律法のなす能はざる人類の救済を成就せんが爲めに人間の姿して地上に送られし神の子なりき。故に彼にとりては、肉體を具へたるイエスはクリストの眞性にあらずして、それは純然たる靈的實在なりしなり。故に彼はクリストの先在を説きぬ。否、管にその存在を説きしのみならず、これを世界の創造的媒介者と見、萬有を造り、且つ保存する實在なりと見たり(哥羅西一の一五以下)。而して彼がクリストの超世界的實在性を認めたるは、ユデアの黙示録中の思想によるものと見るべく、神の肉體的現顯を説きしは、ギリシアの神話中に現はれたる化身(Incarnation)の思想によるものと見るべきなり。

斯くの如き神の子クリストは十字架上に磔殺せられぬ。神の子の死、吾人は爰に何等かの深き神意の存在するとに思ひ至らざるべからず。パウロに従へば、彼は神前に供へらるべき犠牲として死の苦を受け、吾人の罪を贖へりと云ふにあり。實に「神クリストにありて世を己れと和げたり」(哥林多後五の一九)の一語は、よく

パウロの眞意を盡せるものと云ふべし。然らば何故にイエスの死は人類の罪を救ふに缺くかべらざりしか。それは肉及びそれに宿れる罪の滅亡を意味すればなり。換言すれば彼の死は人類の根本的革新なりしなり。クリストにある者は新たに作られたる者なり。舊きは去りて皆新しく作るなり(哥林多後五の一七)。故にクリストを信ずる者は彼と共に死し、彼と共に甦るべし(羅馬六の四以下)。死して生きよの倫理思想は、パウロに於ても明確に云ひ表はされぬ。而して洗禮と聖晚餐とは實にこの思想を象徴せるものと見るべく、前者によりて肉體の罪は洗はれ、後者によりて吾人の生理的組織は變化せられ、我等はこゝに新人として生るゝなり。これギリシアの秘密教より來れる思想なるべく、例へば、水によりて罪の淨化を行ふミスラ(Mithra)及び聖餐を以て永生の保證となすアチヌ(Achis)の如き之に類す。斯くして洗禮と聖晚餐とは最も重大なる宗教的儀式となり、クリストを信ずる者は之によりて新人となり、復活して永遠の生命を得と考へらるゝに至れり。

然らばクリストによりて、罪と惱とより救はるべき人間本來の性情は如何。パウ